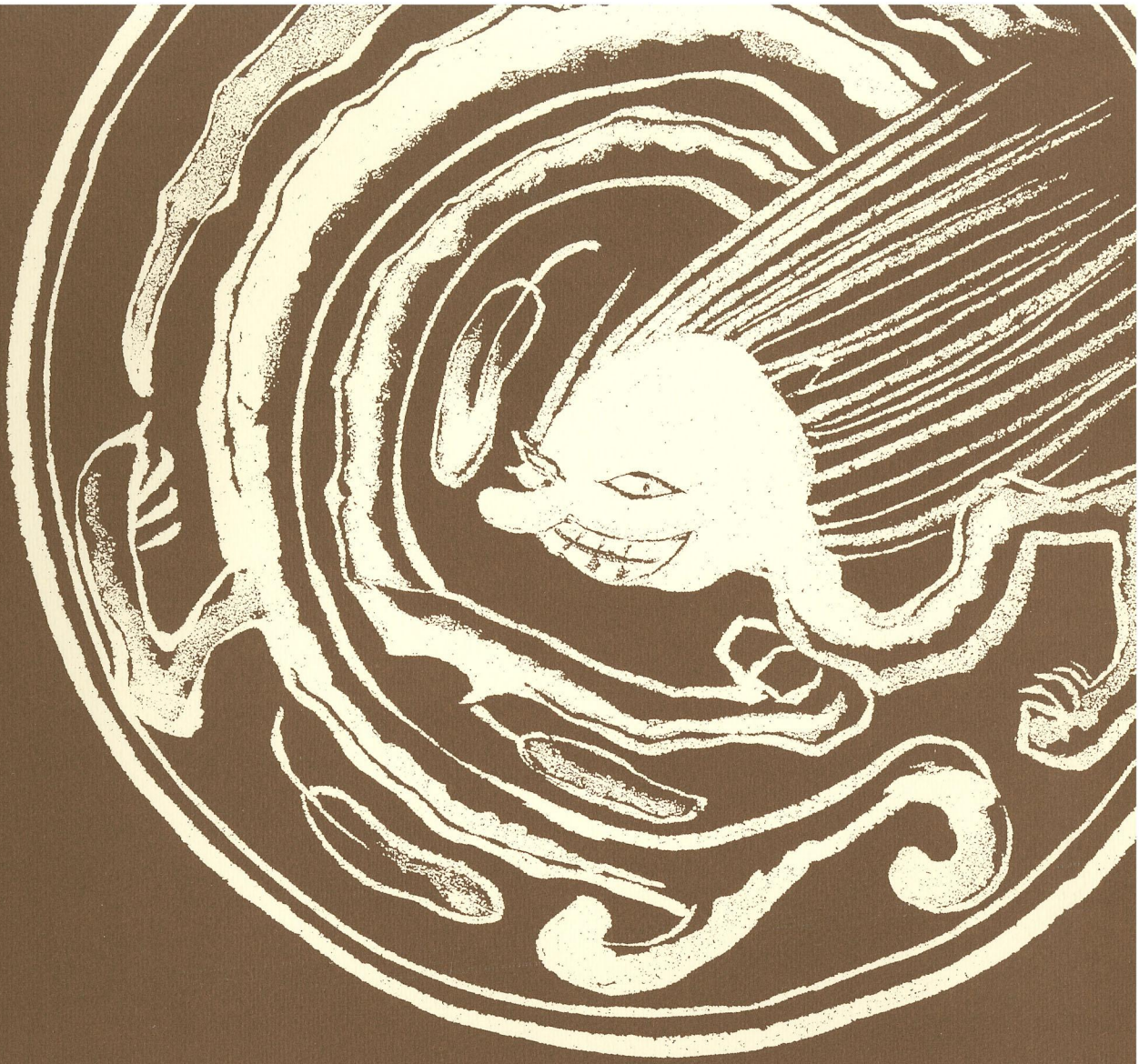


馬司遺跡

第一次発掘調査報告書

大和郡山市埋蔵文化財調査報告書第７集

大和郡山市教育委員会　2001

馬司遺跡第1次発掘調査報告書

大和郡山市教育委員会

例　　言

1　本書は、大和郡山市馬司町452-1～57-1で実施した発掘調査の報告書である。

2　調査は、奈良県西和土地改良事務所による「ふるさと農道緊急整備事業」の事前調査として実施した。

3　調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間

［試掘調査］

1999年11月８日～26日

［本調査］

1999年11月29日～2000年３月28日

調査面積

約2000㎡（試掘面積約500㎡）

4　調査は、以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川均（大和郡山市教育委員会　社会教育課）

補助員：束原真希子、谷村真慈、廣瀬勇也（以上奈良大学）、武田浩子（佐保女子短大OB）

作業員：安西工業（株）

事　　務

大和郡山市教育委員会社会教育課、奈良県西和土地改良事務所、奈良県中央卸売市場管理課、奈良県農林部耕地課

5　本書は、以下の分担で作成した。

製図・拓本・トレース

岡本智子（奈良大学）、山川

写真撮影

岡本（遺物）、山川（遺構）

執筆

山川（Ⅰ～Ⅲ章、Ⅵ章）

岡本（Ⅳ・Ⅴ章）

レイアウト

岡本（遺物関係全般）、山川（その他）

編集

山川

6　調査および報告書作成に際し、以下の方々に貴重なご教示・ご指導をいただいた（五十音順・敬称略）。

伊藤雅和、今尾文昭、江浦洋、大橋康二、岡本広義、小川一雄、川口宏海、北野隆亮、小池香津江、五味文彦、佐伯俊源、狭川真一、佐藤亜聖、嶋谷和彦、角南聡一郎、高田良信、竹田正則、立石堅志、中井一夫、中島和彦、中島圭一、橋本久和、畑大介、福田さよ子、藤澤典彦、藤田裕嗣、村井章介、本村充保、森下恵介、森毅、森村健一、山上雅弘。

7　調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。

8　現地調査に際しては、地元馬司町の方々にたいへんお世話になりました。記して感謝致します。

凡　　例

1　遺構実測図に示した標高は、東京湾平均海面（T．P）からのプラス値である。

2　遺構実測図中の座標は、国土座標の第Ⅵ座標系に基づくものである。また、図中矢印で示した方位は座標北を表す。

3　遺物番号は石製品および土製品を除く全てが通し番号になっており、実測図・観察表・図版それぞれの対照が可能である。

4　遺物実測図の縮尺は１／３を基本とし、石製品および土製品が１／２である。なお、火打石は現物より70％縮小している。

5　遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器・瓦がアミがけ、土師器は白抜きとしている。

6　土色および遺物の色調に関しては、『新版標準土色帳』に依拠した。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の契機および経過……1
Ⅱ　調査地の環境……3
Ⅲ　遺構
1．中世～近世の遺構
（1）SD-02 ……5
（2）SD-04 ……7
（3）SX-13 ……7
（4）SX-14 ……7
（5）SD-05 ……9
（6）SD-06（A･B）……9
（7）SX-07 ……10
（8）SD-01 ……10
（9）SD-15 ……12
（10）SD-07 ……12
（11）SD-13 ……13
（12）SD-14 ……13
（13）小字「堂ノ前」地区の盛土……13
2．古代および弥生時代の遺構
（1）SB-01 ……14
（2）SB-02 ……14
（3）SD-17 ……14
Ⅳ　遺物
1．中世～近世初頭の土器・陶磁器
（1）SD-02出土遺物 ……19
（2）SD-04出土遺物 ……32
（3）SX-13出土遺物 ……36
（4）SD-05出土遺物 ……36
（5）SX-13・14間堤内出土遺物 ……36
（6）SD-06A出土遺物 ……36
（7）SD-06B出土遺物 ……39
（8）SX-07出土遺物 ……39
（9）SD-01出土遺物 ……40
（10）SD-15出土遺物 ……43
（11）SD-07出土遺物 ……45
（12）SD-14出土遺物 ……45
（13）SD-13出土遺物 ……46
2．古代の土器および弥生土器
（1）SB-01出土遺物 ……46

（２）SB-02出土遺物 ……46
（３）SD-17出土遺物 ……46
３．その他の遺物
（１）瓦……46
（２）石製品……47
（３）土製品……47
Ⅴ　考察 馬司遺跡SD-02出土土器・陶磁器の年代的位置付け……52
Ⅵ　まとめ……65

図　目　次

図１　周辺地割および調査区位置図（S:1/5,000）…… 1
図２　周辺遺跡分布図（S:1/25,000）…… 2
図３　額安寺境内における整地痕跡（西より）…… 3
図４　若槻環濠完掘状況（南より）…… 3
図５　中付田遺跡素掘小溝完掘状況（南上空より）…… 3
図６　SD-02およびSD-07土層断面図（S:1/40）…… 6
図７　SD-04土層断面図（S:1/40）…… 7
図８　SD-05・06（S:1/40）およびSX-13・14（S:1/60）土層断面図 …… 8
図９　SX-13・14間堤護岸状況（東より）…… 9
図10　SX-14とSD-06の接続状況（東南より）…… 9
図11　SX-07遺物出土状況（左：南より　右：東より）……10
図12　SD-01（S:1/20）およびSX-07（S:1/40）土層断面図 ……11
図13　SD-15土層断面図（S:1/20）……12
図14　SD-13およびSD-14土層断面図（S:1/20）……13
図15　小字「堂ノ前」地区盛土土層断面図（部分）（S:1/40）……14
図16　SB-01・02およびSD-17平面図（S:1/40）……15
図17　SB-01柱列断面図（S:1/40）……16
図18　SB-02柱列断面図（S:1/40）……17
図19　SD-17土層断面図（S:1/20）……18
図20　SD-17土器（図49-313）出土状況平面図（上）および立面図（下）（S:1/20）……18
図21　SD-02 1層出土遺物実測図（S:1/3）……19
図22　SD-02 2層出土遺物実測図①（S:1/3）……21
図23　SD-02 2層出土遺物実測図②（S:1/3）……22
図24　SD-02 2層出土遺物実測図③（S:1/3）……23
図25　SD-02 2層出土遺物実測図④（S:1/3）……24
図26　唐津焼碗（120）の体部に残る接合痕 ……25
図27　SD-02 3層出土遺物実測図①（S:1/3）……26
図28　SD-02 3層出土遺物実測図②（S:1/3）……27
図29　SD-02 3層出土遺物実測図③（S:1/3）……28

図30　SD-02 3層出土遺物実測図④（S:1/3）……29
図31　SD-02 3層出土遺物実測図⑤（S:1/3）……30
図32　SD-02 3層出土遺物実測図⑥（S:1/3）……31
図33　SD-02 4層出土遺物実測図（S:1/3）……32
図34　高台内の刻線　左（189）、右（191）……33
図35　SD-04 1層および2層出土遺物実測図（S:1/3）……33
図36　SD-04 2層出土遺物実測図（S:1/3）……34
図37　SX-13、SD-05、SX-13・14間堤内出土遺物実測図（S:1/3）……35
図38　SD-06A　出土遺物実測図（S:1/3）……36
図39　SD-06B　出土遺物実測図（S:1/3）……37
図40　SX–07　出土遺物実測図（S:1/3）……38
図41　花文のスタンプ（229）……39
図42　摺鉢外面に残るハケメ（249）……40
図43　SD-01 1層および2層出土遺物実測図（S:1/3）……41
図44　SD-01 2層出土遺物実測図（S:1/3）……42
図45　SD-15 出土遺物実測図（S:1/3）……43
図46　SD-07 出土遺物実測図（S:1/3）……44
図47　SD-13およびSD-14 出土遺物実測図（S:1/3）……45
図48　SB-01およびSB-02 出土遺物実測図（S:1/3）……46
図49　SD-17 出土遺物実測図（S:1/3）……46
図50　軒瓦拓影および実測図（S:1/3）……47
図51　火打石実測図……48
図52　石製品実測図（S-7～10＝S:1/2、S-11・12＝S:1/3）……49
図53　SD-02出土土製品実測図（S:1/2）……50
図54　唐津焼の分類（S:1/5）……52
図55　本稿で用いる大和Ⅰ$_2$型土釜の分類（S:1/5）……53
図56　馬司遺跡SD-02出土遺物実測図（S:1/3）……54
図57　AZ87-5　SX-201出土遺物実測図（S:1/3）……55
図58　金剛寺遺跡SD-52出土遺物実測図（S:1/3）……56
図59　新薬師寺旧境内第14次（奈良町高畑遺跡）SK-07出土遺物実測図（S:1/3）……58
図60　奈良町北室町遺跡（64BBG48次）SE-16出土遺物実測図（S:1/3）……59
図61　奈良町北室町遺跡SX-05出土遺物実測図（S:1/3）……60
図62　郡山城下町旧奥野家SX-04出土遺物実測図（S:1/3）……60
図63　郡山城下町旧奥野家SX-01出土遺物実測図（S:1/3）……61
図64　時期別器種消長図……62

表　目　次

遺物観察表１～７……73

図　版　目　次

図版１　調査区全景空中写真（左が北）
図版２　１　調査区東半空中写真（上が北）
　　２　調査区西半空中写真（上が北）
図版３　１　調査区全景空中写真（東上空より）
　　２　調査区全景空中写真（西上空より）
図版４　１　調査前の風景（東より）
　　２　小字「堂ノ前」地区の土層（北東より）
図版５　１　SD-02 ２層遺物出土状況（南より）
　　２　SD-02 ３層遺物出土状況（北より）
図版６　１　調査区東半完掘状況（南西より）
　　２　調査区西半完掘状況（北東より）
図版７　１　SD-02完掘状況（南東より）
　　２　SX-13・14完掘状況（南より）
図版８　１　SD-01・02およびSD-17完掘状況（北東より）
　　２　SD-17遺物出土状況（東より）
図版９　SD-02 １層出土遺物および２層出土遺物①
図版10　SD-02 ２層出土遺物②
図版11　SD-02 ２層出土遺物③
図版12　SD-02 ２層出土遺物④
図版13　SD-02 ２層出土遺物⑤
図版14　SD-02 ２層出土遺物⑥および３層出土遺物①
図版15　SD-02 ３層出土遺物②
図版16　SD-02 ３層出土遺物③
図版17　SD-02 ３層出土遺物④
図版18　SD-02 ３層出土遺物⑤
図版19　SD-02 ３層出土遺物⑥
図版20　SD-02 ３層出土遺物⑦
図版21　SD-04 １層出土遺物および２層出土遺物①
図版22　SD-04 ２層出土遺物②
図版23　SD-04 ２層出土遺物③およびSX-13、SX-13・14間堤内・SD-06A出土遺物
図版24　SD-05・06出土遺物
図版25　SX-07・SD-01 １層出土遺物および２層出土遺物①
図版26　SD-01 ２層出土遺物②
図版27　SD-01 ２層出土遺物③およびSD-15出土遺物
図版28　SD-07・SD-14出土遺物
図版29　SD-13・SB-01・02出土遺物および瓦・石製品
図版30　石製品
図版31　土製品

Ⅰ　調査の契機および経過

今回の調査は、奈良県西和土地改良事務所などが計画を進めている「ふるさと農道」建設に伴って実施されたものである。試掘調査は、1999年11月８日より26日まで工事対象地に３本の試掘トレンチ（幅４m）を配し、地下遺構の有無確認を行った。その結果、第１トレンチとした東側の調査区域より中世～近世初頭の溝状遺構が数条検出されたため、原因者と協議の結果、この第１トレンチを幅11mに拡張して本調査に移行した（図１）。その他のトレンチにおいては、中世の耕作関連遺構（素掘小溝）が検出されたが、残存状況は良好とはいえず、また道路工事に先行する調査のため耕作遺構の調査に必要なだけの十分な面的調査が困難なこと、さらに周辺住民の工事進捗に対する要望などの理由から本調査は行わないこととした。

本調査は試掘調査から引き続き行い、2000年３月28日に終了した。試掘調査も含めた調査面積は約2,000㎡である（本調査面積約1,500㎡）。

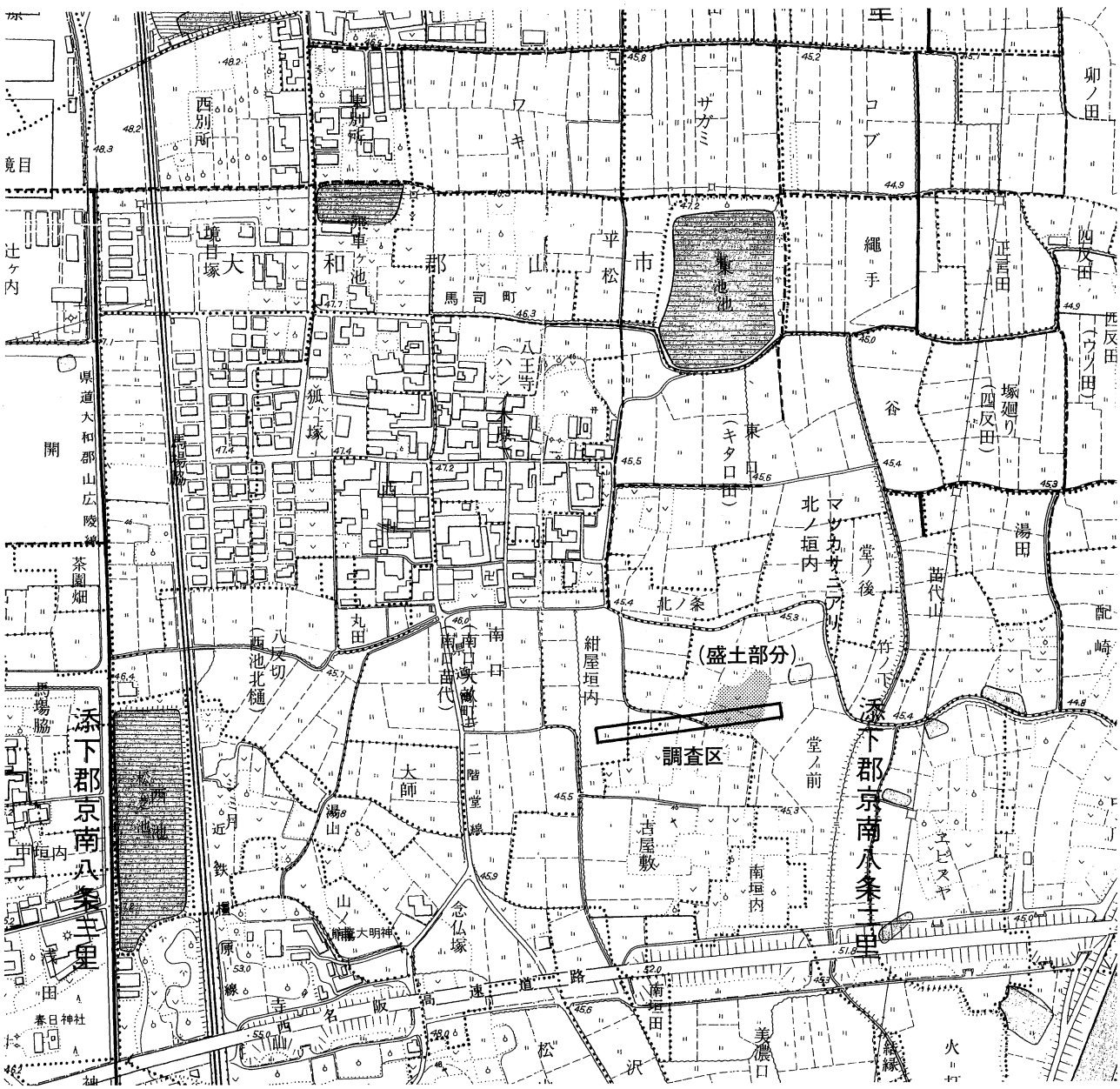


図１　周辺地割および調査区位置図（S:1/5,000）（『大和国条里復元図』No.40に加筆）

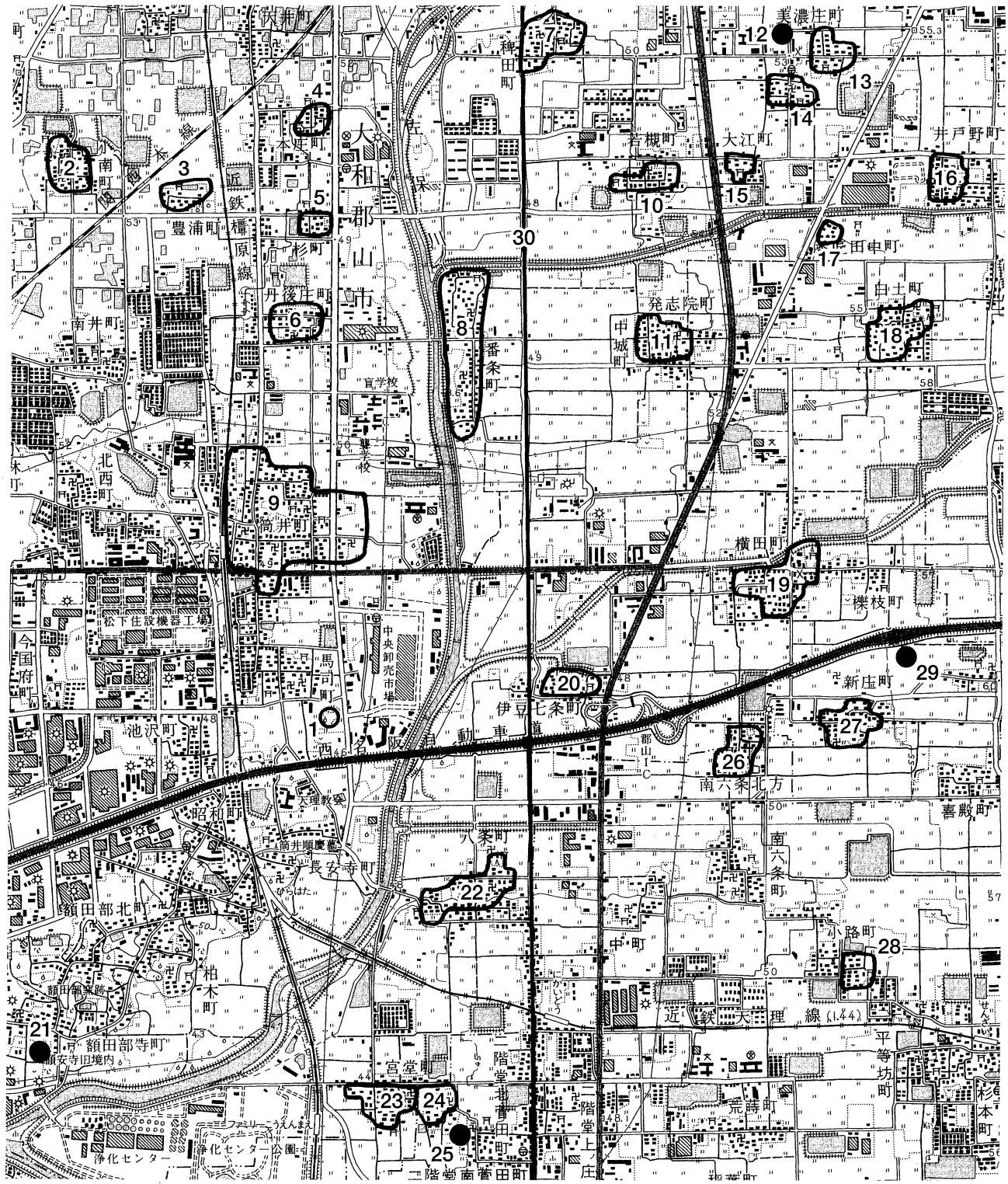


図２　周辺遺跡分布図（S:1/25,000）
（国土地理院1/25,000地形図「大和郡山」に加筆）

1	馬司遺跡(今回調査地)	11	発志院・中城環濠	21	額安寺
2	小南環濠	12	美濃庄遺跡今倉地区	22	八条環濠
3	豊浦環濠	13	大美濃庄環濠	23	宮堂環濠
4	本庄環濠	14	小美濃庄環濠	24	小城環濠
5	杉環濠	15	大江環濠	25	菅田遺跡
6	丹後庄環濠	16	井戸野環濠	26	本柳生環濠
7	稗田環濠	17	番匠田中環濠	27	新庄環濠
8	番条環濠	18	白土環濠	28	小路環濠
9	筒井城跡	19	横田環濠	29	中付田遺跡
10	若槻環濠	20	伊豆七条環濠	30	下ツ道

Ⅱ　調査地の環境

図３　額安寺境内における整地痕跡（西より）

図４　若槻環濠完掘状況（南より）

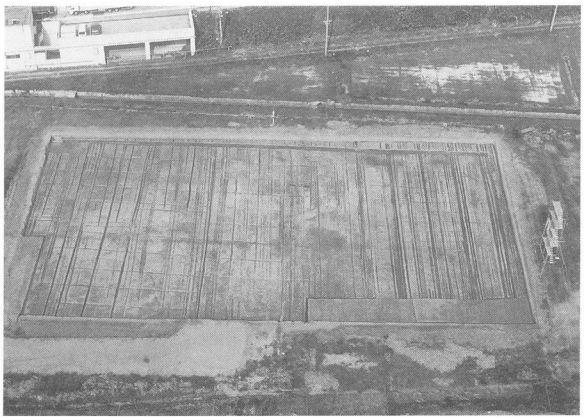


図５　中付田遺跡素掘小溝完掘状況（南上空より）

今回の調査地は、東に佐保川が南北に貫流し、その低湿な氾濫原に接する位置にある。また、西には報告者がかつて「筒井旧河道」と仮称した旧河道が、調査地の付近ではほぼ南北に貫流していたと思われ（山川1996）、今回検出された中世の遺構群は、これら両河川に挟まれた自然堤防状の微高地に展開していた。こうした地形的条件のため、調査地周辺には条里地割はほとんど遺存しておらず、ごく一部に正方位の畦畔が存在する程度である。特に調査区の東側の地割は後に述べる小字「堂ノ前」地区の方向性に強く規定されているが、このことは今回の発掘調査により、14世紀以降から続く傾向であることが確認できた。

調査地の周辺には現存する小字で、先述の「堂ノ前」のほか、「古屋敷」、「南垣内」、「紺屋垣内」などの、明らかに集落に因むとみられる地名が集中しており、この地にかつて集落が存在した可能性が強いことを示している（図１）。ちなみに現在の馬司集落は調査地の北西約200ｍにある。

次いで、周辺の主な中世の遺跡について概観する。なお、これらのうち、図２の右上（北東）にあたる稗田・若槻～美濃庄にかけての既往の中世遺跡の発掘調査成果については別に詳細に纏めているので（山川・伊藤1997）、それに拠られたい。

調査地の南西約２㎞に位置するのが、鎌倉時代に馬司荘の領家であった額安寺である（図２－21）。ごく最近の調査で本堂の裏（北側）より13世紀前葉にさかのぼる大規模な整地痕跡が検出された。ここでは瓦の砕片をびっしりと敷き詰めた上に粘土と砂質土を乗せて表面の硬度を増すという、高度な土木技術が用いられていることが確認されている（図３）（注１）。馬司荘が額安寺に施入された安貞２年（1228）（注２）から間をおかず、同寺境内で大規模な整地が行われているという事

実は、額安寺の再興時期を考える上できわめて示唆的である。

9は、官符衆徒筒井氏の本拠となる筒井城跡である。ここでは4次にわたる発掘調査が行われているが、その結果13世紀頃より城郭の前身となる集落遺構が見られるようになり（山川1988）、また天正8年（1580）の織田信長による破城令に際しては、きわめて迅速に武家屋敷地の解体が行われたこと（山川1991）などが判明しているが、城郭中心部分の本格的な調査はまだなされておらず、その構造の具体的な解明は今後の課題となっている。

調査地の周辺にはいわゆる環濠集落と呼ばれる、周囲を溝（濠）で囲った（あるいは過去に囲われていた）集落が多数存在するが、そのうち発掘調査が行われた例として、10の若槻環濠がある。ここでは18世紀前葉に濠再掘削が行われていたため中世の濠自体は検出できなかったが、それに接続する溝などから13世紀後葉の遺物が大量に出土しており、環濠の起源がこの時期にあることを示唆している（山川2000ａ）（図4）。また、現在の集落の位置とは少しずれるが、25の菅田遺跡では発掘調査により14世紀中葉から居館の周囲を囲うと思われる大溝が出現し、15世紀後葉には新たな溝が付加され、16世紀末まで存続することが確認された（小栗1997）。この居館の住人に関しては、先述の筒井氏を盟主とする戌亥（乾）脇衆と称する武士団に属した菅田氏と考えられる。なお、こうした環濠で囲繞された居館や集落に関しては、現存する集落も含めて拙稿（山川1999）で紹介・分析を試みている。

中世の耕地に関しては、29の中付田遺跡で13世紀に大規模な条里形耕地の開発が行われたことが判明しており、その開発過程に関しても拙稿で若干の分析を試みている（山川2000ｂ）（図5）。また、調査前には条里形耕地となっていた美濃庄遺跡今倉地区（12）では11世紀後葉～13世紀中葉まで存続した集落遺跡が検出された（山川・伊藤1997）。この集落では溝による区画や囲繞はなされていないが、調査地の南と南東にはそれぞれ小美濃庄（14）、大美濃庄（13）と称する集落が現存することから、ここでは13世紀の後葉頃に居住域（集村）と条里形耕地の明確な二分化が行われたことが推定し得る。

【注】

1　大和郡山市教育委員会2001年調査（報告書未刊）。

2　「額安寺円位別当職等譲状」（額安寺古文書後－1）『大和郡山市史史料編』

【参考文献】

小栗明彦　1997『天理市菅田遺跡の発掘調査』（現地説明会資料）奈良県立橿原考古学研究所

山川均　1988「筒井城第2次　筒井城東門地区発掘調査概報」『大和郡山市遺跡調査概報11』大和郡山市教育委員会

1991『筒井城第3次　森目地区発掘調査概報』大和郡山市教育委員会

1996「筒井城に関する復元的研究」『関西近世考古学研究』Ⅳ　関西近世考古学研究会

1999「居館の出現とその意義」『帝京大学山梨文化財研究所報告』9

2000ａ『若槻環濠第1次発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会

2000ｂ「大和郡山市中付田遺跡の発掘調査」『条里制・古代都市研究』16

山川均・伊藤雅和　1997『美濃庄遺跡今倉地区発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会

Ⅲ　遺構（全体図は別添）

今回の調査では、弥生時代、飛鳥時代、鎌倉～江戸時代初頭の遺構を確認した。このうち、最も顕著に認められたのは室町から江戸時代初め、すなわち中世後半から近世初頭の遺構群である。これらは中世にこの地に展開していた集落の遺構であり、特に集落内部を区画していたと見られる溝を多数検出した。また、古代の遺構は７世紀後葉を主体とするもので、主なものでは掘立柱建物２棟がある。後述のようにこれらは正方位を指向しており、一般的な集落の遺構とは異なるようである。このほか、弥生時代の遺構としては周溝墓と思われる溝が１条検出されている。

１．中世～近世初頭の遺構

調査地周辺は後述のSD-02が人為的に埋められる1620年代以後、あまり間をおかずに耕地化したようであり、耕土最下層（現状では床土）からは初期伊万里の破片が出土する。この際に遺構面は全体的に数10㎝の削平（耕耘）を受けており、中世の柱穴等の残存状況はかなり悪い。したがって今回の調査では集落内の建物の状況等は明らかにすることができなかったので、本項では集落内の区画溝を中心に報告を行う。

（１）SD-02（図６）

本遺構は、調査区の東寄りで検出された規模の大きい溝状遺構である。幅は最も広い部分で約４ｍ、狭い部分で約３ｍを測り、深さは部位に関わらず検出面より1.3ｍ程度である。断面の形状はＵ字形もしくはゆるいＶ字形となる。後述の堆積層（４層）の状況から考えてゆるやかな流水があった可能性が指摘し得るが、溝の基底面に傾斜が見られないため、流れの方向は不明である。おそらく滞水に近い状況を考えるべきであろうが、現状の地形や、平行するSD-07（後述）がその基底面レベルから見て北西→南東方向の流れであったことが明らかなので、この溝も北西から南東方向にゆるやかに流れていたものと推定される。

溝内の土層堆積状況は、大きく４層に分けることができる。１層は近世耕土の最下層にあたるもので、耕地化の際、周囲に比して若干の窪地状となっていた部分に入った土である。この層の形成時期は、出土遺物（初期伊万里）から考えて17世紀前葉～中葉と考えられるが、それは先述のように調査地周辺が耕地化した時期を示すものである。２・３層は人為的な埋積土であり、部分的に黄色粘土のブロックを包含する。Ⅳ章（１）項で報告する多量の遺物の大半はこの２・３層から出土したもので、それらから見て、両層には時期差は認められず、埋め戻しは短期間の内に行われたものと推定される。これらに比して４層は溝の機能時の堆積土であり、砂質土と粘土（地山の崩落土）の混成層である。遺物はほとんど出土しなかったが、時期は２・３層と大差ないものであった。

溝の方向性は方眼方位の西に対して北に約17°振るもので、大和広域条里とは異なる方向性を持つ点が注目される。もっとも調査地自体、特にその東半部分は現状でも非条里地割で、このSD-02は図版１などに示すように現状畦畔にその痕跡を明瞭に止めている。それによれば、この溝は調査区の外までしばらくはこのままの方向性を保ち、その後やや南に屈曲し後述のSD-04の延長と合流するものと考えられる。

遺構の性格としては居館の環濠と考えるのが妥当と思われるが、先述の流水状況（滞水に近いゆるやかな流水）などの条件を勘案すれば、灌漑用の水路を兼ねていた可能性が高い。

出土遺物が示す本遺構の埋没時期は、17世紀初頭（1620年代＝時期の詳細はⅤ章参照）である。

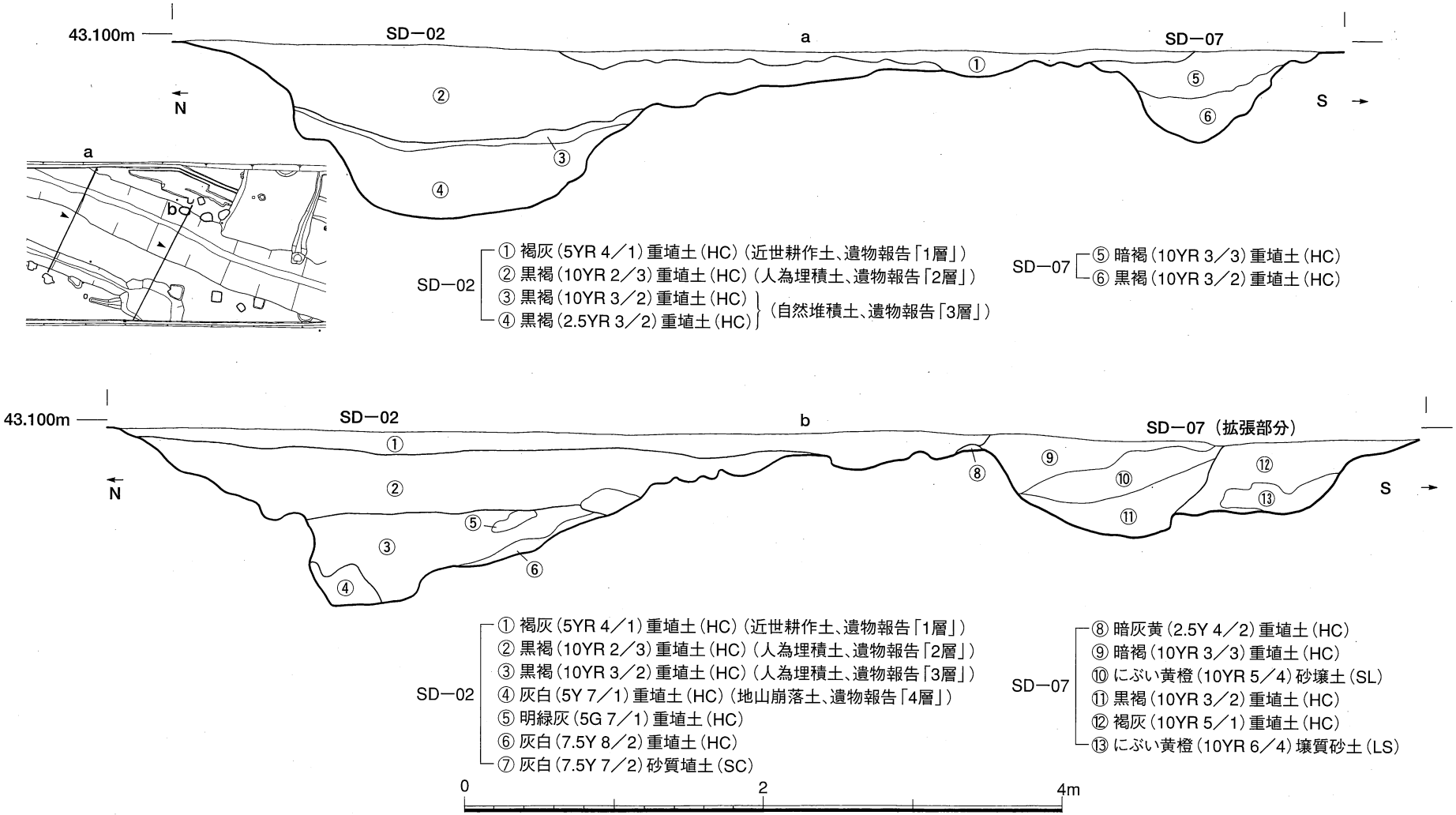


図6　SD-02およびSD-07土層断面図（S:1/40）

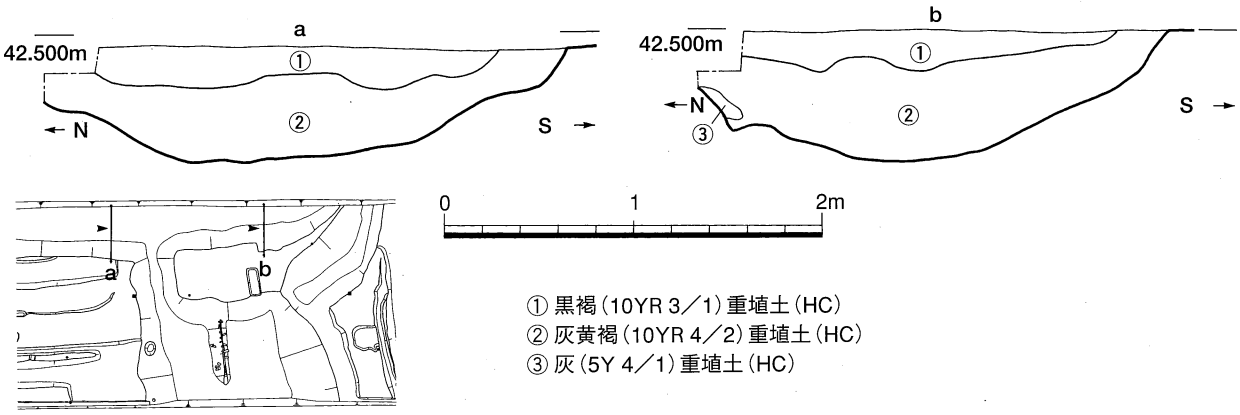


図７　SD-04土層断面図（S:1/40）

（２）SD-04（図７）

本遺構は、先述のSD-02に調査区外北側で接続すると考えられる溝状遺構である。また、SX-13とはSD-05（いずれも後述）を通じて接続する関係にある。幅は溝の北端が未検出なので不明だが、検出部分のみで約2.5ｍを測り、基底部の最も深い部分で折り返すと３ｍ程度の規模に復元される。深さは検出面から約0.7ｍで、SD-02の半分程度の規模である。堆積土層は大きく２層に分かれるが、いずれも人為的な埋積土と考えられるもので、両層の間に時期差は見られない。遺物は完形に近いものが比較的多く出土した。

溝の方向性は方眼方位東に対して北に約5°30′振るものだが、検出部位の東端で北に向けて屈曲する。その延長は、先述のようにSD-02の延長部分と接続したものだろう。溝の基底面にはほとんど傾斜がなく、水流の方向は不明であるが、後述のSD-05や同06の流水方向を斟酌すれば、東→西の方向であった可能性が高い。

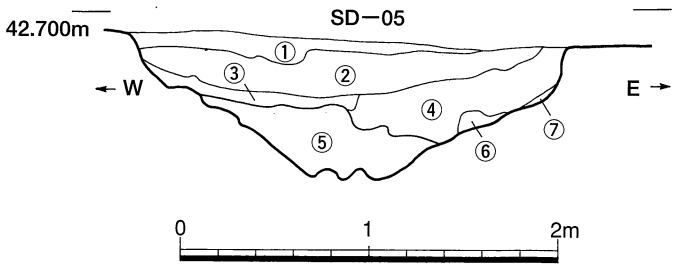
遺構の性格としては、集落内の区画溝と考えられ、付帯的機能として灌漑機能があったものと考えられる。時期はSD-02と同様、1620年代に埋没したものと推定されるが、ここからは15世紀末～16世紀初頭の遺物も出土しており、これらが本遺構の上限を示すものだろう。

（３）SX-13（図８下）

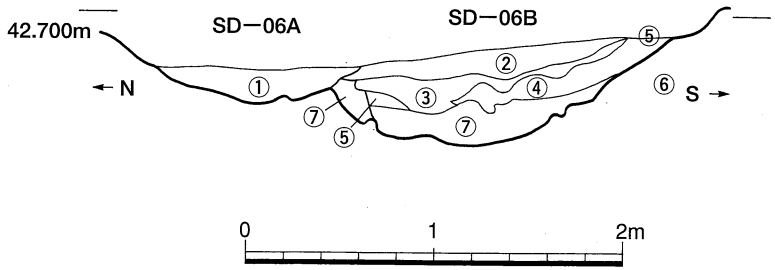
平面形が長方形状となるやや特異な遺構である。後述のSX-14とは切り合う関係にあり、本遺構の方が新しい。深さは検出面から約1.3ｍ、幅は約5.3ｍを測る。断面は逆台形で、1.8ｍの幅でフラットな基底面を造る。SX-14とは堤状の施設で画されているが、堆積土層の観察および出土遺物より考えて、少なくとも本遺構の最終的な機能時期においては、SX-14はすでに人為的に埋積されていた可能性が高い。先述のSD-04とは後述のSD-05を介して接続しており、時期もこれらと同じ1620年代と考えられる。遺構の性格としては、貯水施設と考えるのが最も妥当であろう。

（４）SX-14（図８上）

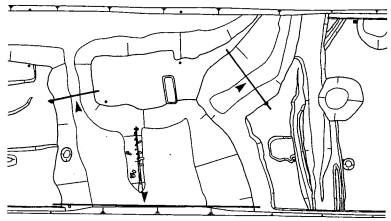
SX-13と堤状施設で画される、平面が長方形状の遺構である。幅は約６ｍ、深さは検出面より約1.3ｍで、SX-13と底面のレベルが等しい。基底面の幅は約2.3ｍで、上面幅と共にSX-13を上回る。本遺構の明確な機能時期は、遺物がほとんど出土しなかったため明確にはできないが、先述のようにSX-13に切られる関係にあるので、少なくとも埋積はそれに先行することは確実である。また、本遺構は後述のようにSD-06（A･B）と接続しているが、このうちSD-06Aが17世紀初頭、同Bが16世紀後葉の時期観が与えられることから、このSX-14の存続期間の一端もこの辺りに押さえることができる。し

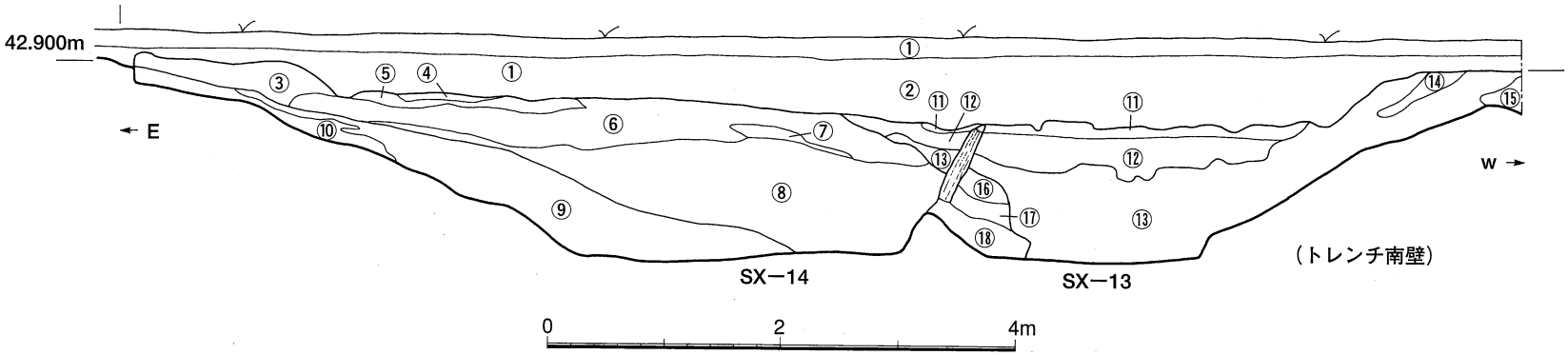


① 暗灰黄（2.5Y 4／2）重埴土（HC）
② 黒褐（10YR 3／2）重埴土（HC）
③ 暗オリーブ褐（2.5Y 3／3）重埴土（HC）
④ 褐灰（10YR 4／1）重埴土（HC）
⑤ オリーブ黒（7.5Y 3／1）重埴土（HC）
⑥ 灰黄褐（10YR 4／2）重埴土（HC）
⑦ 灰（5Y 4／1）重埴土（HC）



① 黒褐（10YR 3／1）重埴土（HC）
② 黒褐（7.5YR 3／2）重埴土（HC）
③ 黒褐（7.5YR 3／1）重埴土（HC）
④ 黒褐（10YR 3／2）重埴土（HC）
⑤ オリーブ黒（5Y 3／1）重埴土（HC）
⑥ 黒褐（2.5Y 3／1）重埴土（HC）
⑦ 黒褐（5YR 3／1）重埴土（HC）





① 黄灰（2.5Y 4／1）重埴土（HC）（現耕土）
② 明灰黄（2.5Y 4／2）重埴土（HC）（床土）

SX－14
③ 黒褐（10YR 3／2）重埴土（HC）
④ 灰（7.5Y 5／1）砂質埴土（SC）
⑤ 暗灰黄（2.5Y 5／2）砂質埴土（SC）
⑥ 明灰黄（2.5Y 4／2）砂質埴土（SC）
⑦ オリーブ黄（5Y 6／4）軽埴土（LiC）
⑧ 黄灰（2.5Y 5／4）砂質埴土（SC）
⑨ 黒褐（2.5Y 3／1）重埴土（HC）
⑩ 灰黄褐（10YR 4／2）重埴土（HC）

SX－13
⑪ 黄灰黄（2.5Y 4／2）軽埴土（LiC）
⑫ 黒褐（2.5Y 3／2）軽埴土（LiC）
⑬ オリーブ黒（5Y 3／1）重埴土（HC）
⑭ 灰黄褐（10YR 6／2）重埴土（HC）
⑮ 黒褐（10YR 6／2）重埴土（HC）

SX－13・14間堤
⑯ 明灰黄（2.5Y 5／2）砂質埴土（SC）
⑰ 灰（5Y 3／1）砂質埴土（SC）
⑱ 灰（5Y 4／1）重埴土（HC）

図 8　SD-05・06（S:1/40）およびSX-13・14（S:1/60）土層断面図

たがって本遺構は埋積時期に差が見られるものの、SX-13とほぼ同時に機能したものと推定してよかろう。なお、堤状遺構はこのSX-14側に樹枝と木杭を用いた護岸施設が見られた（図９）。堤本体はよく締まった砂質土と粘質土を積んだものである。

この遺構の機能については、やはり貯水施設と考えられるが、SX-13とは導水路が異なること、さらに両者の間は堤状遺構で仕切られていることなどから、その用途や、あるいは受益者に差異があった可能性が指摘し得る。

（５）SD-05（図８左上）

先述の通り、SX-13とSD-04とを接続する溝である。出土遺物から判断される時期（下限時期）も二者と同じく、1620年代と考えられる。幅は約２ｍを測り、長さは約５ｍである。深さは約0.7ｍで、その基底面のレベルはSD-04に等しい。これに比し、SX-13の基底面はSD-05より約0.6ｍ低いので、水流方向は北→南と考えられる。すなわち、SD-04から分流した水を貯水施設と想定されるSX-13に導くための水路がこのSD-05であったものと思われる。したがって本来、SD-04・05間には堰などの施設が存在した可能性が高いが、今回の調査では未検出である。

溝内の堆積土は、最上層の近世耕土を除くと大きく２層に分かれる。いずれも人為的な埋積土であり、時期差は認められなかった。

（６）SD-06（A·B）（図８右上）

幅がもと約２ｍあったもの（SD-06B）を約1.2ｍに狭めている（同A）。この際、深さも検出面から約0.8ｍあったものが約0.5ｍと浅くなる。掘り直しは完全に同じ場所に重複するのではなく、一部重複しているものの、やや北にずれた位置で行われている。時期は、Bの下限が16世紀後葉、Aは17世紀初頭である。おそらく貯水施設SX-14への導水路と思われ、流路の方向は北東→南西と想定される。図10に示すように本遺構とSX-14との間は少し高まりが設けられているが、SD-06の湛水量が一定量に達するとSX-14内に流れ入る構造になっていたようで、SX-14の基底面北東隅にはSD-06から落ちる水によって抉られるように侵食された痕跡が認められた。ちなみに、SD-05とSX-13の間にはこのような高まりは設けられていない。また、本遺構がどの溝から水を引いたものかは発掘区域内では確認し得なかったが、航空写真（図版１・２）に見る現状畦畔から判断すると、SD-02の北西への延長部分から分流したものと捉えるのが妥当と思われる。

図９　SX-13・14間堤護岸状況（東より）

図10　SX-14とSD-06の接続状況（東南より）

（7）SX-07（図12下）

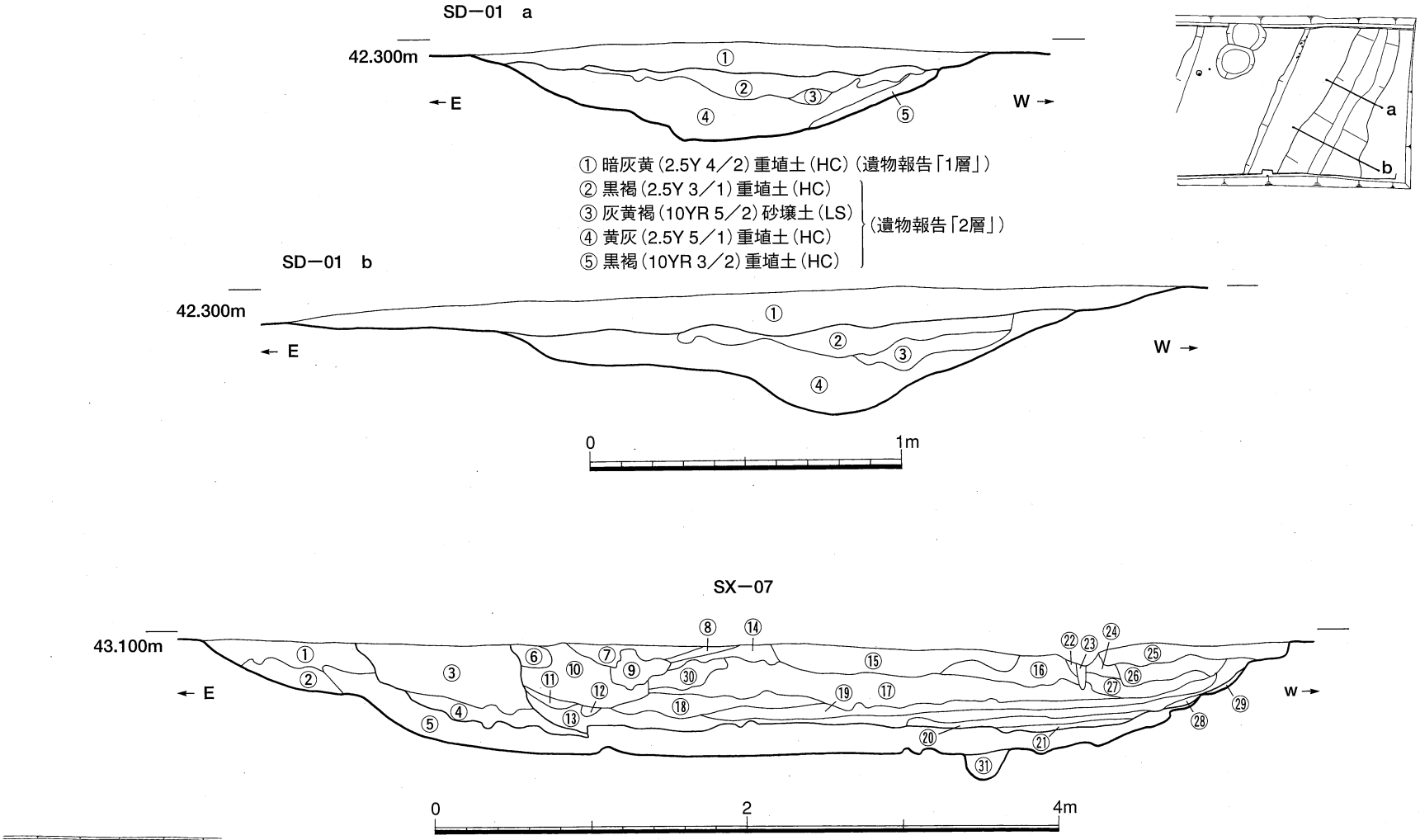
幅約７ｍ、深さ約0.7ｍを測る遺構である。検出部位南側の基底面レベルがやや高いが、これは遺構南端が近いためと理解される。堆積土の観察より、本遺構は最低２回の掘り直しがあり、その度に幅・深さともに減じている。遺物は主に最終埋積土より16世紀後半の遺物群が出土している。したがって本遺構の下限時期はその頃と考えてよかろう。遺構の性格としては先述のSX-13や14と同様、貯水施設と考えるのが妥当であろう。

なお、SX-07の基底部西半より南北方向の幅30㎝程度の細い溝が検出された。この溝の主軸は方眼方位北に対して西にわずか約2°30′振るもので、ほぼ正方位を指向しているものと見なすことができる。SX-07自体の主軸をこの溝のものと同じと仮定すれば、調査地において唯一、条里地割の痕跡を認めることができる遺構である（現状の畦畔もこの付近には条里の南北ラインに一致したものが見られる＝図１参照）。ただし、この細い溝自体は早い時期に埋没したようで、SX-07本体とどのような機能的な関わりをもったものかは不明である。

図11　SX-07遺物出土状況（左：南より　右：東より）

（8）SD-01（図12上）

幅が３～５ｍ、深さが検出面から約0.7ｍを測る溝状の遺構である。方向は方眼北に対して約21°30′東偏するもので、小字「堂ノ前」と呼ばれる、周辺より小高い部分の周囲を画する溝であろう。出土遺物などから考えて、この「堂ノ前」地区の西側を画する浅い溝状の遺構（別添遺構全体図で「SD-01B」として表示。今回説明は省略）と接続する可能性が高い。ちなみに両者の間隔は40ｍ弱である。底面はほぼフラットな状態で、流水の方向は不明。遺物は下層（遺物報告の「２層」）を中心に比較的多く出土しており、それらが示す時期は15世紀の後葉である。



① 灰褐（7.5YR 4／2）重埴土（HC）
② 淡黄（2.5Y 8／4）重埴土（HC）
③ 黒褐（7.5YR 3／2）重埴土（HC）
④ 暗灰黄（2.5Y 4／2）砂質埴土（SC）
⑤ 灰黄褐（10YR 4／2）重埴土（HC）
⑥ 暗黄褐（2.5Y 7／6）重埴土（HC）
⑦ 浅黄（5Y 7／3）壌質砂土（LS）
⑧ 褐灰（10YR 6／1）重埴土（HC）
⑨ 撹乱土
⑩ 黄灰（2.5Y 4／1）重埴土（HC）
⑪ 明黄褐（2.5Y 6／8）砂土（S）
⑫ 灰オリーブ（5Y 5／2）砂壌土（SL）
⑬ 黒褐（2.5Y 3／2）重埴土（HC）
⑭ 浅黄（2.5Y 7／3）砂土（S）
⑮ 暗灰黄（2.5Y 4／2）重埴土（HC）
⑯ 明黄褐（10YR 6／8）重埴土（HC）
⑰ 灰白（7.5Y 7／2）砂土（S）
⑱ 黄灰（2.5Y 5／1）重埴土（HC）
⑲ 灰（7.5Y 5／1）砂質埴土（SC）
⑳ オリーブ灰（2.5GY 5／1）重埴土（HC）
㉑ 灰（5Y 5／1）重埴土（HC）
㉒ 灰白（5Y 7／2）砂土（S）
㉓ 暗灰黄（2.5Y 4／2）砂質埴土（SC）
㉔ にぶい黄橙（10YR 6／3）砂土（S）
㉕ 暗灰黄（2.5Y 5／2）重埴土（HC）
㉖ 浅黄（2.5Y 7／4）砂質壌埴土（SCL）
㉗ 明黄褐（2.5Y 6／6）重埴土（HC）
㉘ 黒褐（10YR 3／2）重埴土（HC）
㉙ 黄灰（2.5Y 4／1）重埴土（HC）
㉚ 明黄褐（10YR 6／8）重埴土（HC）
㉛ 黒（5Y 2／1）重埴土（HC）

図12　SD-01（S:1/20）およびSX-07（S:1/40）土層断面図

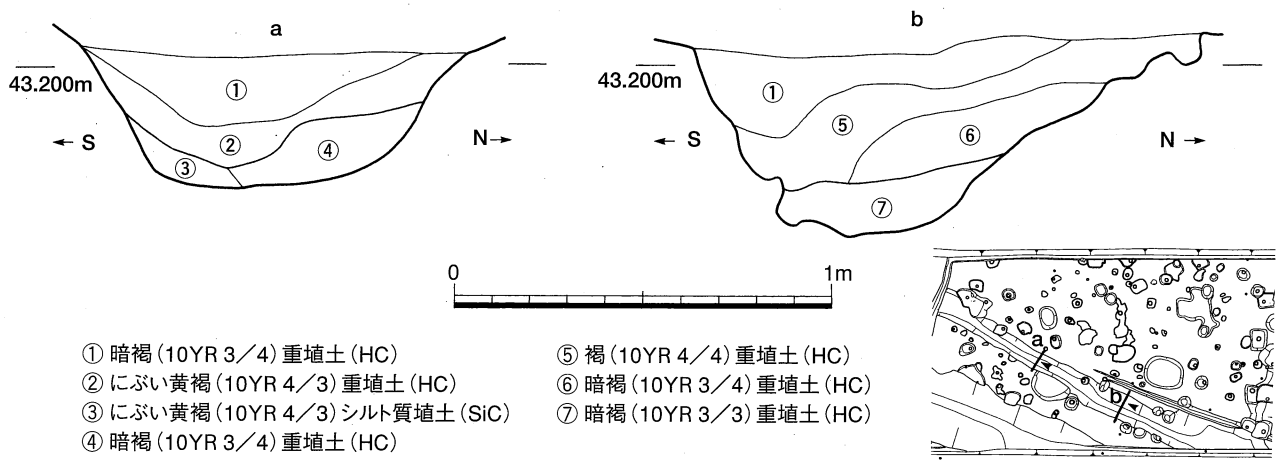


図13　SD-15土層断面図（S:1/20）

（9）SD-15（図13）

幅1～1.5m（検出部南端でやや拡幅部位あり）、深さは35～50cmを測る細い溝状の遺構である。小字「堂ノ前」地区の南端に近い部分に掘られている。方向性は方眼西に対して北に約22°偏するもので、先述のSD-01や同Bとはほぼ直交する関係にある。ただし、本遺構は出土遺物より下限時期を14世紀末～15世紀初頭におくことができるので、この両者とは時期が合わない。しかしながら、このSD-05はSD-01B以西には延びないので、SD-01Bと同じ位置にSD-05と同時期の遺構が存在した可能性は高いものといえる。

水流の方向は、底面レベルから考えて北西→南東方向で、後述のSD-07と同じである。また、この両者はほぼ平行する位置関係にあり、時期も近似する。ちなみに両者の芯々距離は約9m（30尺＝5間）を測る。

(10) SD-07（図6）

先述のSD-02にほぼ平行する溝状遺構で、途中2カ所の楕円形の拡幅部分が認められた。幅は、東から2番目の拡幅部分から西（西半）が110～150cm、東半はやや減じ、60～90cmとなる。深さも西半が検出面より24～28cmなのに対し、東半では39～56cmと深くなる。また、全体的な傾向から深さは北西→東南に向けて深くなっており、水流の方向が明確に推定し得る（北西→東南）。さらに西半部分と東半部分では方向性も若干異なっており、西半が方眼西に対して約12°北に振るのに比べ、東は約17°振るものである（この値はSD-02に同じ）。

2カ所の拡幅部分の内、東から2番目のものは長径が約4m、短径が約3mで、深さは検出面より約0.6mを測り、東から1番目の拡幅部分も規模はほぼ同じである。この拡幅部分は、土層の観察によれば一度掘り込みが行われていることがわかるが、これは何らかの施設の抜き取り行為であった可能性もある。

時期は、人為的な埋積土の中から14世紀末～15世紀初頭と考えられる遺物群が出土していることから、下限をこの頃におくことができる。機能については、区画溝としての機能の他に灌漑水路としての用途も付加するべきであり、また拡幅部分については、揚水施設等の設置を想定することも可能であろう。

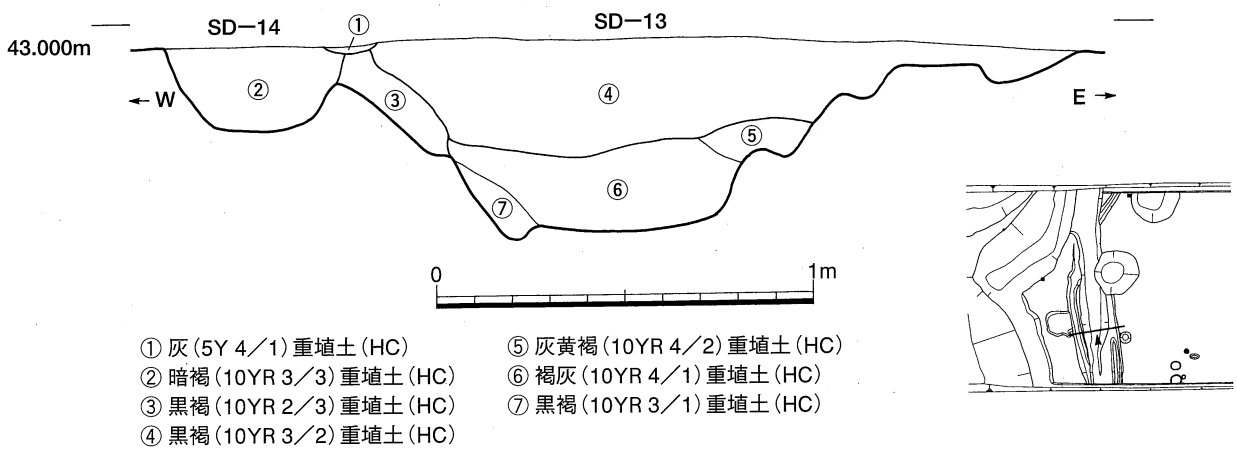


図14　SD-13およびSD-14土層断面図（S:1/20）

（11）SD-13（図14）

幅1.2～２ｍ、深さ約0.5ｍを測る南北方向の溝状遺構である。方向性は方眼方位北に対し約９°西偏するものである。流水の方向は、先述のSD-06などから考えて北→南とするのが妥当であろう。下限時期は14世紀後葉である。SD-06に先行して存在した遺構と考えられる。

（12）SD-14（図14）

西側に張り出す形でゆるやかな弧を描く、南北方向の小規模な溝状遺構である。幅約50㎝、深さは約25㎝を測る。土層断面図に明らかなように、先述のSD-13の埋没後に掘削されている。時期は、出土遺物から14世紀後葉～末と推定される。詳細に観察すると、本遺構はSD-06とそれに接続するSX-14の東側外周に沿った方向性を有している点が注目され、この点はSD-06とそれに接続するSX-14の前身となる遺構の存在を示唆する所見といえる。

（13）小字「堂ノ前」地区の盛土（図15）

小字「堂ノ前」地区では古代および鎌倉時代の盛土が施されていたので、その土層図を１葉、提示する。最上層は重機によって除去した現在の耕作土（畠地）であり、ここでは図示されていない。その下が近世の耕作土で、基本的にその直下の盛土（鎌倉時代）を40㎝程度耕耘することにより生成されたと思われる層である。鎌倉時代の盛土はその近世耕作土の下に20～30㎝程度の厚さで残存しているが、上面の精査によっても、識別が非常に困難な色調や先述の耕耘による削平のため、柱穴等の遺構を検出することはできなかった。詳細な時期は、遺物が細片に限られるため明確にし難いが、13世紀前葉～中葉の遺物に14世紀後葉の遺物が混在するようである。このうち後者は未検出の遺構内に包含されていたものだろうか。

なお、それ以下の土層は古代（７世紀）の盛土である。後述のSB-01･02も本来はこの層の上面から掘り込まれたものであったが、濃褐色を呈する色調のため遺構の認定が困難であり、今回は本層も除去した上で古代の遺構を検出した。

以上のように、今回鎌倉時代の盛土を字「堂ノ前」地区で確認したことにより、柱穴等の遺構は未確認であったが、鎌倉時代にこの地区に何らかの施設が存在した可能性は指摘し得る。また、時代は下るが、この地区に接するSD-02からは仏具かと思われる瓦質土器や、瓦が出土していることから（図32・50参照）、この地区にはその名称が示す通り、中世を通じて持仏堂クラスの仏殿が存在した可能性がある。

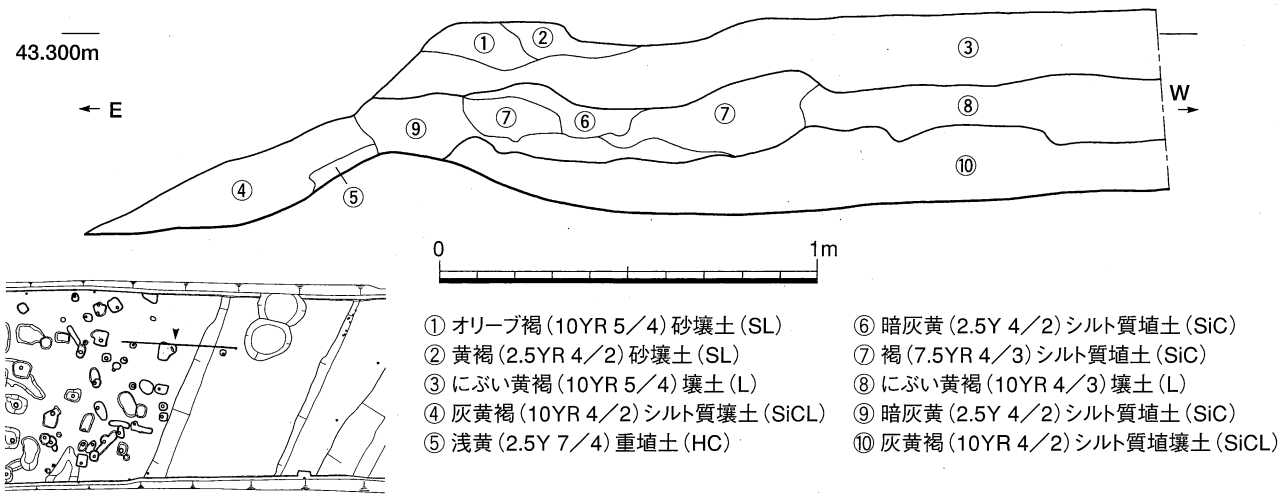


図15　小字「堂ノ前」地区盛土土層断面図（部分）（S:1/40）

2．古代および弥生時代の遺構

（1）SB-01（図16）

東西２間、南北４間以上の南北棟の掘立柱建物である。南側東西柱列は未検出であり、建物はさらに南側に伸びるものと考えられる。後述のSB-02と切り合う関係にあり、本遺構が新しい。規模は東西が約3.8ｍ、南北は7.5ｍ以上の規模となる。柱間は1.8～2.0ｍの間で、ほぼ６尺等間である。柱掘方は１辺が0.8～１ｍの隅丸方形で、柱穴の直径は15～20㎝である。また柱穴の深さは、検出面から50㎝程度のものが多い。方眼方位北に対し2°20′東偏しており、ほぼ正方位を指向したものといえる。時期は、柱掘方出土土器より７世紀第４四半期と考えられる。

（2）SB-02（図16）

東西２間、南北４間の南北棟掘立柱建物である。規模は東西が約3.7ｍ、南北が約6.6ｍを測るもので、後出のSB-01より小規模である。柱間は東西柱列がほぼ1.8ｍとなるが、南北柱列はやや変則的で、北から１番目と２番目、さらに３番目と４番目の柱間がそれぞれ約1.9ｍとなるのに対し、２番目と３番目の柱間は2.8ｍと他の柱間より１ｍ程度広くなっている。掘方は南北に長い隅丸長方形状となるものが多く、柱穴の直径は15～25㎝とばらつきがある。方眼方位に対して約１°東偏しており、SB-01と同様、正方位を指向している。時期は、柱掘方出土土器より７世紀第３四半期と考えられる。

なお、SB-01・02共に比較的規模の大きい掘立柱建物である上に、正方位を指向している点において特徴的であり、一般的な集落遺跡に伴うものと見るより、何らかの公的建物群の一部と考えるのが妥当と思われる。また、この遺構がある小字「堂ノ前」地区の古代盛土からは図50-318に示すような重圏文軒丸瓦が１点出土していることも、上の推定を裏付けるものと思われる。

（3）SD-17（図16・19）

幅70～140㎝、深さ20～35㎝を測る、弥生時代後期の周溝遺構である。北はゆるやかな弧を描くが、南側は他の溝と重複している可能性もあり、平面形状がやや不明瞭である。周溝内より供献に用いられたと思われる弥生土器高杯（図49下-313）が１点出土している（図20）。

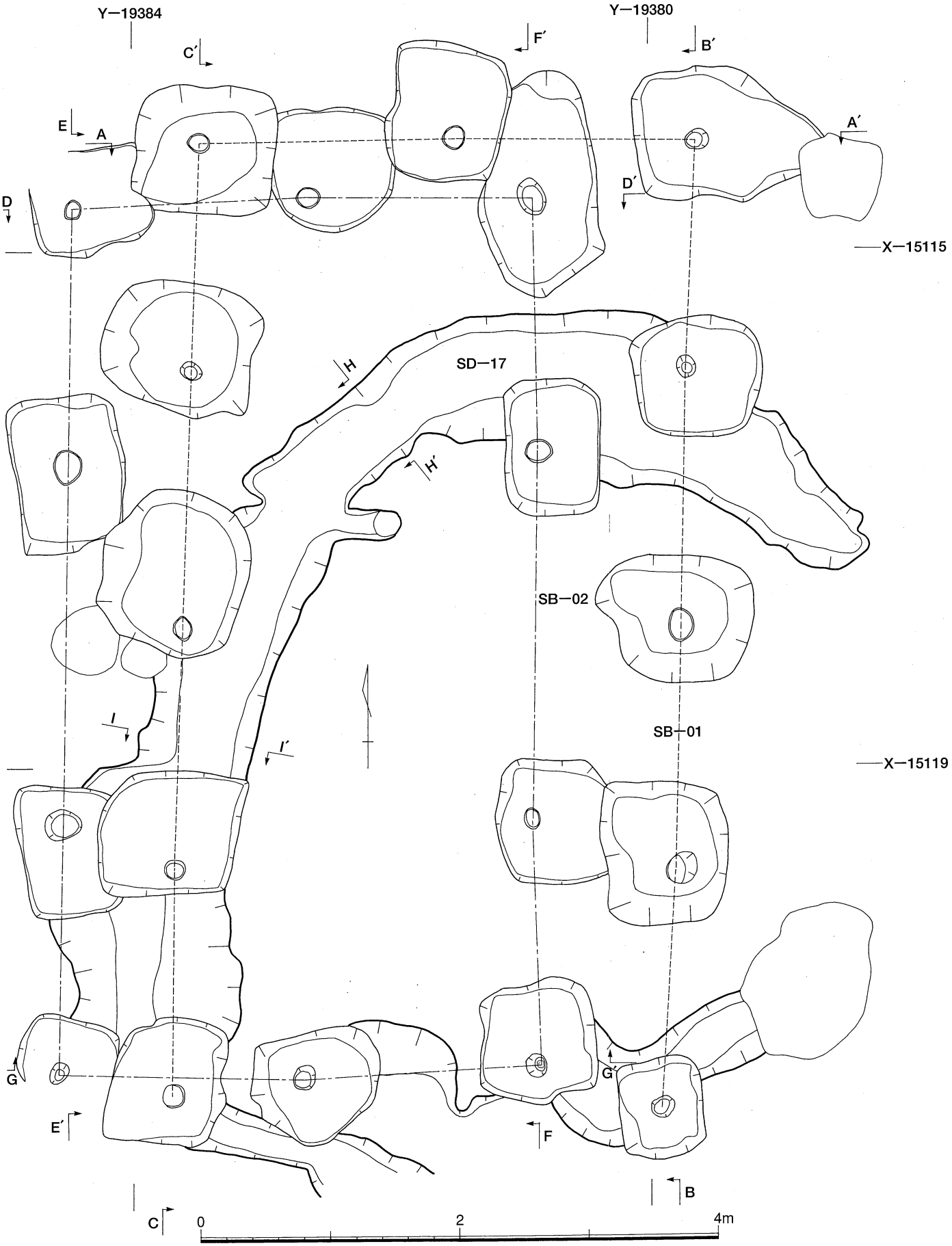


図16　SB-01・02およびSD-17平面図（S:1/40）

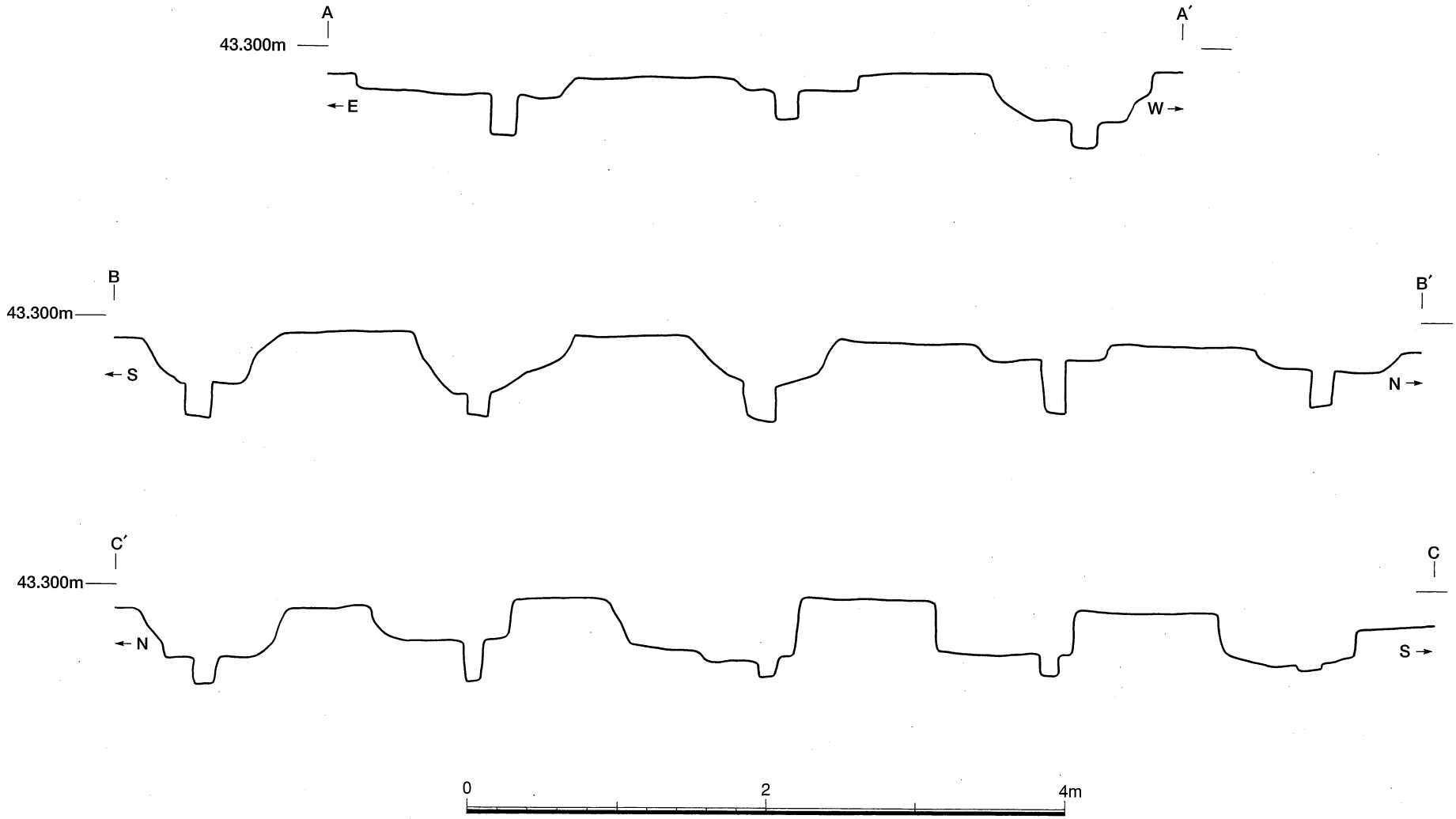


図17　SB-01柱列断面図（S:1/40）

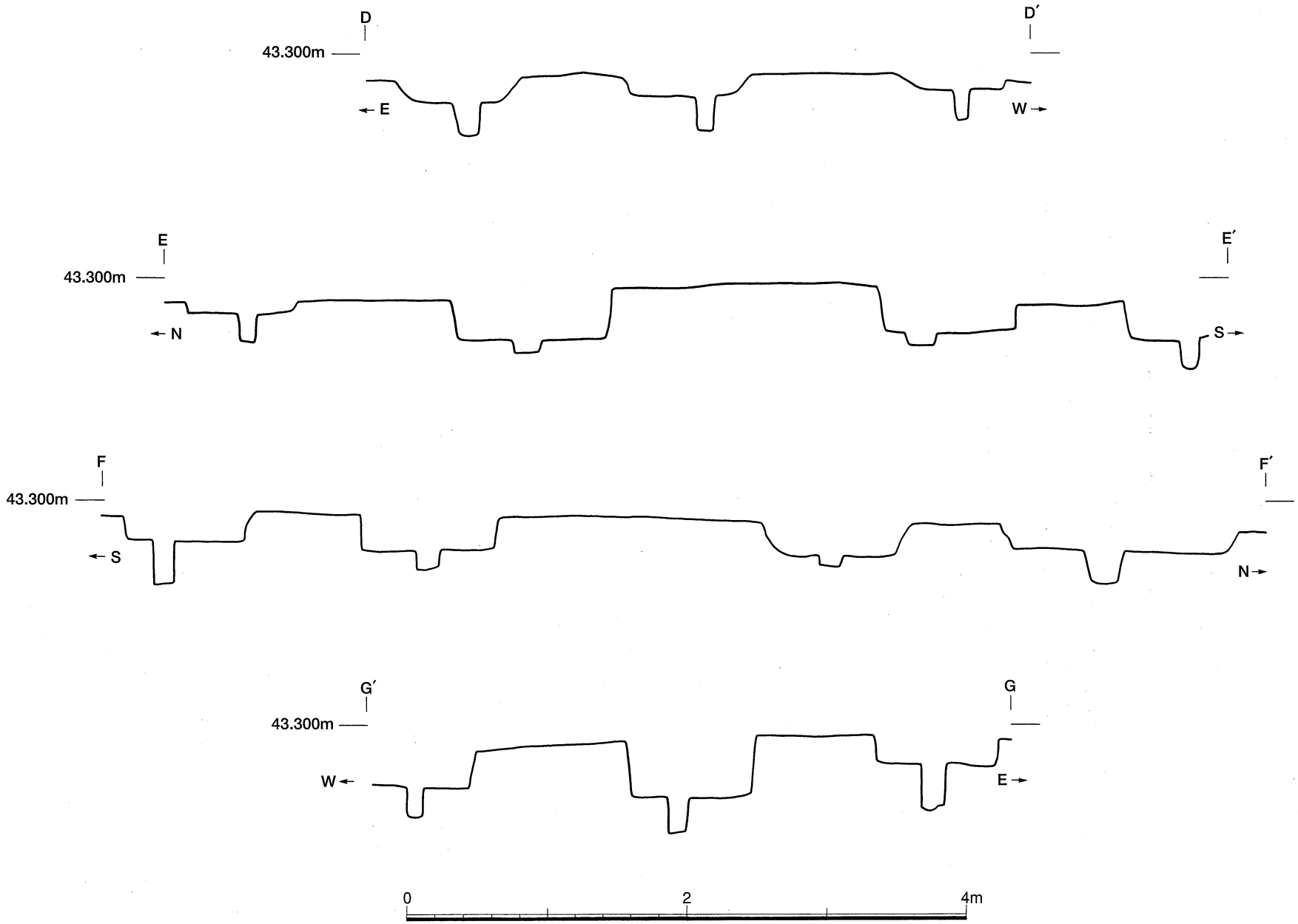
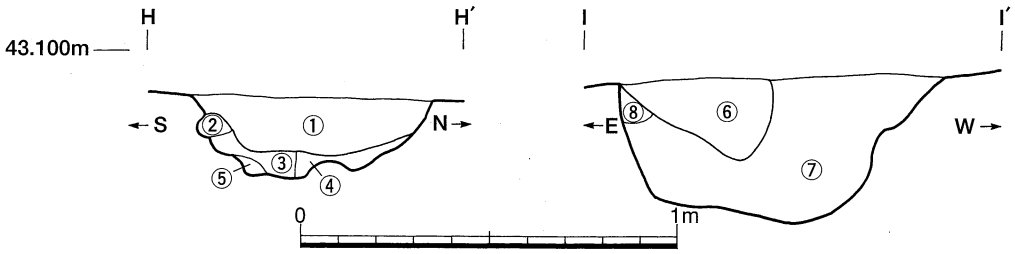


図18　SB-02柱列断面図（S:1/40）



① 暗褐（7.5YR 2／3）シルト質埴土（SiC）
② 淡黄（2.5Y 8／3）シルト質埴壌土（SiCL）
③ にぶい黄褐（10YR 5／3）砂壌土（SL）
④ 黒褐（10YR 3／2）重埴土（HC）
⑤ 淡黄（10YR 3／2）シルト質埴壌土（SiCL）
⑥ 暗褐（10YR 3／3）シルト質埴土（SiC）
⑦ 黒褐（10YR 2／3）重埴土（HC）
⑧ 黄褐（2.5Y 5／4）シルト質埴壌土（SiC）

図19　SD-17土層断面図（S:1/20）

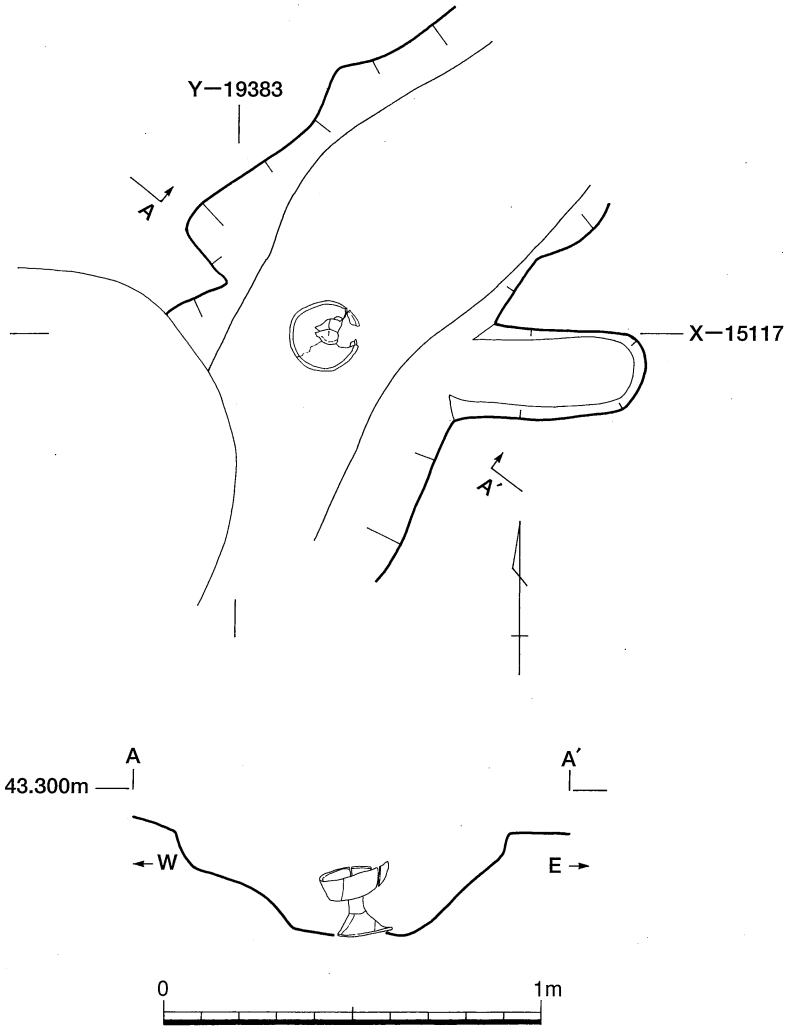


図20　SD-17土器（図49-313）出土状況平面図（上）および立面図（下）（S:1/20）

Ⅳ 遺　物

1．中世～近世初頭の土器・陶磁器

以下の報告では、唐津焼および大和Ⅰ$_2$型土釜の記述に際して、次の分類を用いる。

唐津焼皿および碗… 52ページ図54に示す分類。

大和Ⅰ$_2$型土釜…基本的には川口宏海氏の分類案（川口1990）。ただしⅢ－2型式に関しては53ページ図55に示す分類。

（1）SD-02出土遺物

SD-02からは、唐津焼をはじめ土師皿、瓦質土器、土釜等大量の遺物が出土した。1層は近世の耕土層の最下面で、一重網目文碗を含むことから17世紀中葉と考えられる。2、3層に関しては良好な一括資料で、この両層の間に明確な時期差は確認できない。組成から判断すれば1620年代にはおさまるものといえる（時期の詳細な検討についてはⅤ章を参照）。

遺物の組成上の特徴としては、まず唐津焼の出土量に対して中国製陶磁器や瀬戸・美濃焼が少ないことがあげられる。特に志野、織部、黄瀬戸などの日常品以外のものはほとんどない。唐津焼も碗・皿のいわゆる雑器が大半を占め、茶器と考えられるようなものは極微量である。瓦質土器はこの遺構でしかみられないような珍しい器種を多く含む。香炉などの仏具と考えられるような製品も多く、本遺構の性格を表していると考えられる。

なお、当該期の遺物にはいずれも被熱痕跡がみられた。

［1層出土遺物］（図21）

1は伊万里一重網目文碗である。17世紀中葉。2は胴部を強く屈曲させるタイプ（B$_2$類）の唐津焼碗である。3は備前焼の壷で茶器として用いられたと考えられる。

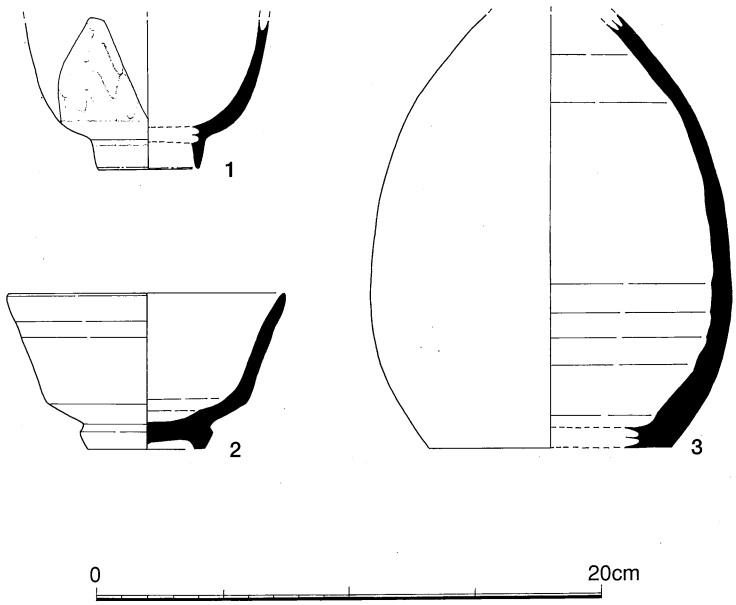


図21　SD-02 1層出土遺物実測図（S:1/3）

［2層出土遺物］（図22～25）

土師皿（4～12）

4～8は直径8㎝程度の小型品で、口縁部には強くヨコナデを施す。9～11は直径約10㎝、器高が2㎝強を測る中型品で、口縁には煤が付着する。全体的に色調は淡黄褐色を呈する。12は13世紀代の土師皿で混入である。

陶磁器（13～52）

瀬戸・美濃焼（13～17）は唐津焼の出土量に比して非常に少ない。13は志野の皿である。復元口径11.2㎝を測り、口縁は端反になる。14は内面に緑釉、外面に鉄絵を施す軟質焼成の碗である。色調は乳白色を呈する。天目碗は口径に対して器高が低く口縁端部を外反させ、厚く鉄釉を施すもの（15）口縁が直立ぎみになるもの（16）、器高が6.9㎝と高く、口縁直下を強くナデるもの（17）がある。いずれも伊藤編年の連房Ⅰ期に位置付けられる（伊藤1994）。

中国製陶磁器（18、19）も出土量は少ない。18は碁笥底の皿で、外面には芭蕉葉文を描く。内面は蛇の目釉剥ぎになる。15世紀末～16世紀前葉。19は景徳鎮の蟠龍文碗で、見込みは饅頭心になる。底部に銘が入るが、判読不可能である。

20は唐津焼大皿で復元口径34.8㎝を測る。底部から直線的に開き、内面に段を有する。見込みには鉄絵で草花文を描き、胎土目痕が残る。

21～32は唐津焼の碗である。口縁が内彎ぎみになるA類（21～26）、口縁が外反するB_1類（27～31）、B_2類（32）がある。21は高台内に「十」字の刻線がみられる。27は内面に筋状の鉄絵が入る。32は胴部が強く屈曲するもので、やや新しい様相を示している。断面、釉ともに灰白色を呈し、全面に釉を施す。

33～52は唐津焼の皿である。B類（33～39）、E_2類（40～42）、A_1類（43～45）、A_2類（46）、C類（47）、D_1類（48）、D_2類（49、50）、E_3類（51）、F類（52）がある。目跡は胎土目が大半を占める。38は目跡が直交する形で配されるが、森毅氏はこの胎土目の配置を徳川初期（1615～1622）にみられる新しい様相であるとしている（森1997）。48、49は砂目である。48は溝縁皿の初期段階と考えられるもので、口縁の溝は凹みがほとんどみられず、端部が突出するのみである。33～35は内面に鉄絵を施す。50は底部を削り出さず糸切痕が残り、「十」字の墨書がある。この他43にも墨書があるが、判読不可能である。52は平面方形で、内面には鉄絵で草花文を描く。皿は碗に比べ、同種のものが何枚かセット関係になるとみられるものが多い。

土釜（53、54）

いずれも大和I_2型Ⅲ－2型式の土釜である。53はb類としたもので、復元口径21.0㎝、鍔径21.9㎝を測る。鍔は胴部の下位に位置し、底部は偏平になる。54はa類で、復元口径21.2㎝、鍔径24.4㎝を測る。53に比してやや胴部の張りが強い。内面にはハケメによる調整が残る。

瓦質土器（55～61）

55、56は鉢である。内面にはいずれも煤が付着する。香炉であろう。55は高台が付くタイプと考えられるが、底部が摩耗しており164のように台がつく可能性もある。体部は内彎し、口縁は内側に屈曲させ上端は平坦面を持つ。56は獣脚状の三脚が付く。体部外面にはミガキを施す。57～59は小壷である。復元口径は57が10.0㎝、58、59は12.2㎝を測る。いずれも体部上方に最大径をもち、口縁を上方に小さく突出させる。59には内面上部に煤が付着しており、火消し壷として用いられたと考えられる。土管（60）は結合部分が受口になるタイプである。61は摺鉢である。口縁には強いナデを施し外反させ、外面はハケメ調整を消すように斜方向の指頭圧痕が残る。摺目は10条1単位になる。内面には横方向の擦痕がみられる。佐藤編年（佐藤1996）のF期、近江編年（近江1994）の6期に該当するものと考えられる。

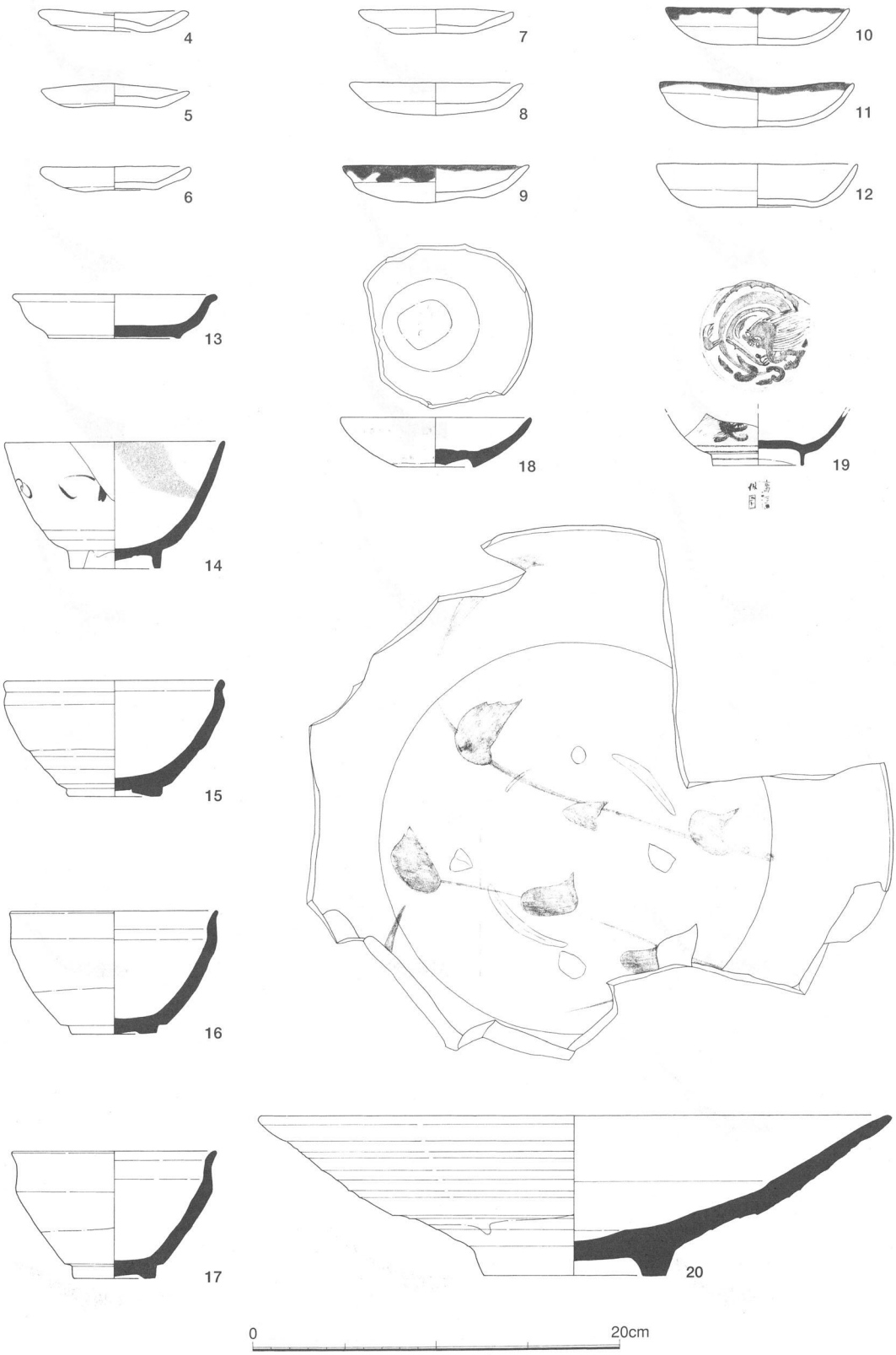


図22　SD-02 2層出土遺物実測図①（S:1/3）

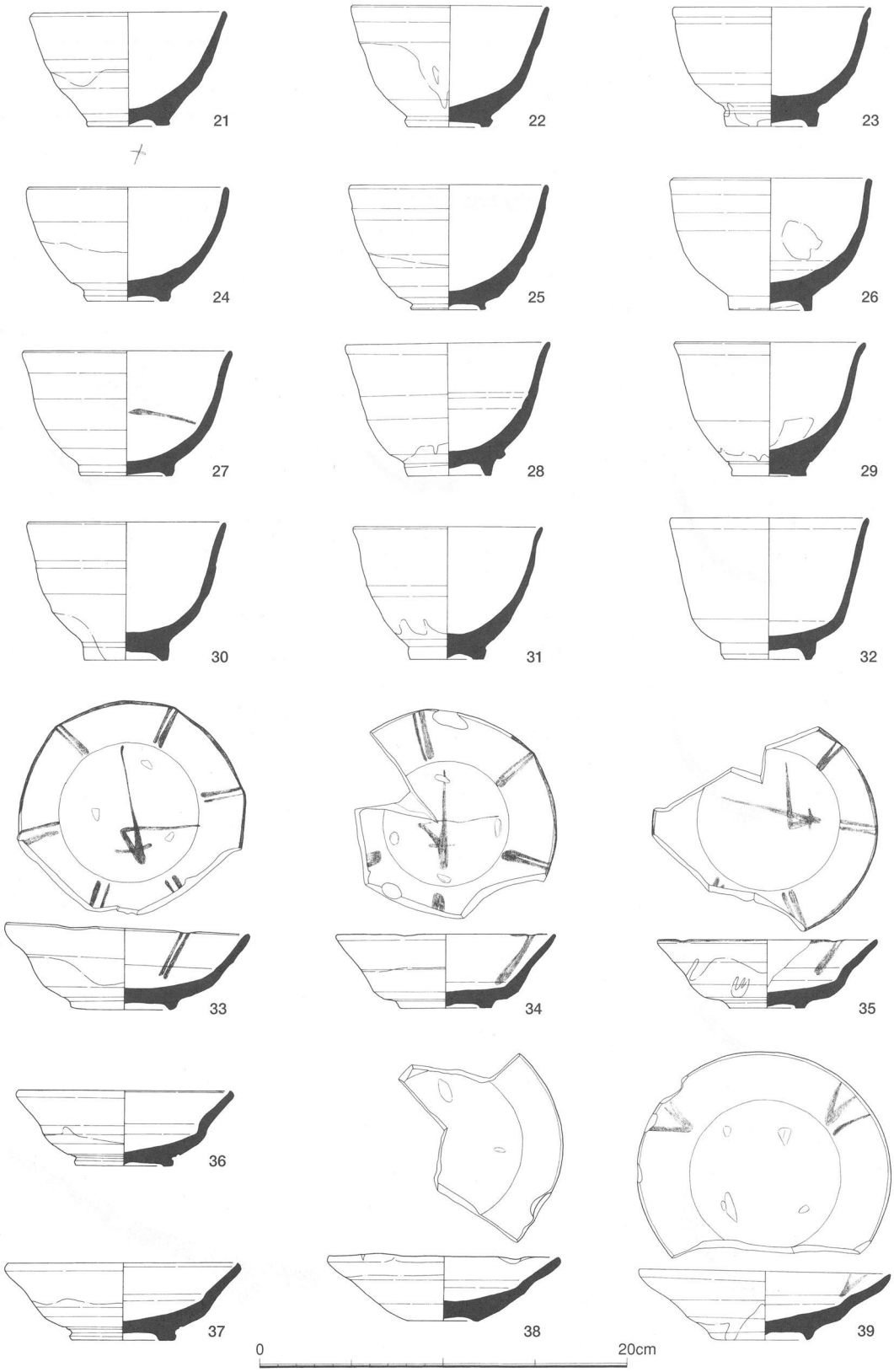


図23　SD-02 2層出土遺物実測図②（S:1/3）

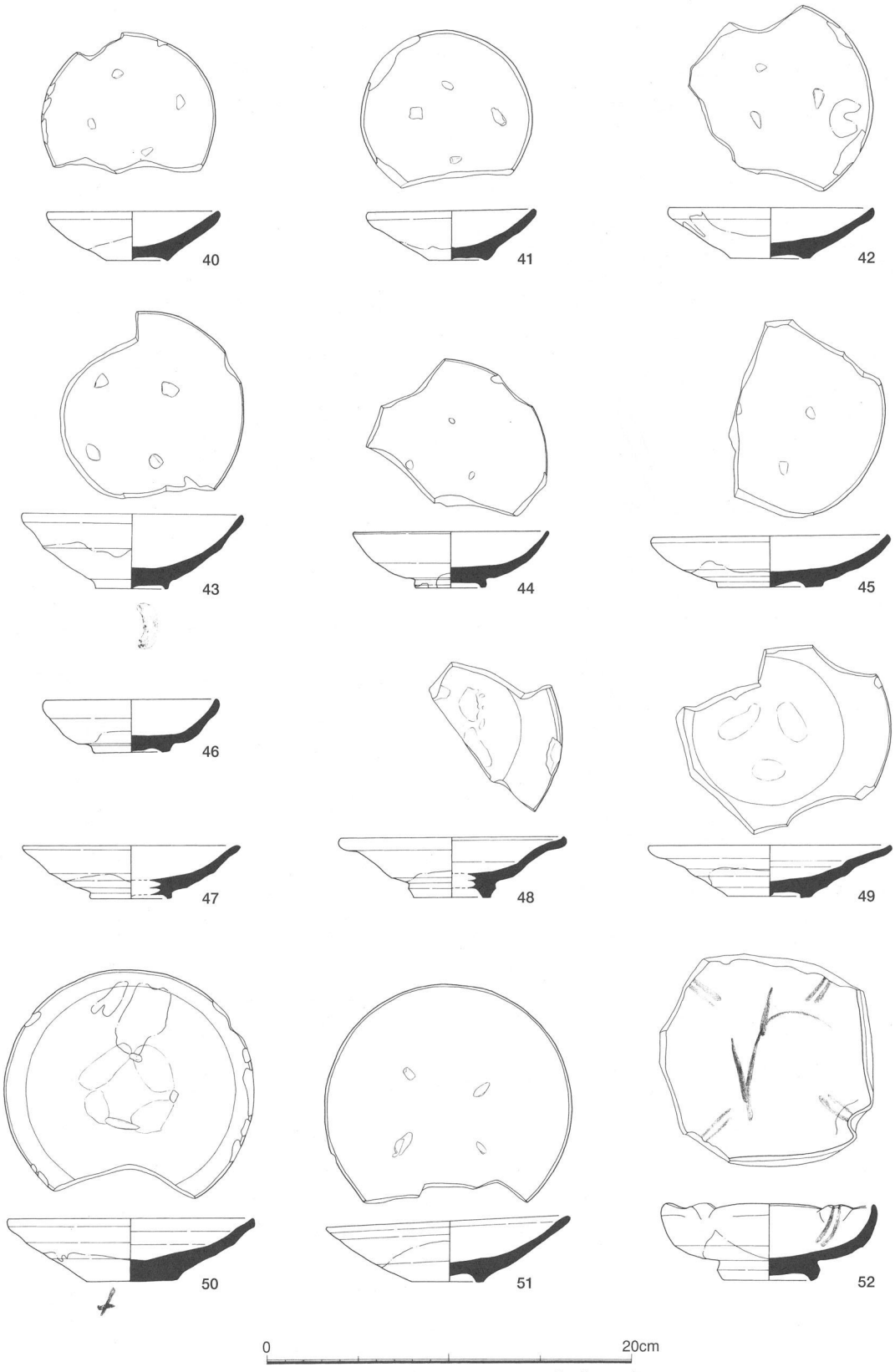


図24　SD-02 2層出土遺物実測図③（S:1/3）

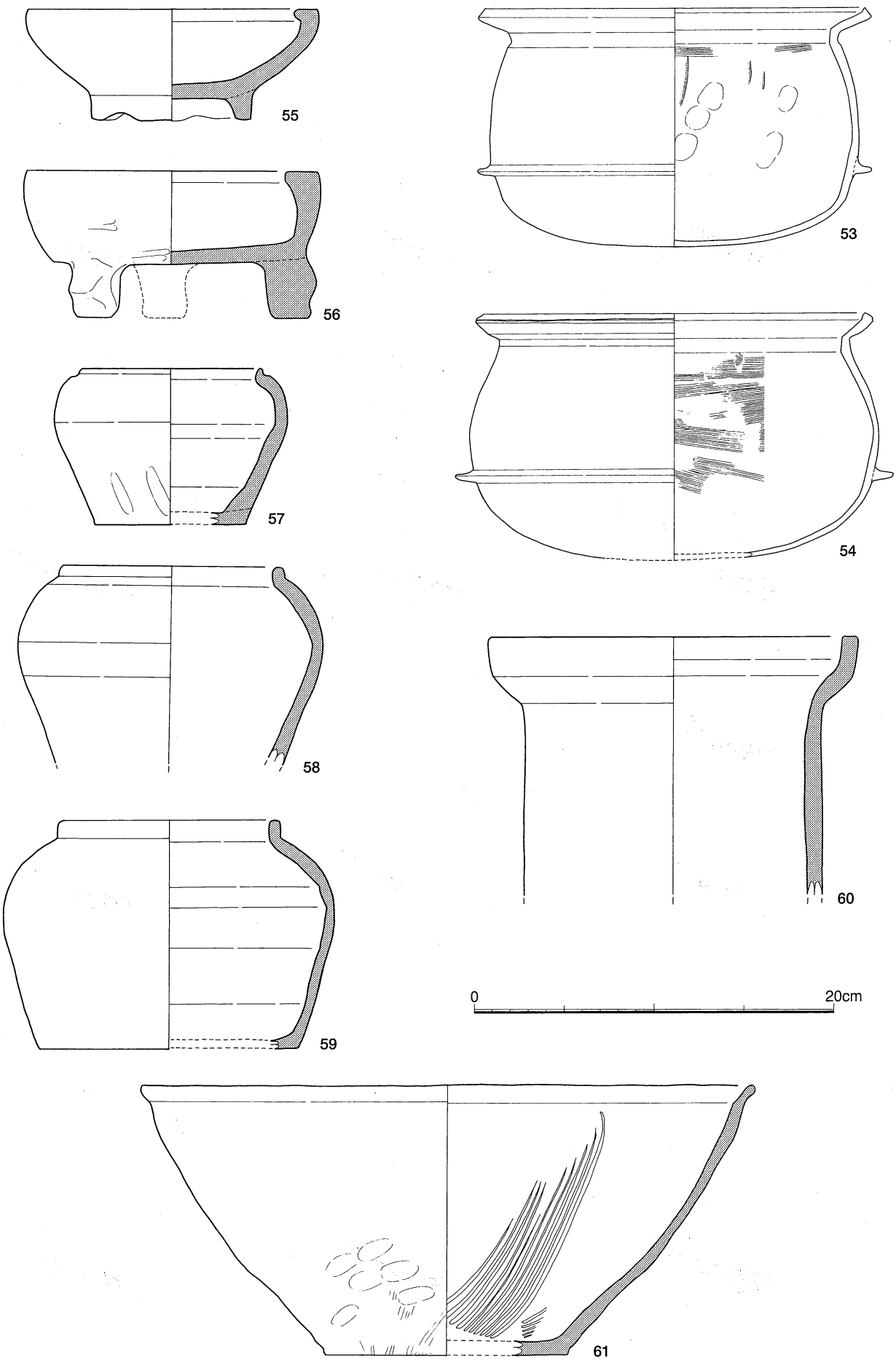


図25　SD-02 2層出土遺物実測図④（S:1/3）

［３層出土遺物］（図27～32）

土師皿（62～93）

62～70、72～81は直径7.5～8.5㎝を測り、口縁に強いヨコナデを施す。胎土はやや粗い。62～67はやや上げ底になる。81は見込み部分に墨書がある。判読は難しいが、梵字「ह」と思われる字がある。82～84は直径約９㎝、器高は約２㎝と深目で、全体に丁寧なナデを施す。85、87、88は直径10～11㎝、底部を不定方向にナデる。口縁に煤が付着するものはこの中型のタイプ（82～85、87、88）である。71、86、89～93は灰白色の精良な胎土をもち、底部は丸底ぎみになる。大型のタイプ（89～93）は、直径約12㎝を測る。

陶磁器（94～155）

94は瀬戸・美濃焼天目碗である。伊藤編年連房Ⅰ期。95、96は瀬戸・美濃焼灰釉皿。織部（97）は１点のみの出土である。脚付の変形向付で、半面に緑釉を掛け、もう半面に鉄絵を施す。

98～100は中国製陶磁器である。98は底部内面がゆるく饅頭心になる青花草花文碗である。99は陶胎の皿で見込みは蛇の目釉剥ぎになる。高台内に墨書の「宗」字がある。100は青磁碗の底部で、見込み部分に刻印を押す。15世紀後葉～16世紀前葉。

摺鉢は備前焼（102）のほか、丹波焼（101）及び信楽焼の破片がある。丹波焼は５条１単位の櫛描き摺目が入り断面は四角くなる。大平編年Ⅰ型式（大平1992）。103は備前焼の壷で、玉縁状の口縁をもつ。真壁編年Ⅴ期（真壁1966～68・84）。

唐津焼は２層と同様、装飾性の強い向付や壷等の茶道具類はほとんどなく、日常雑器と考えられる碗・皿が大半を占める。104～133は碗であり、Ａ類（104～115、117、118、130、131）、Ｂ類（120～129）、Ｃ類（116、119）、Ｄ類（132、133）に大別される。106、127は高台に刻線がある。115は高台の削り出しがあまく、極めて鈍なつくりである。天目形のＣ類とした116は小型で口縁を直立させ、端部は端反になる。白濁釉を掛け、鉄絵を施す。119は鉄釉により黒褐色を呈する。天目碗を意識していると考えられる。120は体部に成形時の接合痕を明瞭に残し、口縁部には大きな歪みがある（図26）。121、123は底部内面に胎土目痕がある。125、126、128～131は灰白色の釉を高台脇まで施し、同じく灰白色の緻密な胎土をもつ（B_2類）。132は白濁した釉を厚く掛け、胴部が大きく張り出し、口縁は強く端反る。上野・高取系の可能性が考えられる。

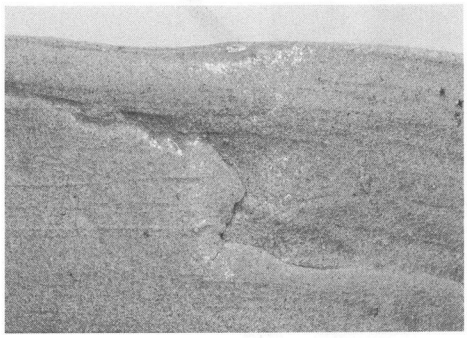


図26　唐津焼碗（120）の体部に残る接合痕

134～153は唐津焼の皿である。A_1類（134、135、137、139、142）、A_2類（138）、Ｂ類（144～148）、Ｃ類（143、150、151）、D_2類（152）、E_1類（140、141、149）、E_2類（136）、Ｆ類（153）に大別できる。目跡が砂目のものは148、152の２点のみである。いわゆる溝縁皿は１点（152）のみであるが、胎土は黄灰色を呈し、器壁はやや厚い。高台内には「十」字の墨書がある。144は胴部の屈曲が非常に強い。149は胎土目を円形に配している。150、151は見込み部分のケズリが顕著にみられる。153は口縁が直立するものである。

154は唐津焼小壷で、底径7.0㎝を測る。155は唐津焼小碗である。口径6.8㎝、器高3.6㎝で胴部が強く折れ口縁は直立する。

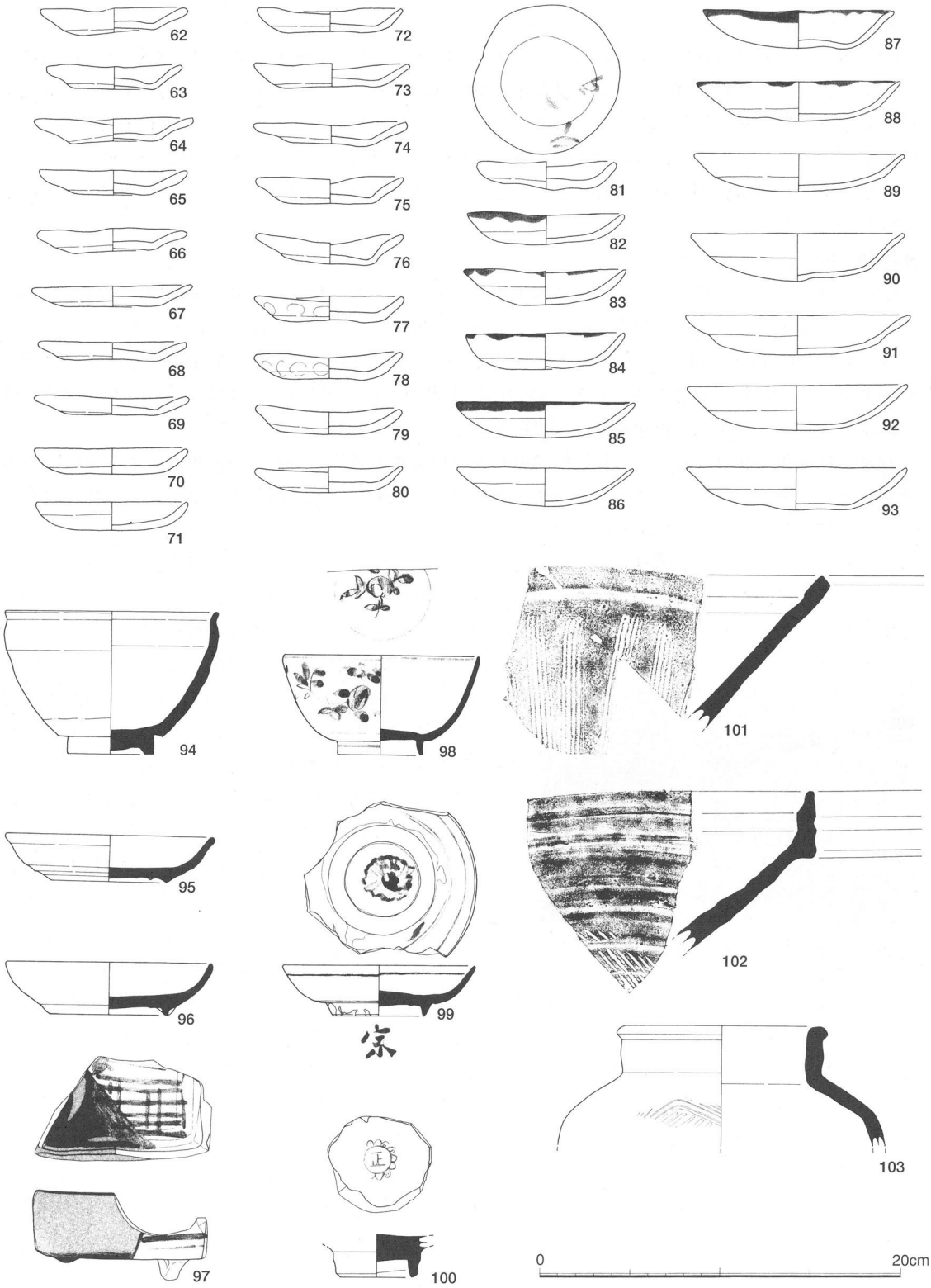


図27　SD-02 3層出土遺物実測図①（S:1/3）

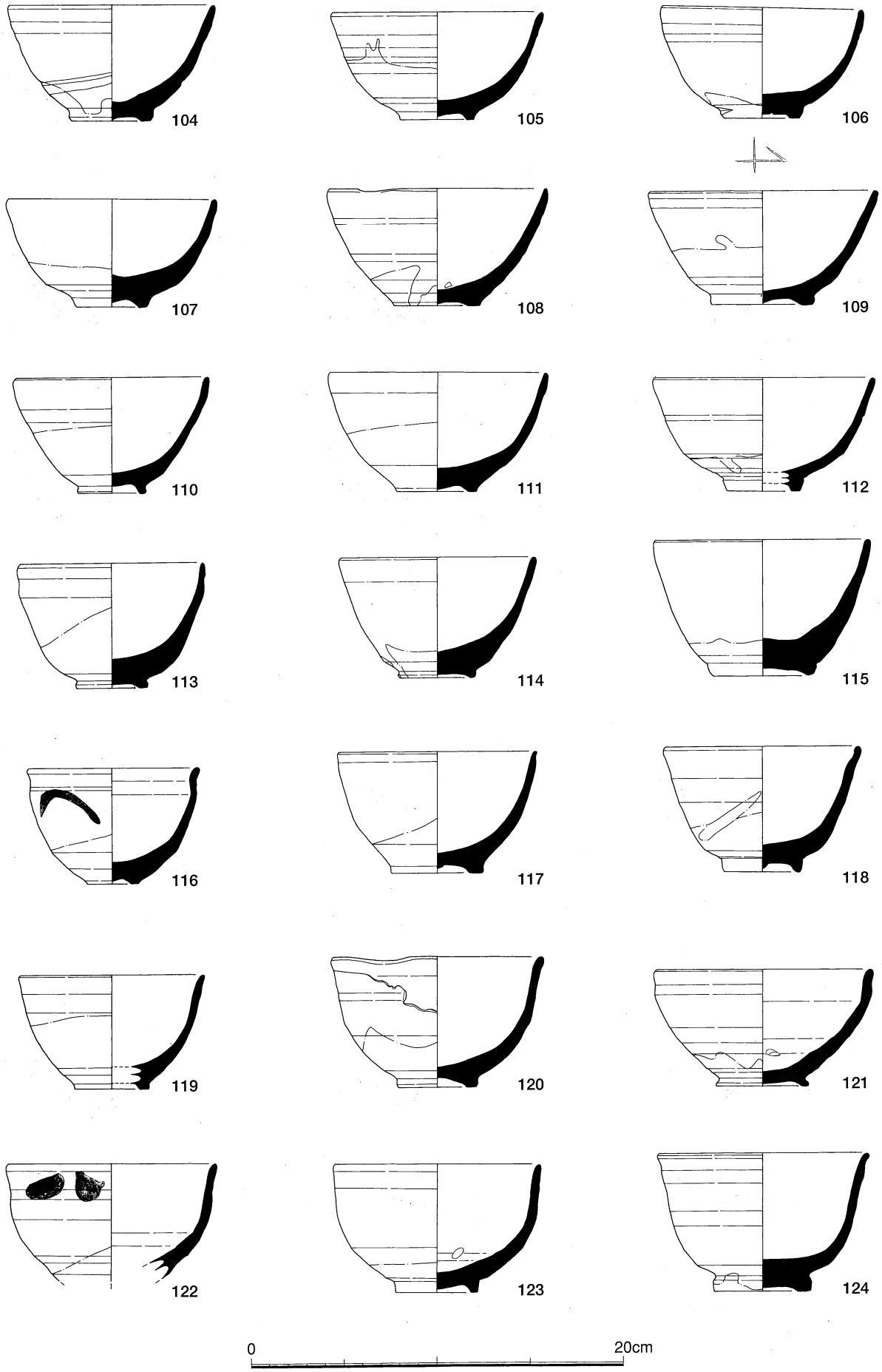


図28　SD-02 3層出土遺物実測図②（S:1/3）

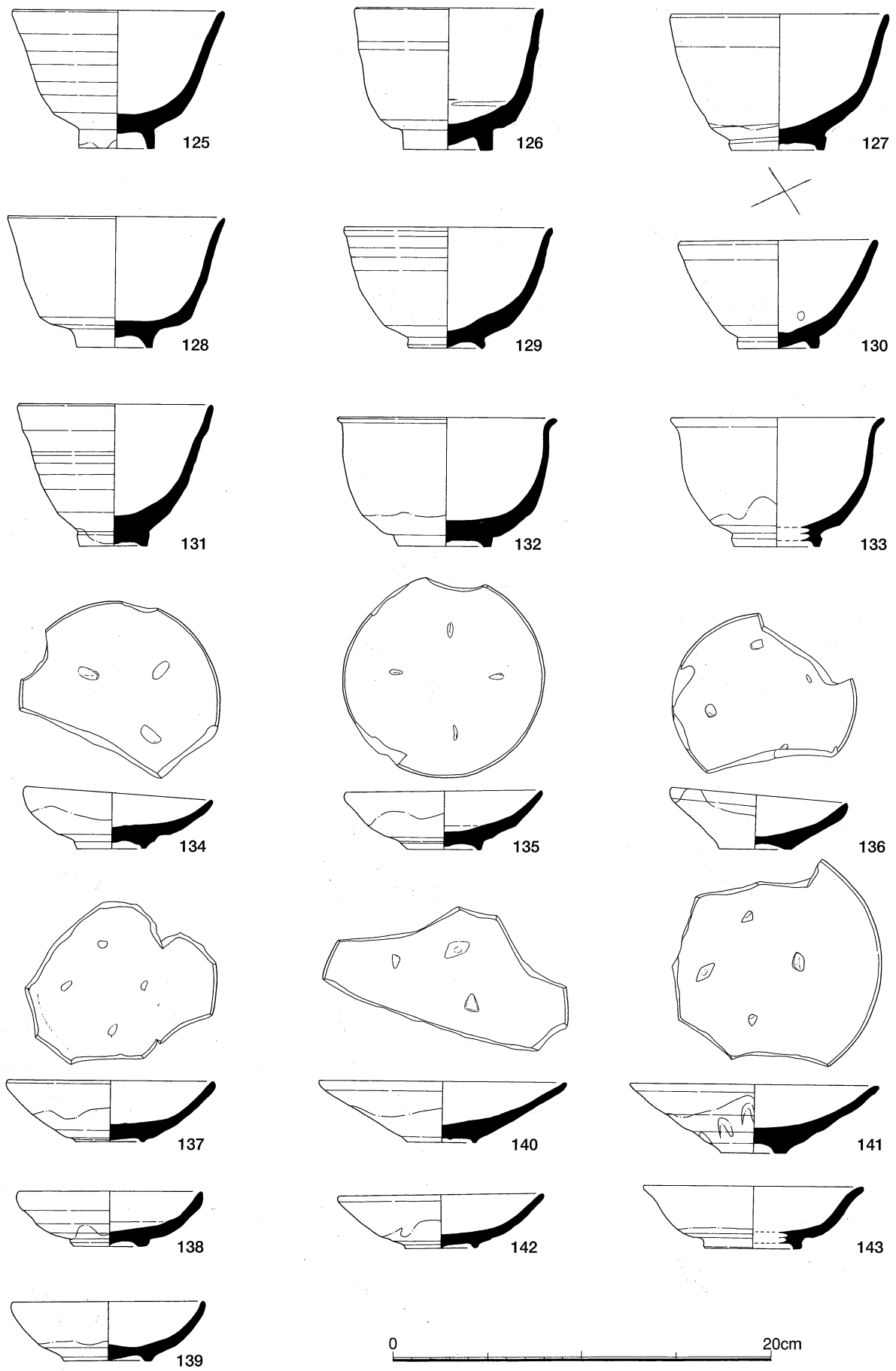


図29　SD-02 3層出土遺物実測図③（S:1/3）

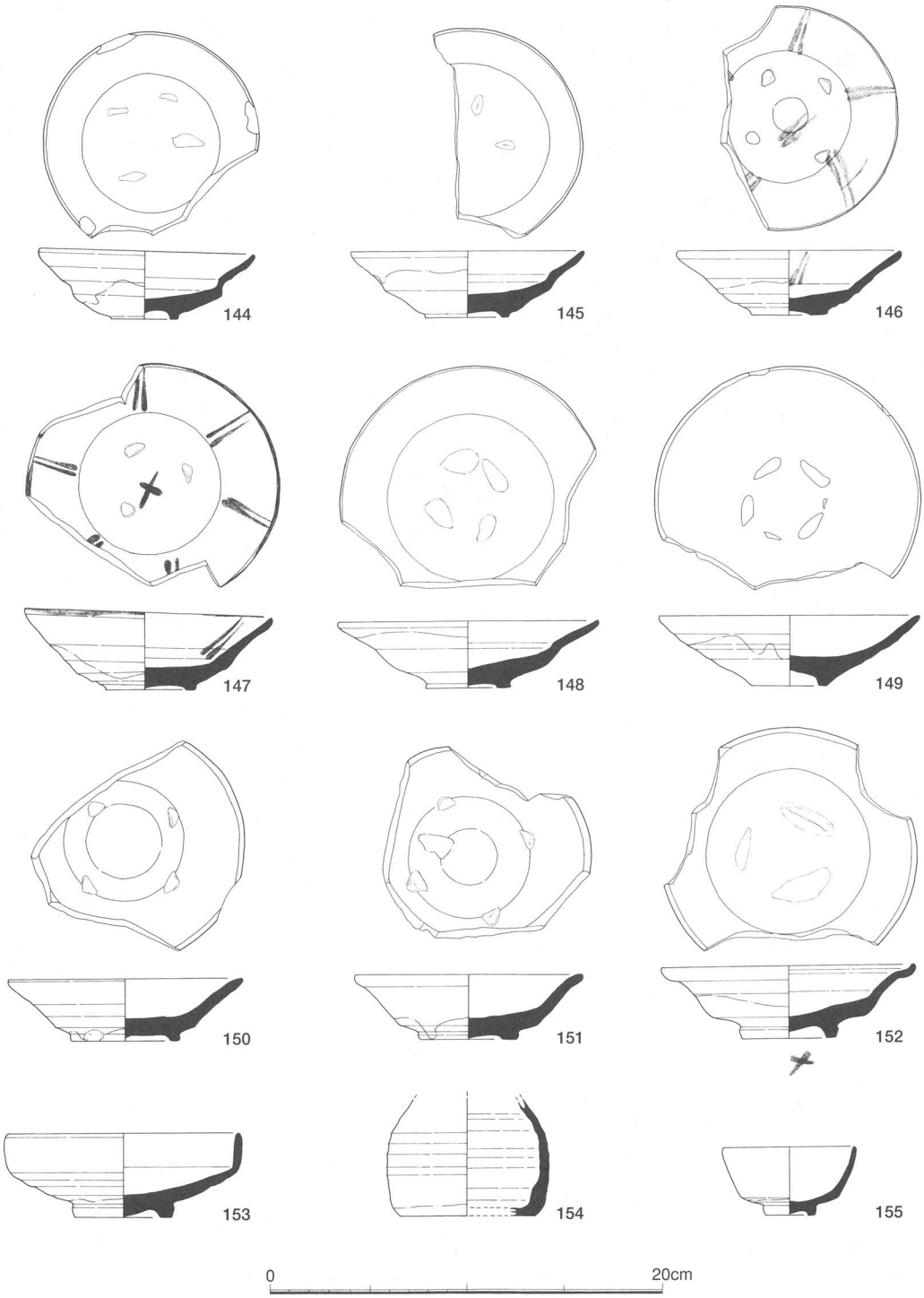


図30　SD-02 3層出土遺物実測図④（S:1/3）

土釜（156～161）

いずれも大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－２型式の土釜である。156～158、161はｂ類、159、160はａ類に属するものである。156は鍔径／口径は1.06とその比率は小さく、口縁部外面はやや肥厚し鈍い感がある。体部内面は丁寧にナデを施す。淡黄褐色。157は鍔径／口径は1.13、色調は淡赤褐色で、外面には口縁部まで煤が付着する。158は鍔径／口径は1.12で、口縁部は直線的に外方に開く。内外面ともに丁寧なナデを施す。159、160は鍔径／口径は1.20になる。159は口縁外面が肥厚し、淡黄褐色を呈する。外面は口縁付近まで煤が付着する。160、161は口縁部のつくりがシャープで、淡赤褐色を呈する。160は内面にハケメの調整痕が残るが、161は丁寧にナデを施す。

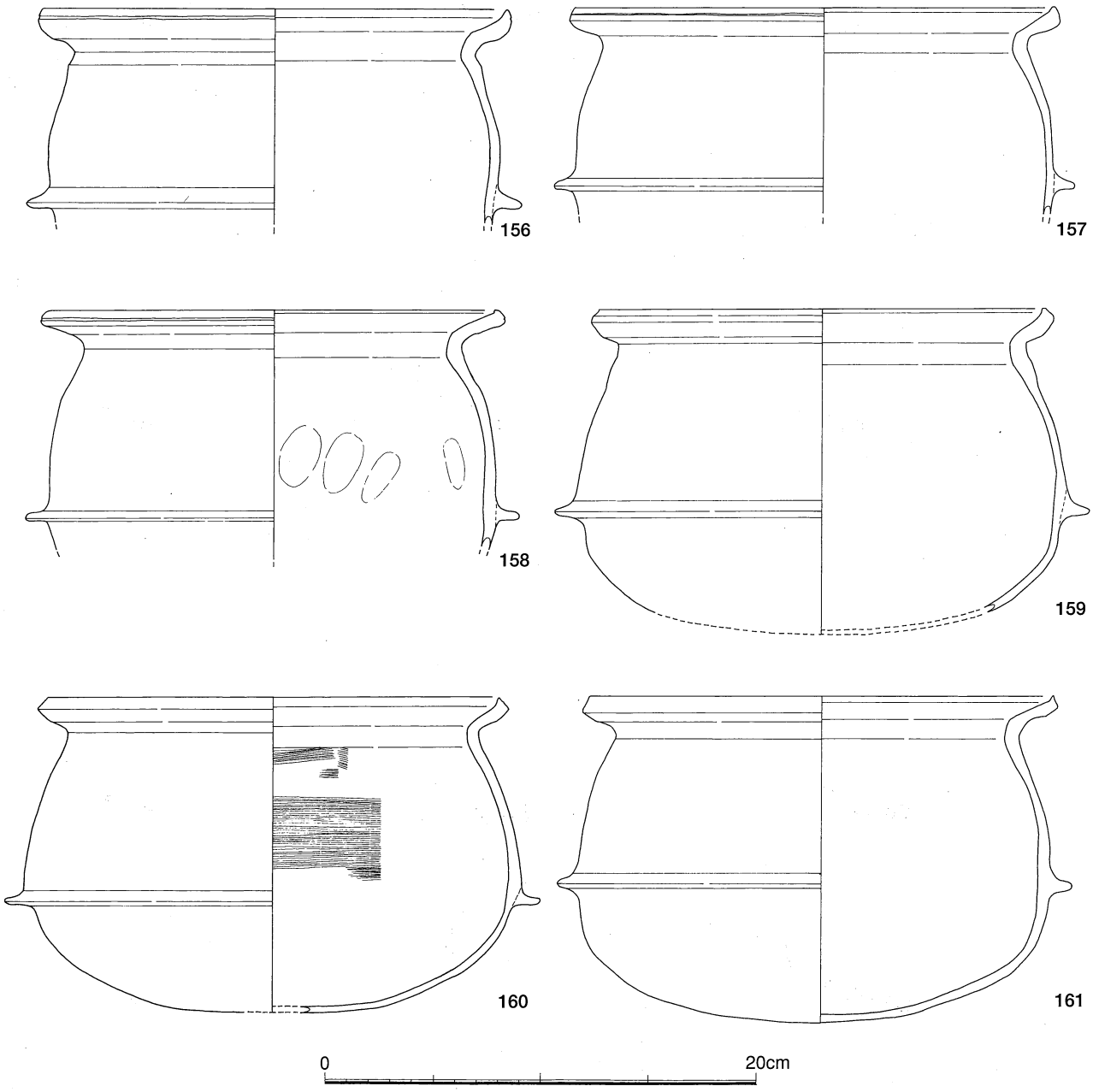


図31　SD-02 3層出土遺物実測図⑤（S:1/3）

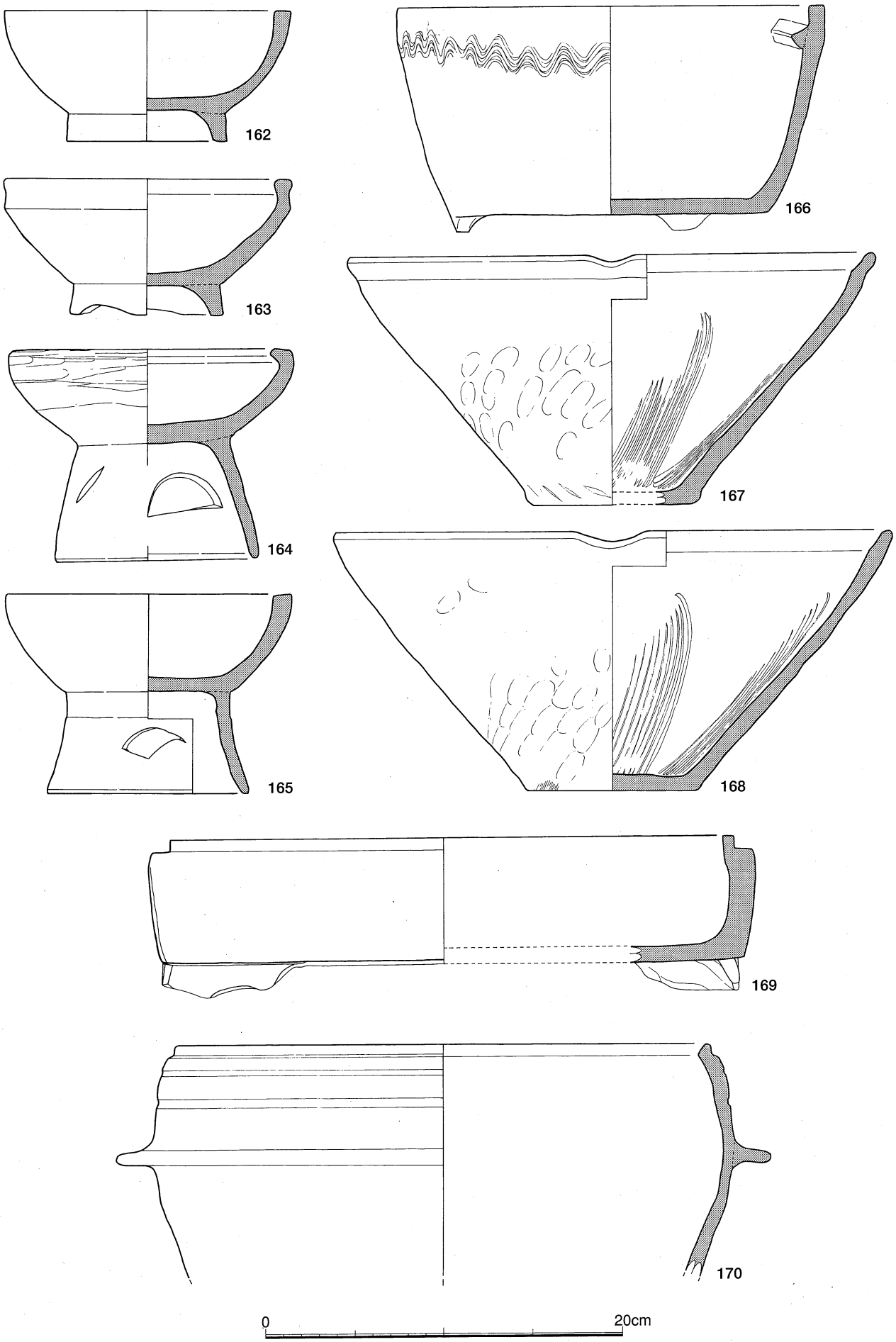


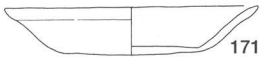
図32　SD-02 3層出土遺物実測図⑥（S:1/3）

瓦質土器（162～170）

162～165は鉢で、復元口径は15～16㎝とほぼ統一されている。162は内彎する体部をもち、高台がつく。162は体部が斜方向に立ち上がり、口縁はヨコナデにより直立ぎみになる。164は外側にまっすぐ開く台をもち、口縁端部は内側に折り返される。外面上部には丁寧なミガキを施す。柳葉形と半円形の透しが２つずつはいる。165は裾広がりの台に内彎する体部をもつ。166は火鉢である。内面には受部が２つ付き、短い三脚をもつ。外面上部には櫛描き波状文を施す。

167、168は摺鉢である。口縁にはヨコナデを施す。168は口縁の反りがややゆるく直線的になる。体部外面は成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。いずれも佐藤編年のＦ期、近江編年の６期にあたる。

169は平面が方形になる火鉢である。１辺は30㎝程度で、四隅に脚がつく。170は瓦質の土釜で、復元口径29.4㎝を測る。体部はゆるやかに内傾し、口縁端部は小さく外上方へ突出させる。口縁外面には２本の沈線がはいり、広めの鍔をもつ。



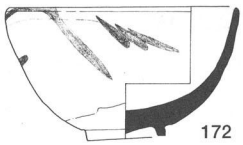


図33　SD-02 ４層出土遺物実測図（S:1/3）

［４層出土遺物］（図33）

４層は遺物量は少なく、図化可能なものは２点のみである。171は先に大型とした土師皿で、灰白色の精良な胎土をもつ。172はＡ類の唐津焼碗であるが、外面に鉄絵で草花文を描き、器形も整っており、他のものに比して異質である。

（２）SD-04出土遺物

本遺構はSD-02と接続すると考えられる溝である。遺物量はそれに比べやや劣るが、同等の資料的価値をもつ一括資料といえる。１層は遺物量は少ないが、２層との間に時期差は見られない。２層にはSD-02に比して若干時期が上がるのものも含まれるが、全体の組成から考えれば1620年代に比定できる。

［１層出土遺物］（図35）

173はＡ類、174はＢ類の唐津焼碗である。175は大和Ｉ$_2$型土釜で、川口編年Ⅲ－２型式（ｂ類）である。

［２層出土遺物］（図35・36）

176は瓦質土器火鉢と考えられ、底部には三脚がついていた痕跡がある。口縁部上面には２本の沈線がはいる。体部外面は２本の突帯を貼り付け、その間にヘラ描きにより斜格子文を施す。177、178は菅原分類（菅原1983）の大和Ｈ型土釜である。やや内傾ぎみの口縁をもち、端部を強くナデることにより外面に段をもつ。178はこの段が沈線状に凹むものである。時期的には16世紀前葉と考えられる。

179は備前焼摺鉢である。赤橙色を呈し、内面には放射状および斜め方向の摺目がはいる。真壁編年Ｖ期。180は瀬戸・美濃焼天目碗である。体部は高台から斜め上方にまっすぐ開き、口縁は直立し端部は端反になる。内反高台で、露胎部には化粧掛けが施される。伊藤編年の大窯後Ｉ期にあたる。

181はＢ類の唐津焼碗である。胴部は張り、灰白色の釉が掛かる。182はＡ類の唐津焼碗である。

183～191は唐津焼の皿である。183はＥ類で、高台内に墨で「○」を描く。184、186～191はＢ類であるが、184は口縁のナデの範囲が狭く、段が上部に位置する。186は口径に対して高台径が3.0㎝と

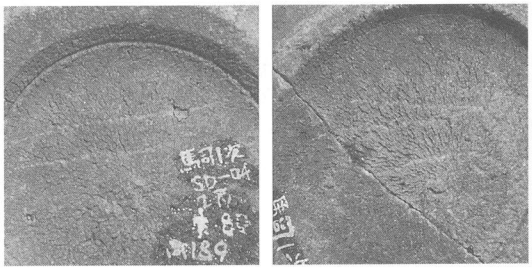


図34　高台内の刻線　左（189）、右（191）

小さい。187～191は鉄絵による装飾がある。いずれも平面は六角形になり、そのそれぞれの角の部分に２本線の鉄絵を施す。185はD$_1$類で目跡は砂目である。口縁部はヨコナデによりゆるく溝縁になるもので、溝縁皿の初期の段階と考えられる。高台内には「十」字の墨書がある。189、191には高台内に刻線がある。189は「＝」（図34左）、191は「≥」と記す（図34右）。

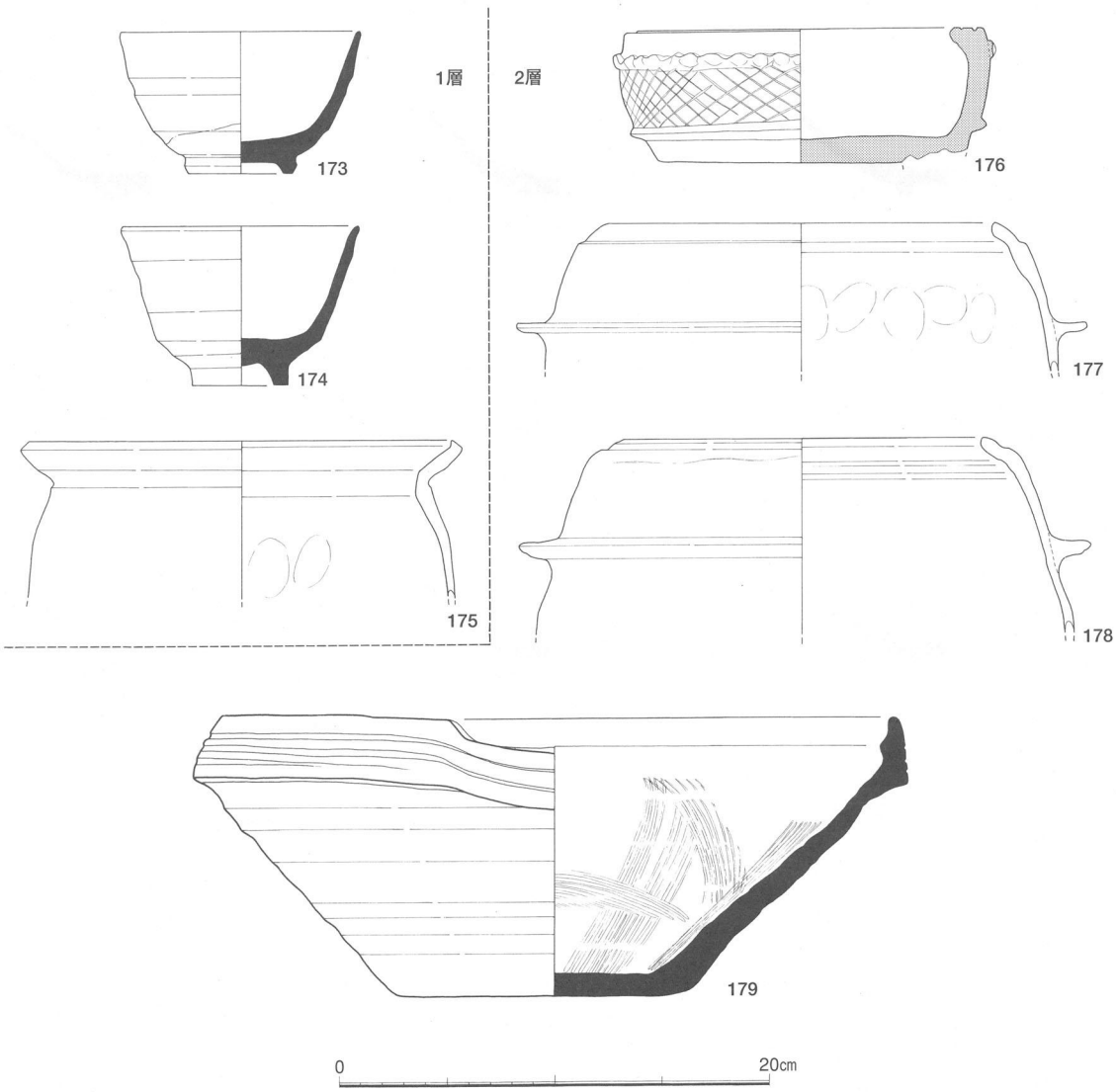


図35　SD-04 １層および２層出土遺物実測図（S:1/3）

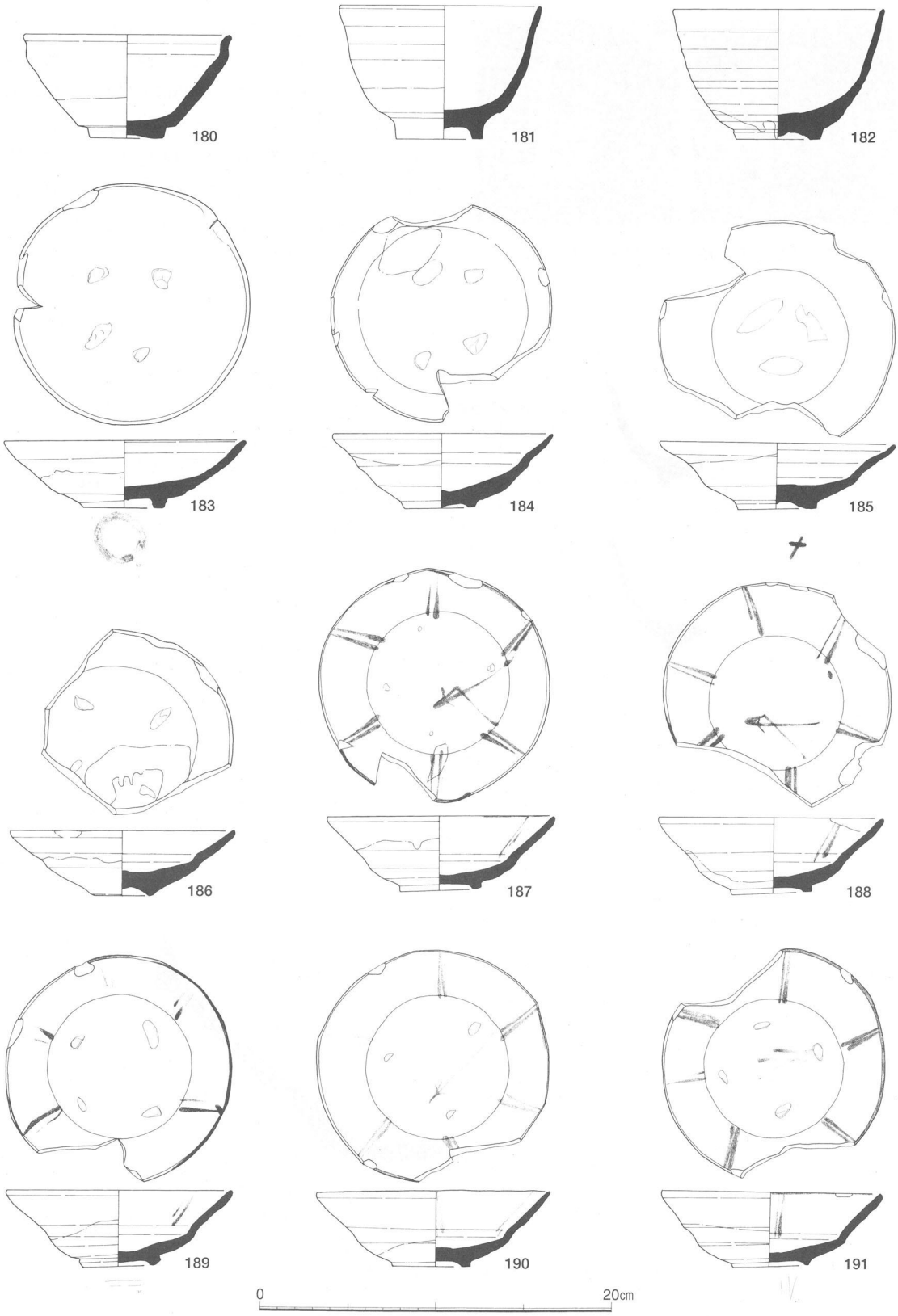


図36　SD-04 2層出土遺物実測図（S:1/3）

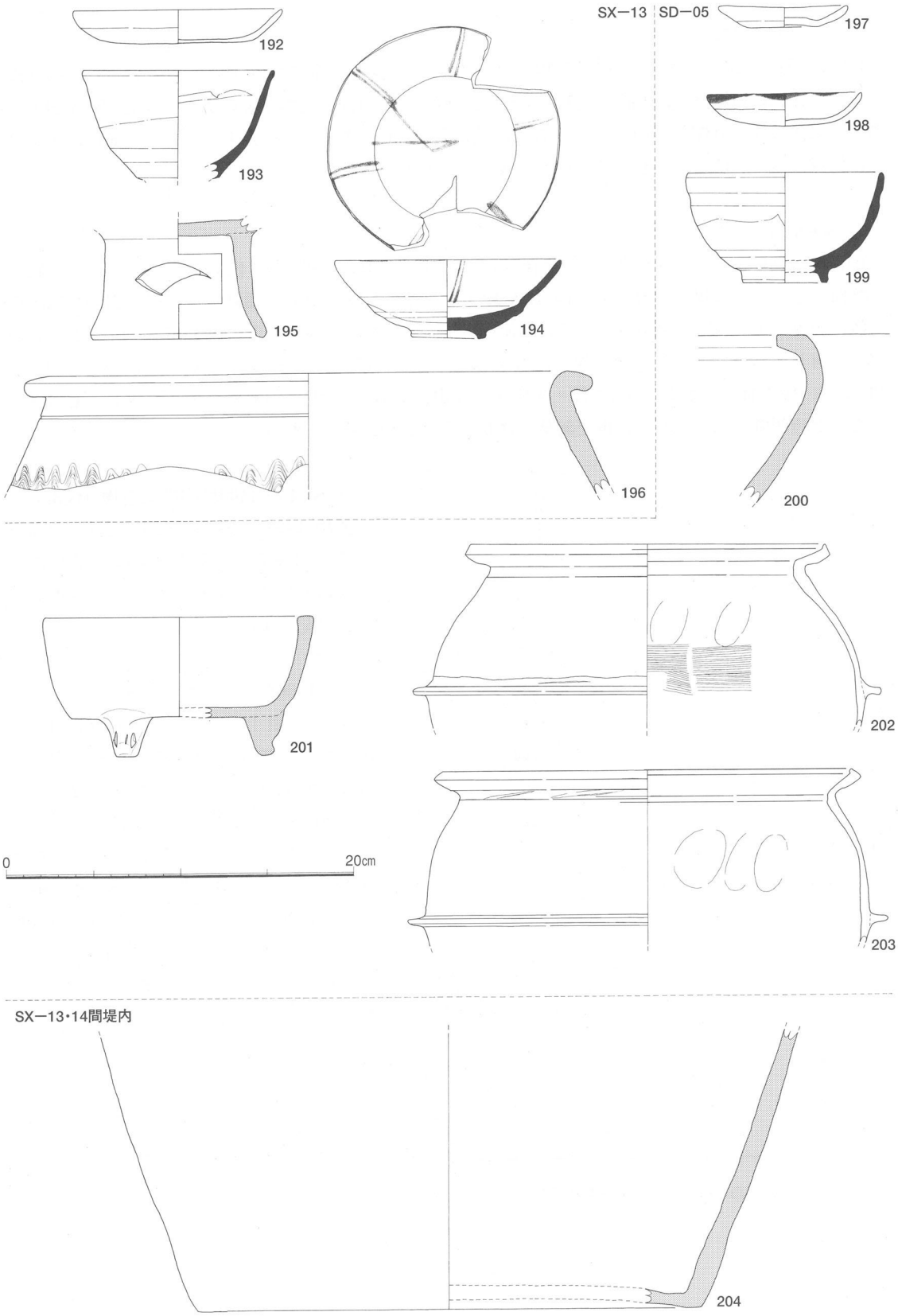


図37　SX-13、SD-05、SX-13・14間堤内出土遺物実測図（S:1/3）

（3）SX-13出土遺物（図37）

192は大型の土師皿である。193はB類の唐津焼碗。195は165と同形態と考えられる瓦質土器台付鉢である。194はB類の唐津焼皿で、鉄絵による装飾がある。196は瓦質土器の甕で、復元口径30.0cmを測る。口縁は強く外側に屈曲させ、体部上方には細かい櫛描き波状文を施す。これらの遺物は唐津焼及び瓦質土器の形態から判断して、1620年代のものと考えられる。

（4）SD-05出土遺物（図37）

197は上げ底ぎみになる土師皿で、直径は7.5cmを測る。198は中型の、内面に不定方向ナデを施す土師皿で、口縁には煤が付着する。199はA類の唐津焼碗。200は瓦質土器鉢で、口縁は内傾し端部を内側に屈曲させ上端には面をもつ。201は瓦質土器三脚付鉢である。復元口径15.6cm。脚には3条の刻みを有し獣脚状になる。内面に煤が付着することから香炉と考えられる。202、203は土釜である。202は川口編年Ⅲ－1型式、203はⅢ－2型式（b類）である。202は内面にハケメが残る。遺物量が少ないため明確ではないが、17世紀前葉にはおさまるものと考えられる。

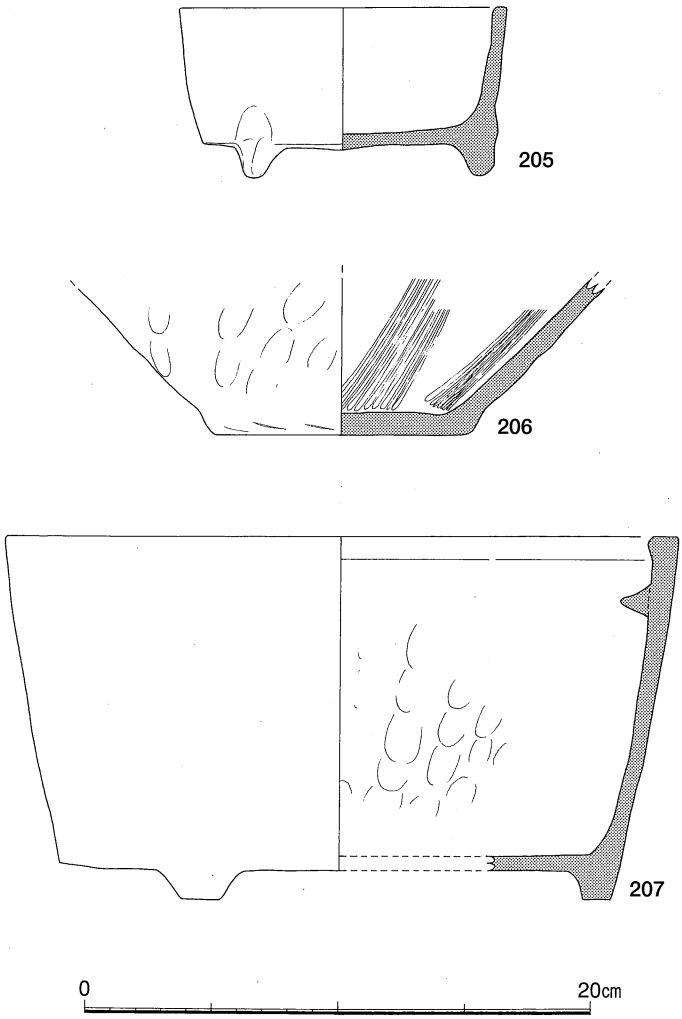


図38　SD-06A　出土遺物実測図（S:1/3）

（5）SX-13・14間堤内出土遺物（図37）

遺物は瓦質土器甕の底部（204）のみである。口縁部がないため全体の形状および詳細な時期は不明であるが、16世紀から17世紀前半のものであろう。

（6）SD-06A出土遺物（図38）

205は瓦質土器三脚付鉢。復元口径16.0cmを測る。脚部は獣脚状になる。内面には煤が付着することから香炉と考えられる。206は瓦質土器摺鉢の底部で、外面のハケメ調整がナデ消され、斜方向の指頭圧痕が残る。佐藤編年のF期、近江編年の6期に比定される。207は瓦質土器火鉢である。復元口径26.6cm、器高14.4cmを測る。断面四角形の三脚をもつ。内面には成形時の当て具痕が斜方向に残る。

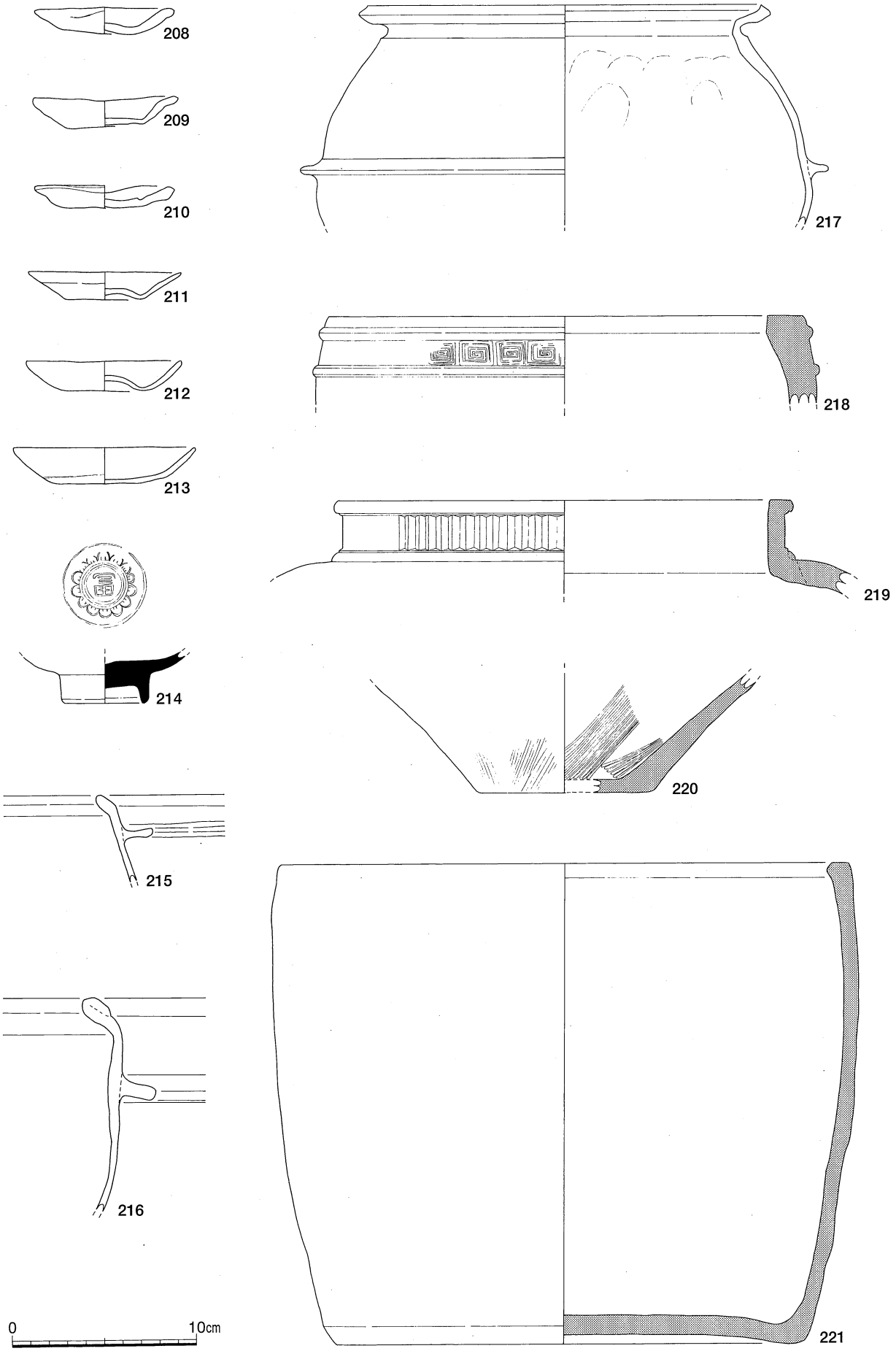


図39　SD-06B　出土遺物実測図（S:1/3）

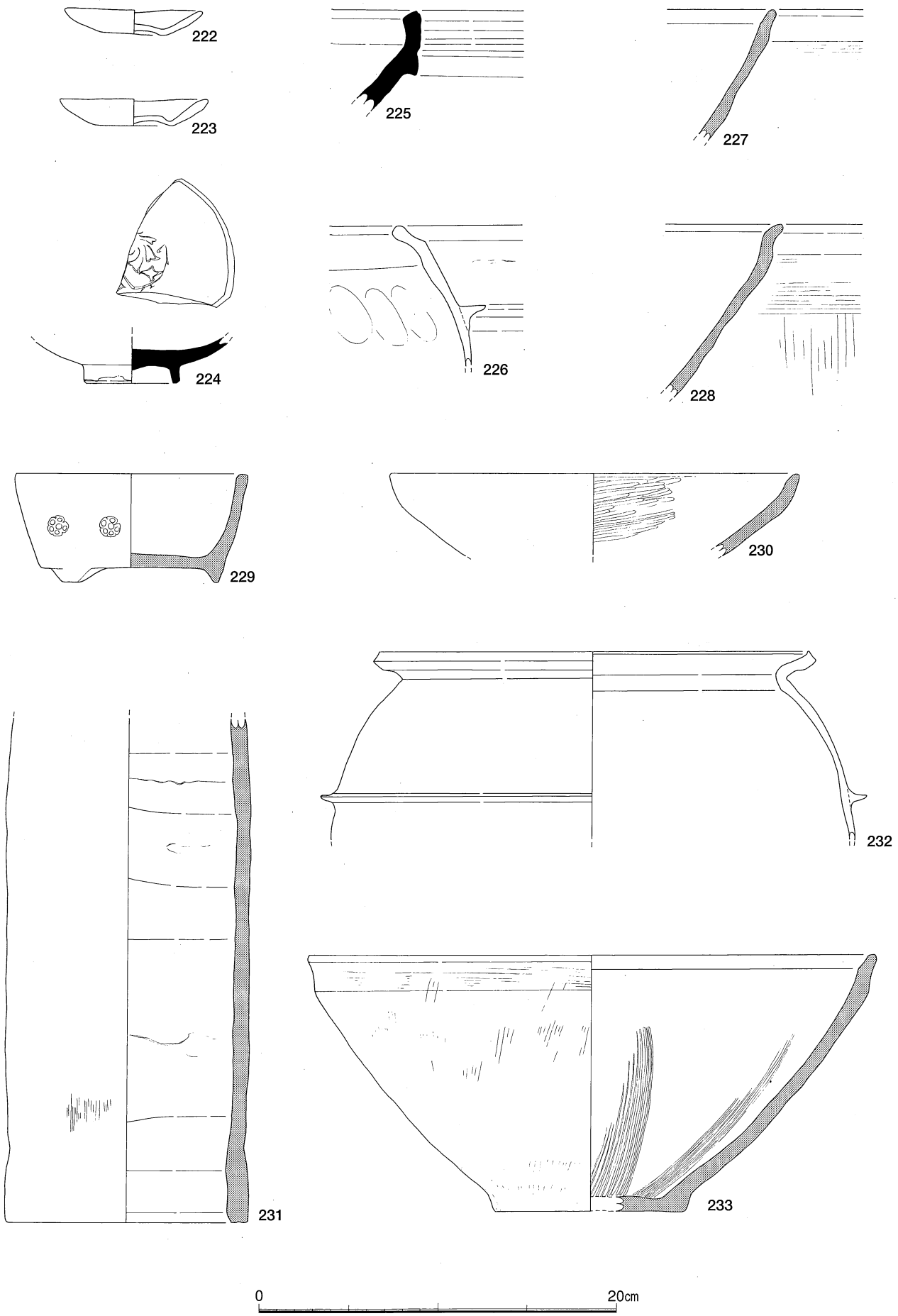


図40　SX-07　出土遺物実測図（S:1/3）

（７）SD-06B出土遺物（図39）

208～213は土師皿である。208～210は直径7.5～8.0cmを測り、口縁部に強いヨコナデを施す。器壁は厚くやや上げ底ぎみになる。211は直径8.4cm、器壁が薄く、胎土には雲母を多く含む。212は直径9.4cmで、底部は上げ底になる。胎土は精良で、淡黄橙色を呈する。213は直径9.8cmとやや大きく、灰白色の精良な胎土をもつ。

214は青磁碗の底部。見込み部分に刻印を押す。215、216は大和Ｈ型の土釜である。215は口縁を内傾し、端部は内側に屈曲させる（H_3型）。鍔上は約２cmと短い。216は体部が直立し、口縁を内傾させた後、端部を外側に折り返して押さえるもの（H_1型）で、灰白色を呈する。

217は大和I_2型の土釜で川口編年Ⅲ－１型式にあたる。218は瓦質土器鉢の口縁である。断面形態は四角形で、２本の突帯を張り付け、その間に雷文の連続スタンプを押す。219は風炉の口縁である。220は瓦質土器摺鉢の底部。外面にはハケメが残る。佐藤編年Ｅ期、近江編年４期にあたるものであろう。221は瓦質土器の深鉢である。口径30.8cm、器高26.1cmを測り、バケツ形を呈する。

これらの遺物は土釜および瓦質土器摺鉢から16世紀後葉に比定できる。

（８）SX-07出土遺物（図40）

222、223は土師皿で、直径はそれぞれ7.7cm、8.2cmを測る。口縁のヨコナデは強く、上げ底になった底部との境が溝状に凹む。色調は淡黄褐色である。

224は青磁碗の底部。見込み部に草花文の陰刻を施す。225は備前焼摺鉢の口縁である。端部にナデを施し面をもつ。真壁編年のⅣ期にあたる。

図41　花文のスタンプ（229）

226は大和Ｈ型の土釜。体部は内傾し、口縁部にはヨコナデを施す。鍔以下には煤が付着する。227、228は瓦質土器摺鉢である。227は外面を横方向にハケメ調整した後、それをナデ消す。228は前者よりも口縁が強く外反し、縦方向のハケメを切って、横方向のハケメ痕が残る。229は瓦質土器の三脚付鉢である。復元口径13.0cmを測る。外面には花文のスタンプを押す（図41）。230は瓦質土器浅鉢で、復元口径23.0cmを測る。内面には横方向の丁寧なミガキを施す。231は瓦質土器の土管である。結合部は60のような受け部はなく、やや裾広がりになっておわる。内面には粘土の接合痕が明瞭に残る。

232は土釜である。川口編年大和I_2型Ⅲ－１型式。233は瓦質土器摺鉢である。復元口径31.4cm、器高15.3cmを測る。内彎ぎみの体部にゆるく外反する口縁をもつ。外面はハケメ調整の後、それをナデ消している。１単位が11条の摺目が入る。

これらの遺物は16世紀後葉に位置付けられる。

（9）SD-01出土遺物

15世紀後葉に位置付けられる一括資料である。奈良市史跡大安寺旧境内第85次調査のSD-02資料、および同市元興寺旧境内・奈良町遺跡第48次のSK-15資料（中島2001）等とほぼ並行するものと考えられる。

［1層出土遺物］（図43）

234は土師皿である。直径7.6㎝。235は瓦質土器風炉の口縁と考えられる。外面に雷文のスタンプを押す。236は備前焼甕の底部である。

［2層出土遺物］（図44）

237は瀬戸・美濃焼天目碗である。口縁はほぼ直立し、内反高台になる。高台の露胎部分には化粧掛けを施す。藤澤編年古瀬戸後Ⅲ期。238は青磁碗の底部であるが、高台は一部分残るのみで、大半は打ち欠かれており、円形加工品（土［陶］製円盤）の未製品である可能性も考えられる。239は備前焼摺鉢。240は備前焼甕と考えられる。241は信楽焼摺鉢。

242は瓦質土器土釜で、内傾する口縁をもち端部は上方に突出させる。外面には2条の沈線がはいる。243は瓦質の椀であり、口径11.2㎝、器高3.4㎝を測る。丸底で、口縁にはヨコナデを施す。器壁は厚く、焼成もあまい。244は瓦質土器小壷である。体部はまるみをおび、口縁を小さく突出させる。245は瓦質土器の蓋と考えられる。246は瓦質土器鉢の口縁である。247は瓦質土器火鉢の口縁で、外面に2条の突帯を貼り付ける。248は瓦質土器風炉の口縁である。

図42　摺鉢外面に残るハケメ（249）

249～251は瓦質土器摺鉢である。249は内彎する口縁をもち、端部にナデを施しわずかに外反させる。外面上部には横方向のハケメが明瞭に残る（図42）。摺目は1単位7～8条である。佐藤編年C期、近江編年3期に該当するものである。

252～260は土師皿である。252～258は直径約7～8㎝、口縁はヨコナデによりやや外反し、底部は弱く凹む。淡黄褐色を呈するが、形態からみると赤土器の系譜をひくものと考えられる。259は底部の平坦面が広く、復元口径は12.6㎝を測る。外面には煤が付着する。260は復元口径12.8㎝、灰白色の精良な胎土をもち、丸底になる。

261～267は菅原分類大和H_3型の土釜である。261、266、267は口縁がほぼ直立し、端部のヨコナデにより外面に明瞭な段を有する。鍔の端部は沈線状に凹む。262～264は内傾する口縁をもつ。263は内面に5条1単位のハケメを施す。265は鍔上が短く、口縁部を内側に強く屈曲させる。器壁はやや薄い。268～272は大和I_2型の土釜である。268、269、271は口縁部を外方に「く」の字状に強く屈曲させた後、2段のヨコナデを施す。それに対して、270、272のヨコナデは1段で外面はまるみをおびる。いずれも上端部には平坦面をもつ。270、271は内面の屈曲点直下にハケメによる調整痕が残る。川口編年のⅠ－1～Ⅰ－2型式に属するものであろう。

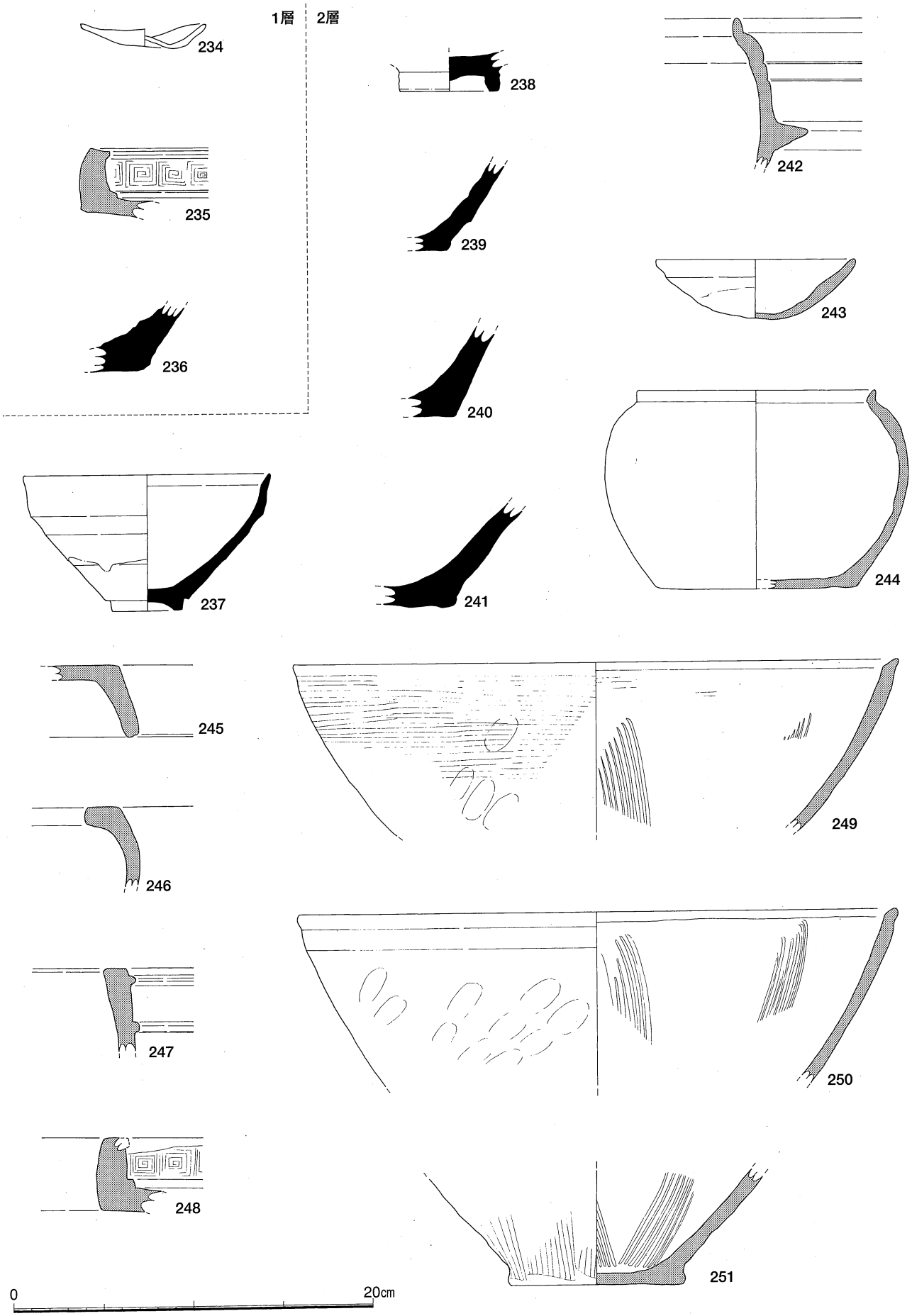


図43　SD-01 1層および2層出土遺物実測図（S:1/3）

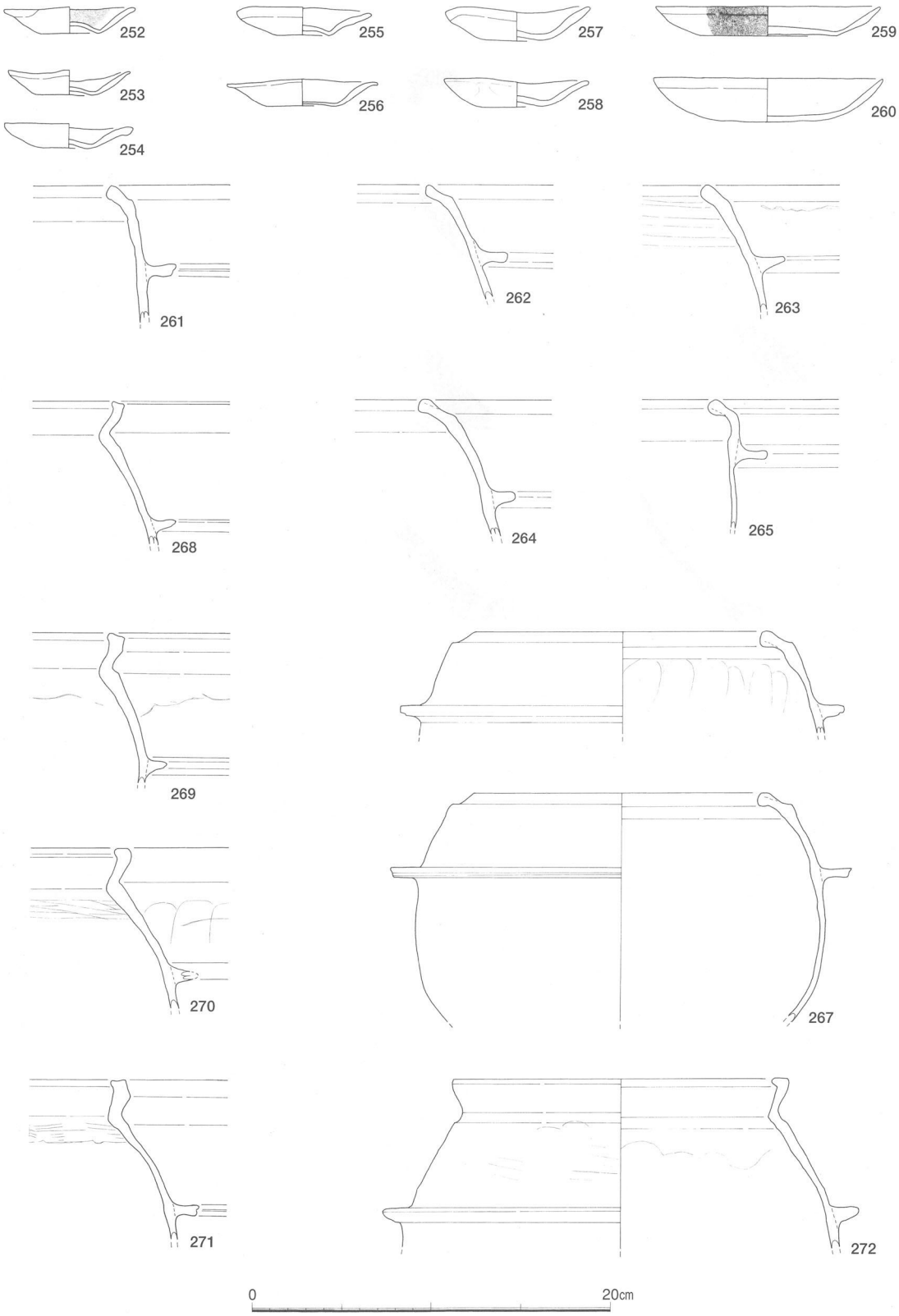


図44　SD-01 2層出土遺物実測図（S:1/3）

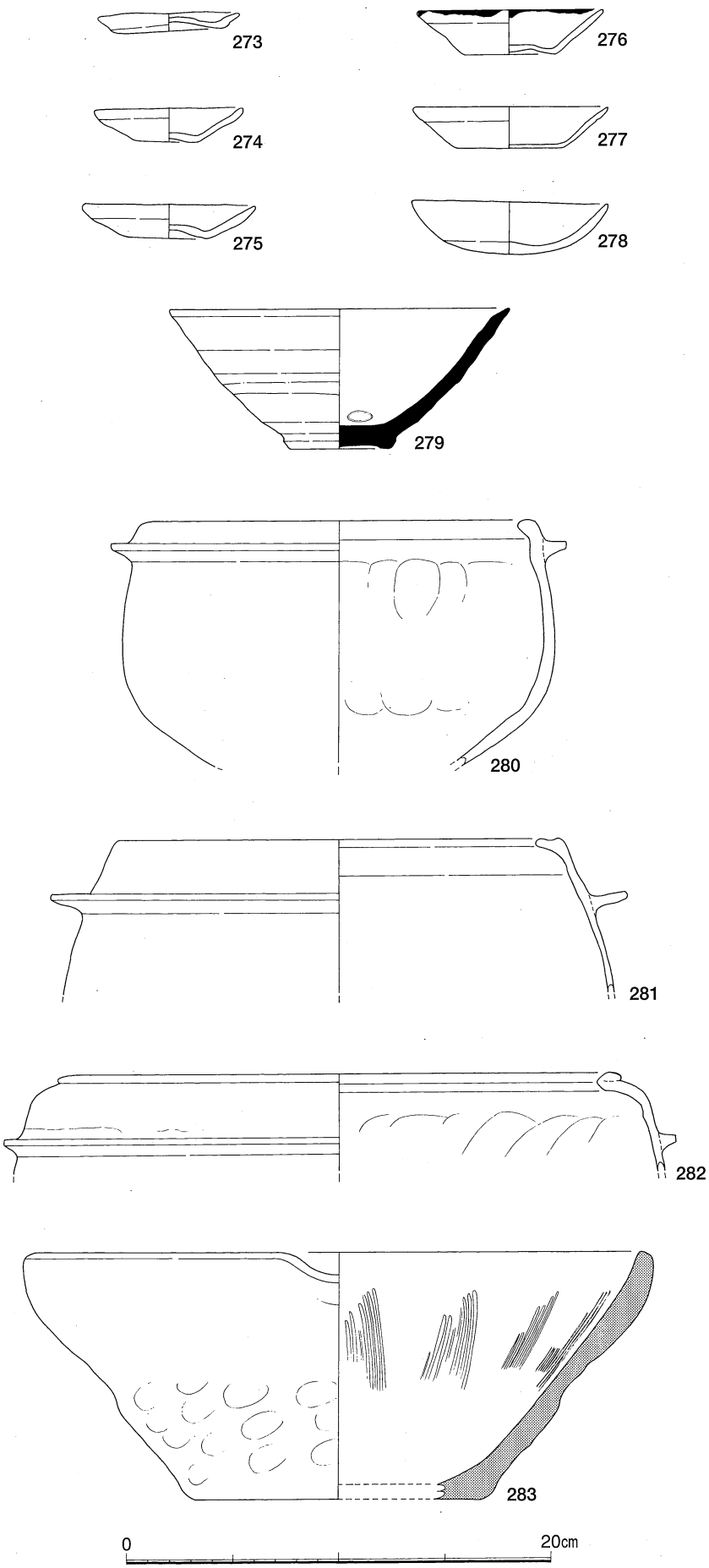


図45　SD-15 出土遺物実測図（S:1/3）

(10) SD-15出土遺物（図45）

273～278は土師皿である。灰白色系のもの（273、278）と、赤褐色系のもの（274～277）がある。273は直径6.6cmと小さく、口縁外面はヨコナデにより段を有する。274、275は底部を押し上げる、いわゆるへそ皿である。276、277は平坦な底部をもつ。276には口縁に煤が付着する。277は器壁が薄くきれいなつくりである。278は丸底で、底部外面に煤が付着する。

279は瀬戸・美濃焼平碗。体部はゆるく内彎し、口唇部には面をもつ。高台は削り出しによる。内面底部には目跡がある。藤澤編年古瀬戸後Ⅱ期。

280～282は大和H型の土釜である。280は復元口径18.4cmでやや小型であるが、器壁は厚い。鍔は口縁直下に付き、胴部はやや下膨れになる。281は復元口径20.8cm、口縁は内傾し、端部は内側に屈曲させ、上端部は凹ませる。色調は淡黄褐色である。282は復元口径26.0cmとやや大きい。口縁は強く内彎させ、端部を外側に折り返す。色調は黄橙色。

283は瓦質土器摺鉢である。復元口径14.3cm、器高11.6cmを測る。口縁に幅広いヨコナデを施し、断面は台形になる。器壁は厚く灰白色を呈する。佐藤編年のA期に該当する。

これらの遺物は14世紀末～15世紀初頭に位置付けられよう。

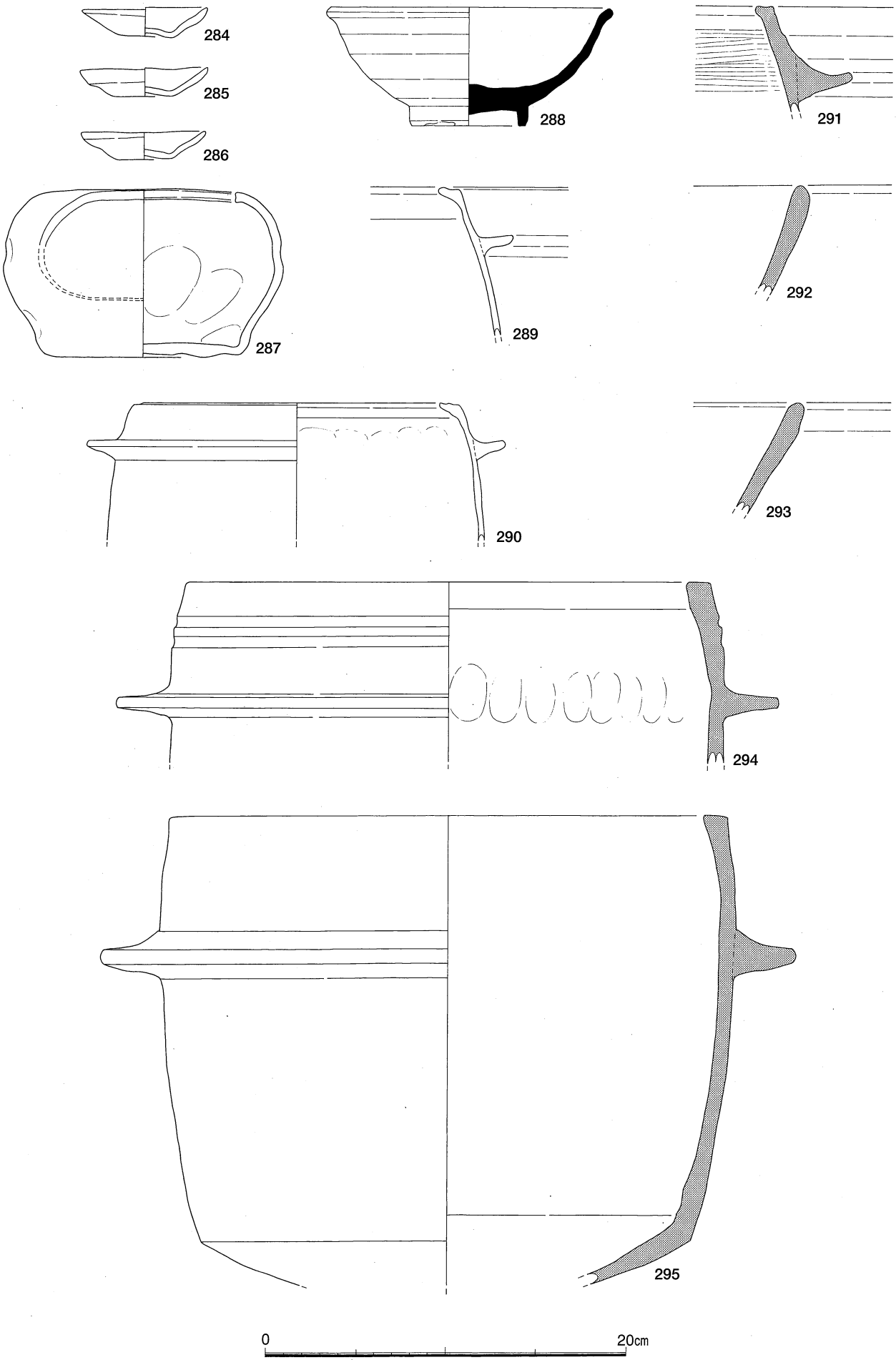


図46　SD-07 出土遺物実測図（S:1/3）

(11) SD-07出土遺物（図46）

284～286は土師皿である。直径約7.0㎝で、淡赤橙色を呈する。287は土師質の香炉と考えられる。正面に楕円形の窓が開く。窓部分はヨコナデにより調整するが、それ以外の部分は成形時の指頭圧痕が明瞭に残る。289、290は大和H_2型の土釜である。289は端部上面をヨコナデにより凹ませるが、290は２本の沈線が入る。鍔より下の部分には煤が付着する。

291は瓦質の土釜である。口縁は内傾し、外面は２条のケズリにより段が付く。内面はハケメ調整。292、293は瓦質土器摺鉢である。292は外面端部にわずかに面をもち、293は口縁に幅広いナデを施す。294、295は瓦質土器土釜で、口径は約30.0㎝と大型である。口縁の断面形状は四角形で、体部は直立する。294は口縁外面に２本の沈線が入る。これらの遺物は14世紀末～15世紀初頭に位置付けられる。

(12) SD-14出土遺物（図47右上）

296は土師皿で、復元口径8.6㎝、口縁に煤が付着する。297は川越編年Ⅳ－Ｄ型式にあたる瓦器椀である(川越1983)。口縁端部に沈線はなく、まるく収める。298は大和H_1型の土釜。口縁は強く内折し、端部を外側に折り返す。鍔は口縁直下に付く。淡黄褐色。いずれも14世紀後葉～末に位置付けられる遺物群である。

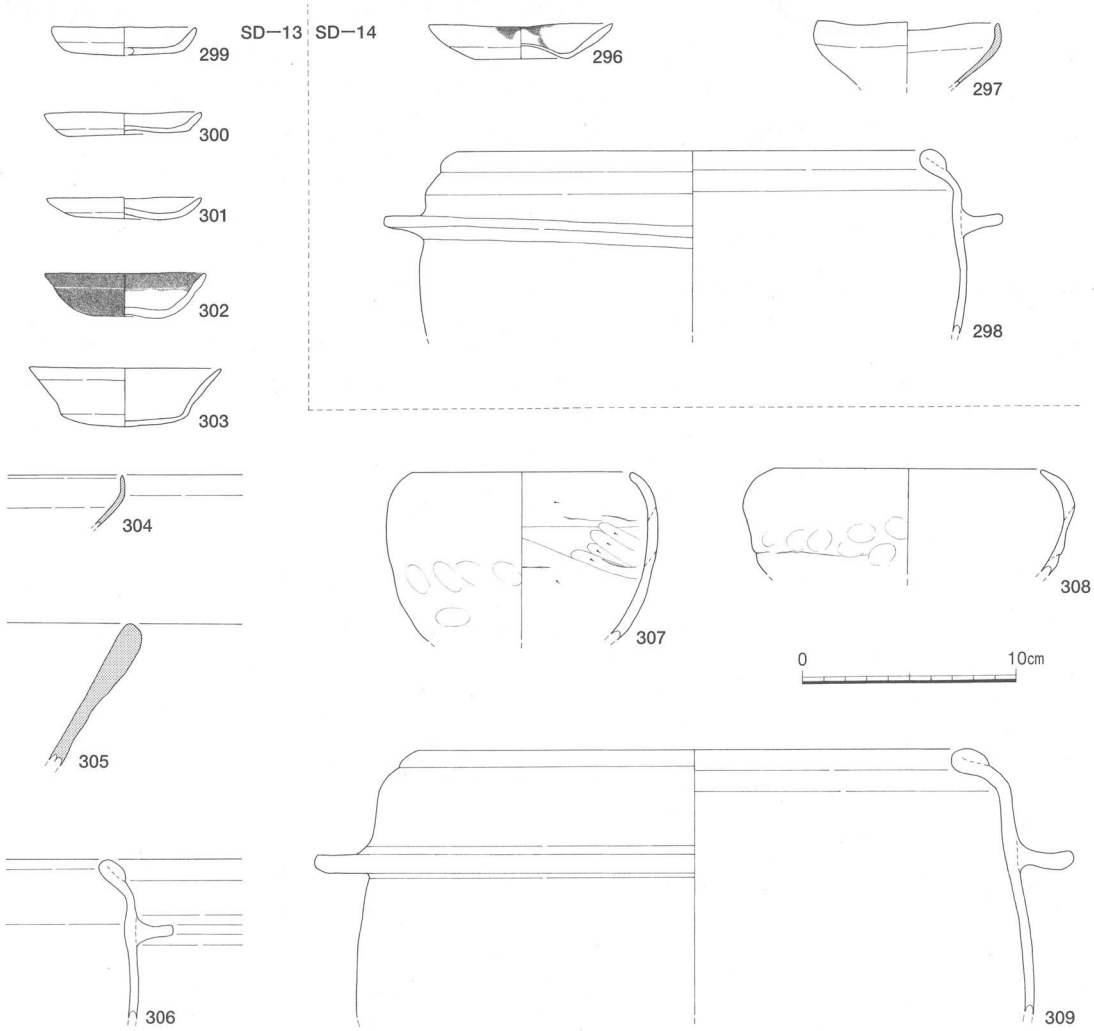


図47　SD-13およびSD-14 出土遺物実測図（S:1/3）

(13) SD-13出土遺物（図47）

299～303は土師皿である。299～301は直径6.5～7.5㎝、底部に広い平坦面をもち、器高が低い。色調は淡黄褐色である。302は底部内面を除き煤が厚く付着する。303は復元口径が9.0㎝に対し、器高は2.8㎝と高い。淡赤橙色を呈する。

304は瓦器椀の口縁で、端部にはわずかに沈線が入る。川越編年Ⅳ－C型式。305は瓦質土器摺鉢。佐藤編年A期。306は大和H_1型の土釜である。298に比して口縁の内折はゆるやかである。307、308は土師質の鉢と考えられる。口縁はヨコナデ、体部は成形時の接合痕及びナデの痕跡が明瞭に残る。308は口縁の内彎が強い。309は大和H_1型土釜。復元口径22.2㎝を測る。口縁は298同様強く内折し、鍔はやや下方に付き、幅が広く跳ね上がりぎみになる。色調は淡黄褐色。

上記した遺物の所属時期は、すべて14世紀後葉と考えられる。

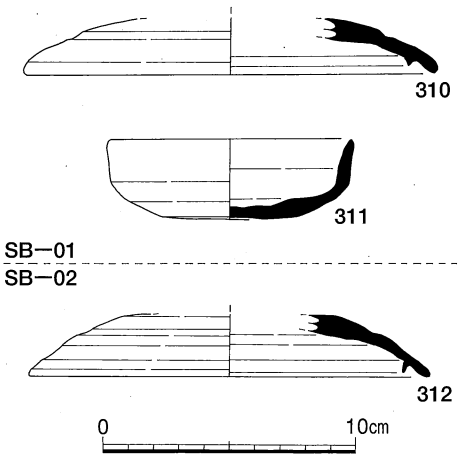


図48　SB-01およびSB-02 出土遺物実測図（S:1/3）

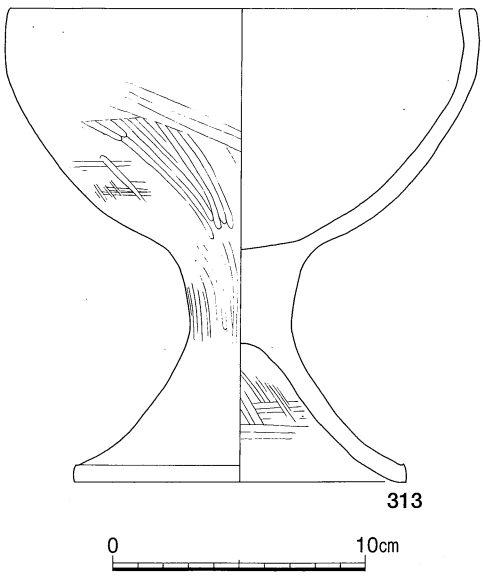


図49　SD-17 出土遺物実測図（S:1/3）

2．古代の土器および弥生土器

（1）SB-01出土遺物（図49上）

本遺構の出土遺物は破片が多く、ここでは時期の判明するもののみ図化した。310は須恵器坏Bの蓋である。復元口径16.2㎝を測る。311は須恵器坏Gである。復元口径9.6㎝を測る。いずれも飛鳥Ⅳ型式に属するもので、7世紀第4四半期に位置付けられる（古代の土器研究会編1992）。

（2）SB-02出土遺物（図49中）

312は須恵器坏Gの蓋である。復元口径は14.2㎝である。飛鳥Ⅲ型式に属するもので、7世紀第3四半期に位置付けられる。

（3）SD-17出土遺物（図49下）

313は弥生土器高坏である。口径18.6㎝、器高18.7㎝、裾径13.1㎝を測る。色調は赤褐色を呈する。外面は丁寧なミガキ、脚内面はハケメを施す。弥生時代後期に属する。

3．その他の遺物

（1）瓦（図50）

314～317はSD-02出土遺物、318は小字「堂ノ前」地区の古代盛土より出土したものである。

314は連珠文軒平瓦で珠文の周囲に圏線を有する。315は波状文軒平瓦である。316は左三巴文軒丸瓦である。珠文は18を数える。珠文帯の内外の圏線はない。317は

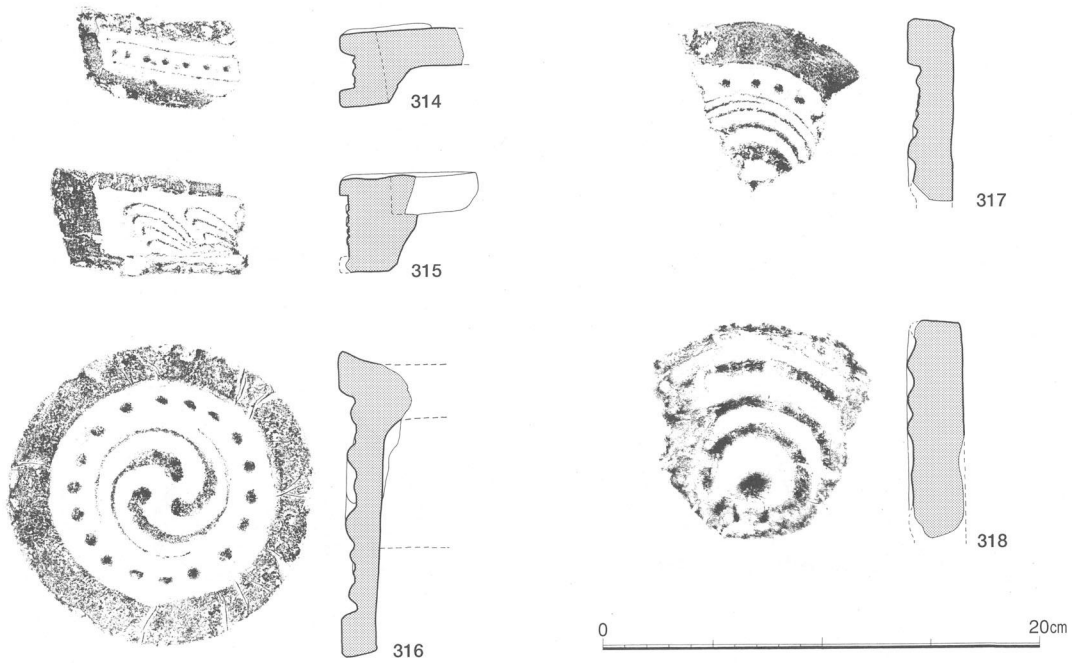


図50　軒瓦拓影および実測図（S:1/3）

右三巴文軒丸瓦で、珠文帯内側に圏線を有する。318は古代の重圏文軒丸瓦である。

（2）石製品（図51・52）

大半がSD-02およびSD-04から出土したもので、時期は1620年代である。

S-1～S-6は火打石である。石材はサヌカイト（S-1～4）、石英（S-5）、チャート（S-6）がある。外周および稜線上に火打金によると思われる鼓打痕がみとめられる。

S-7～S-9は砥石（下砥）である。S-7は高さ94.8㎜を測る。断面形状は四角形で、両面に擦痕がある。上部には直径1㎝弱の穿孔を有する。S-8は平面、断面ともに四角形で、両面に斜方向の擦痕がある。穿孔しようとした痕跡があるが、貫通していない。S-9は断面三角形で、平坦な面のみ擦痕がある。上部にはやはり直径1㎝弱の穿孔がある。

凹み石としたS-10は凹みに顕著な鼓打痕があり、一部には擦痕もみとめられる。用途は不明である。

S-11は砥石（置砥）である。2面に擦痕がある。粘板岩製。

S-12は五輪塔の空輪である。直径15.9㎝、高さ10.2㎝を測る。下部は浅く削り込みまれる。頂部は尖頭形をなさず平坦面を持つ。花崗岩製。

（3）土製品（図53）

以下に報告する土製品については、D-26を除くすべてがSD-02から出土したものである。D-1～D-26は土製円盤（円形加工土［陶］器片）である。直径が3㎝程度の小型品（D-1～12）、4㎝程度の中型品（D-13～20）、5㎝程度の大型品（D-21～26）の3種がある。材質は瓦質土器片（摺鉢片と考えられるもの）が大半を占めるが、D-15、16は土師質土器片（土釜か）、D-20、24は陶器片である。打ち欠き加工の後に研磨を施すものと、施さないものがある。

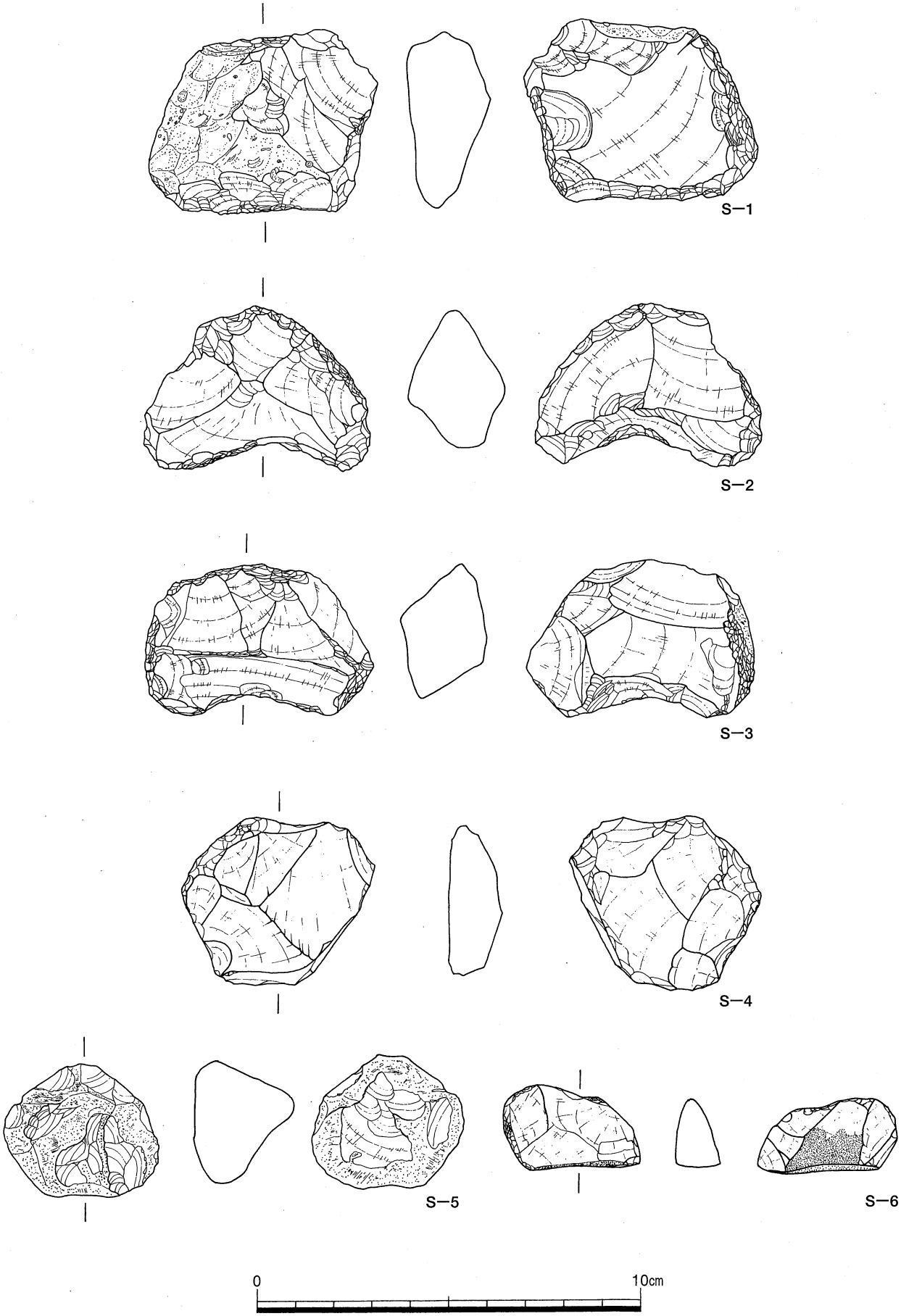


図51　火打石実測図

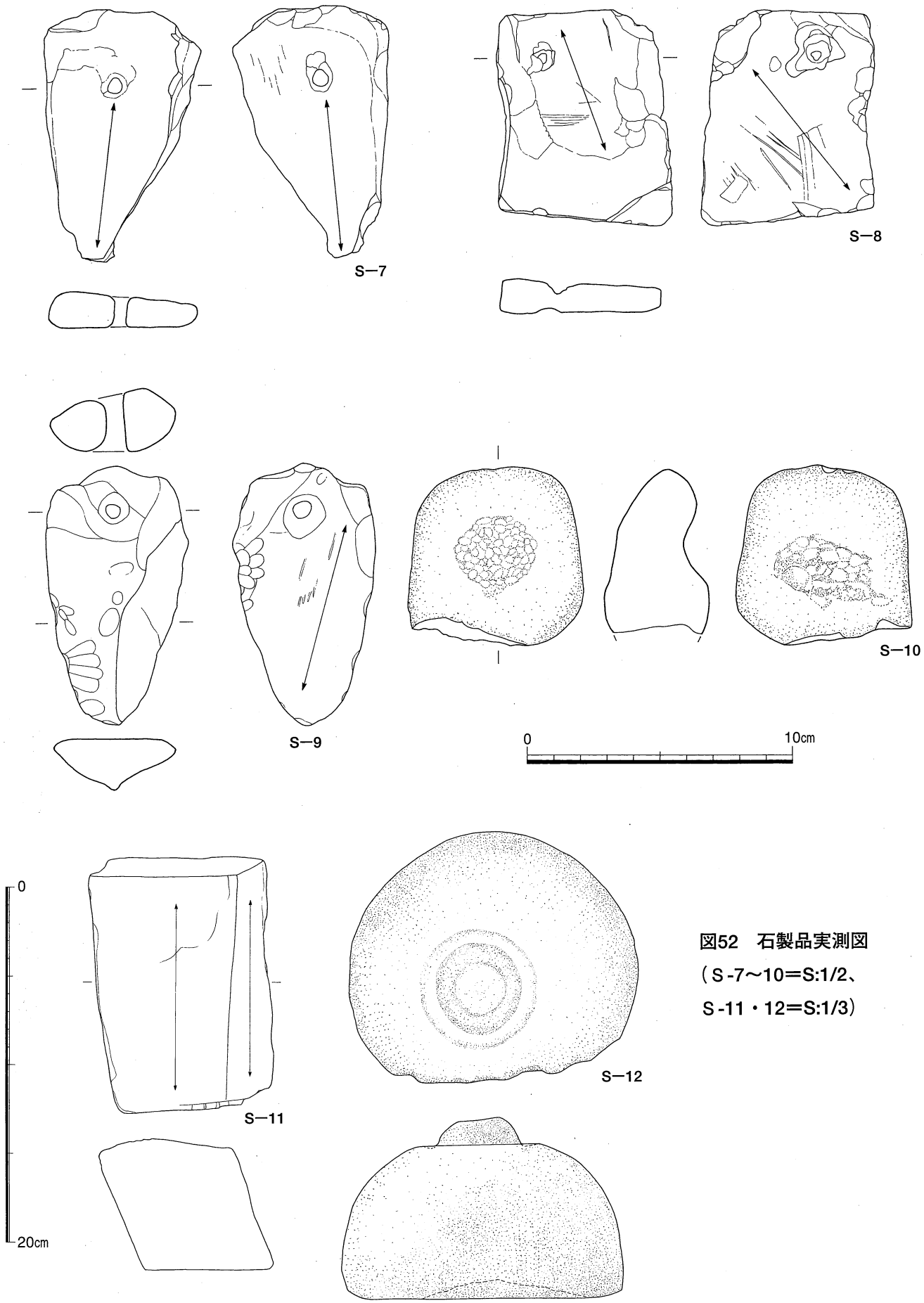


図52　石製品実測図
（S-7～10＝S:1/2、
S-11・12＝S:1/3）

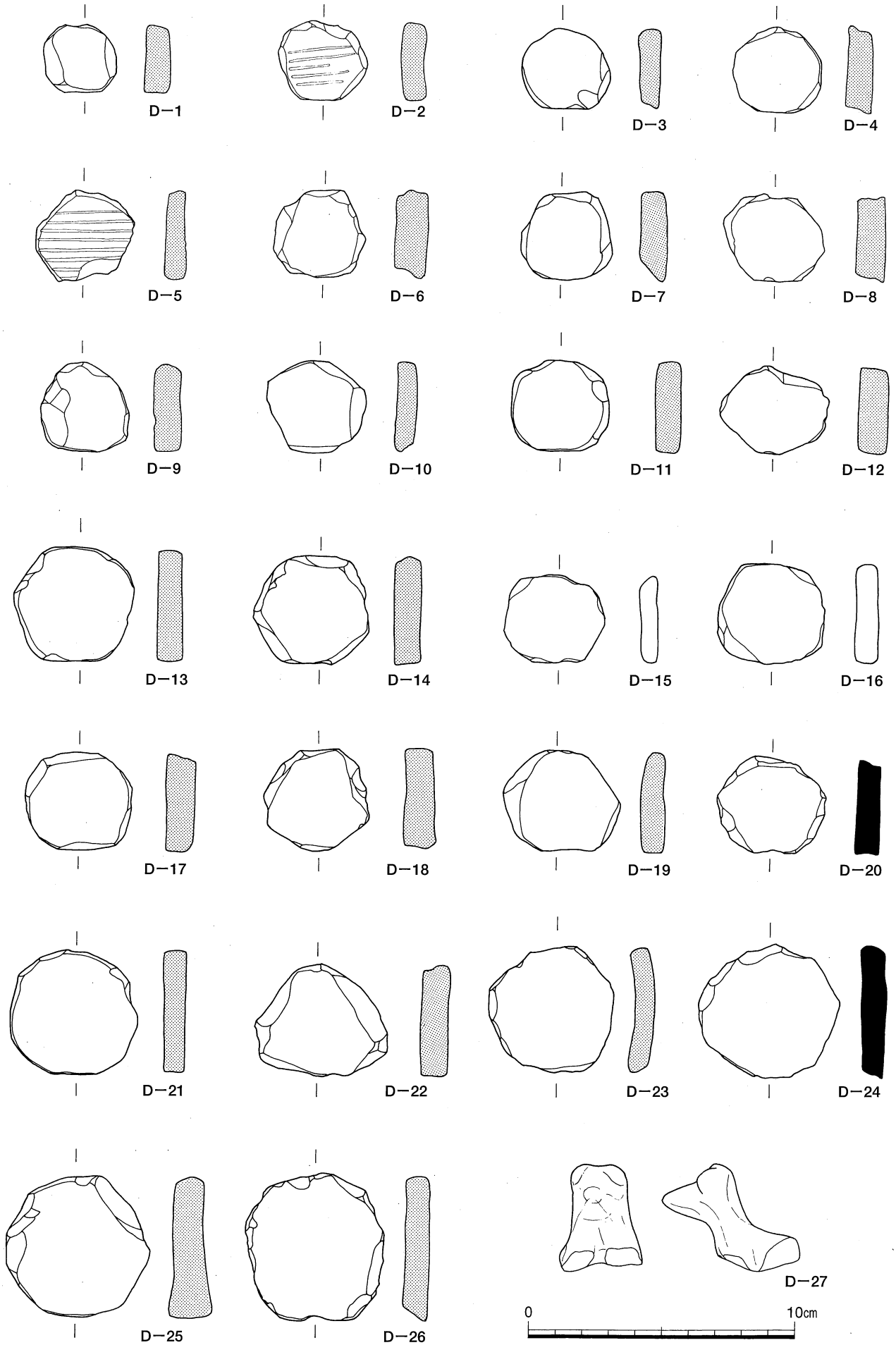


図53　SD-02出土土製品実測図（S:1/2）

D-27は犬形土製品である。耳は垂れており、目の表現はない。現存長5.1㎝を測ることから犬形土製品としては大型の部類に入ると考えられる。犬形土製品は戦国末から江戸初期にかけて出土例が知られ、遺構の時期を知るうえで貴重な資料といえる（今尾1992、嶋谷1991）。

【参考文献】

伊藤嘉章　1994「和物天目ー瀬戸・美濃窯における天目の展開ー」『特別展唐物天目ー福建省建窯出土天目と日本伝世の天目ー』（展示図録）福建省博物館・茶道資料館

今尾文昭　1992「大和国出土犬形土製品集成」『保津・宮古遺跡第６次発掘調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所

近江俊秀　1994「大和瓦質摺鉢考」『研究紀要第２集』由良大和古代文化研究協会

大平茂ほか　1992『下相野窯址』兵庫県教育委員会

川口宏海　1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

川越俊一　1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

古代の土器研究会編　1992『古代の土器１　都城の土器集成』

佐藤亜聖　1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ　日本中世土器研究会

嶋谷和彦　1991「織豊期の犬形土製品」『関西近世考古学研究』Ⅰ　関西近世考古学研究会

菅原正明　1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

中世土器研究会編　1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

中島和彦　1997「南都出土の土師器甕・羽釜の検討」『立命館大学考古学論集』Ⅰ　立命館大学考古学論集刊行会

2001「史跡大安寺旧境内の調査第85次・第86次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』奈良市教育委員会

2001「元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査第48次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』奈良市教育委員会

森下恵介・立石堅志　1987「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1986』奈良市教育委員会

藤澤良祐　1991「古瀬戸後期様式の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ　瀬戸市歴史民俗資料館

真壁忠彦・真壁葭子　1966～68・84「備前焼研究ノート１～５」『倉敷考古館研究集報』１・２・５・18　倉敷考古館

森毅　1997「城下町大坂における唐津焼出現期の様相」『陶説』532

V 考　察

馬司遺跡SD-02出土土器・陶磁器の年代的位置付け
ー奈良町近郊遺跡出土資料との対比を中心にー

岡　本　智　子

はじめに

今回の調査ではSD-02から、多量の唐津焼および土釜・瓦質土器・土師皿等の在地土器が出土した。本遺構の１層は近世の耕土層であるが、２・３層については良好な一括資料と考えられる（注１）。奈良県下では、17世紀初頭の資料として奈良奉行所跡の濠のものが知られているが（坪之内1989・1992）、近年確立しつつある中世末～近世初頭の編年に対応し得るような年代的位置付けが行われていない。ここでは、現段階で中世末～近世初頭の編年が最も確立していると考えられる大坂城下町の資料からSD-02資料の年代的な位置付けを行い、次に奈良町近郊における16世紀中葉から17世紀前葉の土器・陶磁器の様相を探ってみたい。

１．分類

（１）唐津焼の分類（図54）

SD-02資料では、中国製陶磁器や織部・志野などの茶陶と考えられる遺物が極めて少ないため、編年の指標としては唐津焼を用いるのが妥当である。そこで、唐津焼を以下のように分類する。

《碗》

Ａ類ー底部から内彎ぎみにたちあがるもの

Ｂ$_1$類ー口縁がゆるやかに外反するもの

Ｂ$_2$類ー胴部が強く張り、口縁がゆるやかに外反するもの

Ｃ類ーいわゆる天目形になるもの

Ｄ類ー体部が強く張り、口縁が端反になるもの（注２）

《皿》

Ａ$_1$類ー底部から内彎ぎみにたちあがり、口縁端部をまるくおさめるもの

Ａ$_2$類ー底部から内彎ぎみにたちあがり、外面端部がやや肥厚するもの

Ｂ類ー体部にケズリを施し、内面に段を有するもの

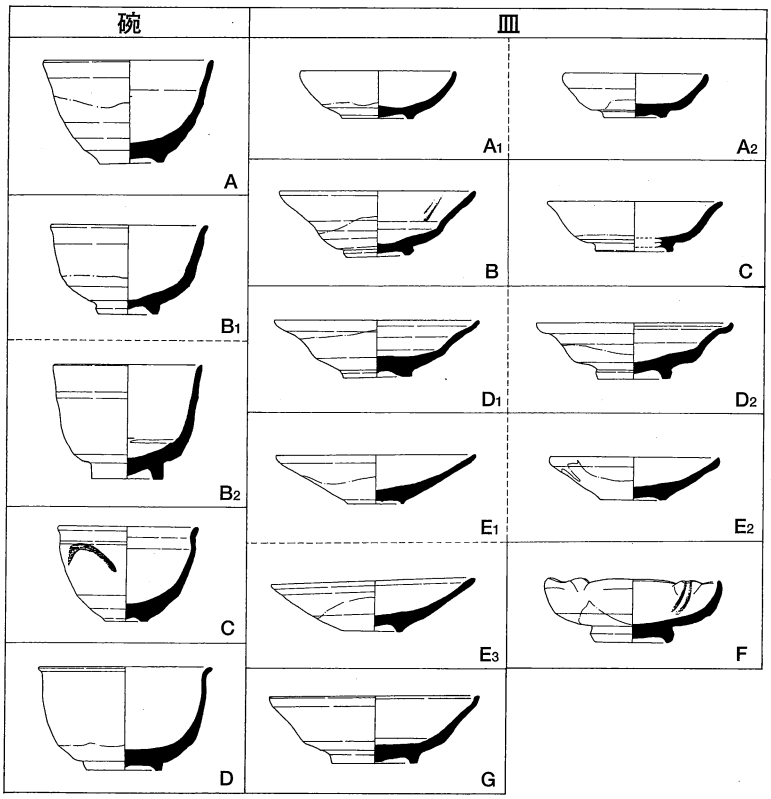


図54　唐津焼の分類（S:1/5）

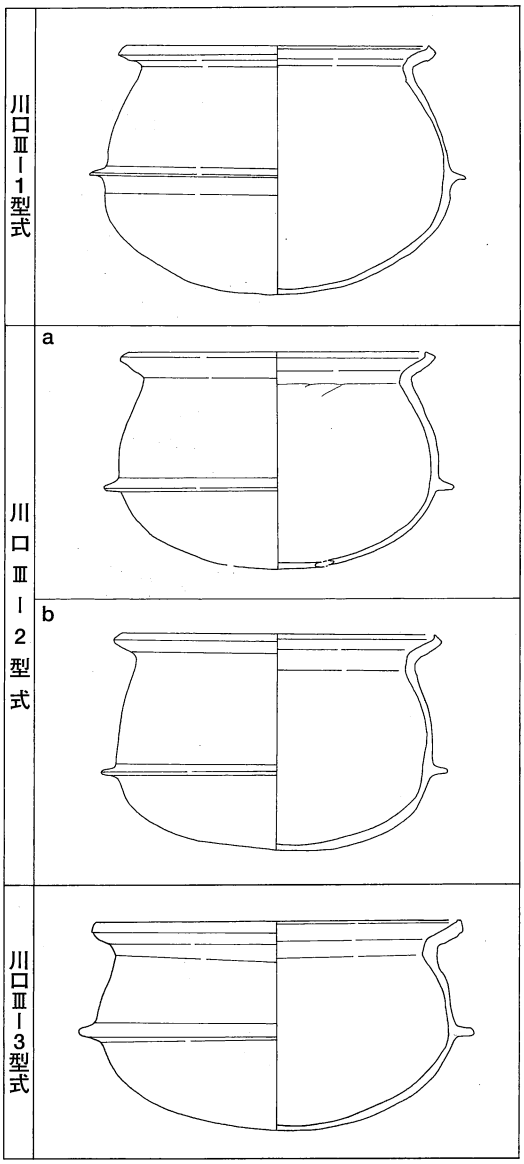


図55　本稿で用いる大和Ⅰ$_2$型土釜の分類（S:1/5）

C類－口縁が外反するもの

D$_1$類－体部内面に段を有し、口縁に強くナデを施すもの

D$_2$類－体部内面に段を有し、口縁を強くナデ、口縁端部をつまみ上げるもの（いわゆる溝縁Ⅲ）

E$_1$類－底部から直線的にたちあがり、口縁端部をまるくおさめるもの

E$_2$類－底部から直線的にたちあがり、口縁端部外面が肥厚するもの

E$_3$類－底部から直線的にたちあがり、口縁直下をナデ、口縁端部内面が肥厚するもの

F類－形態的に装飾性の強いもの（いわゆる向付）

G類－口縁が直線的に立ち上がり、口縁端部を内側に屈曲させるもの

（2）大和Ⅰ$_2$型土釜について（図55）

大和Ⅰ$_2$型の土釜については川口宏海氏により編年案が提示されている（川口1990）。氏は、「口縁部径が大きく、体部が大きく張る」ものをⅢ－1型式、「口縁部はより強く外反し、鍔部は中位からやや下位に」下がり、「体部最大径は、鍔部と一致する」ものをⅢ－2型式とした。さらに、それに続くⅢ－3型式は「口径に対して器高が低く、厚手のもの」としている。

本調査で出土したSD-02資料に含まれる土釜は、おおむね川口氏のⅢ－2型式の範疇に含まれると考えるが、この中でも若干の形態上の差異が見られた。本稿ではこれを主に口径と鍔径の比率からa類とb類に分類した（注3）。

a類－胴部には張りを残しつつ、鍔はやや下方に下がる。口径：鍔径の比率は1：1.2前後となる。

b類－a類に対して胴部の張りは弱く、鍔は下位に位置する。口縁はやや斜め上方に向かって開く。口径：鍔径の比率はおおむね1：1.1となる。

なお、この差異を時期差とすることについては、後述するように、遺物の消長からこれを捉えることはかなわなかった。型式学的に見て、①口径と鍔径の比率が小さくなっていくこと、②口縁部のつくりが鈍くなること等の理由から、b類を次のⅢ－3型式に続くものと考えたいが、現時点においては型式として独立させることは難しい。

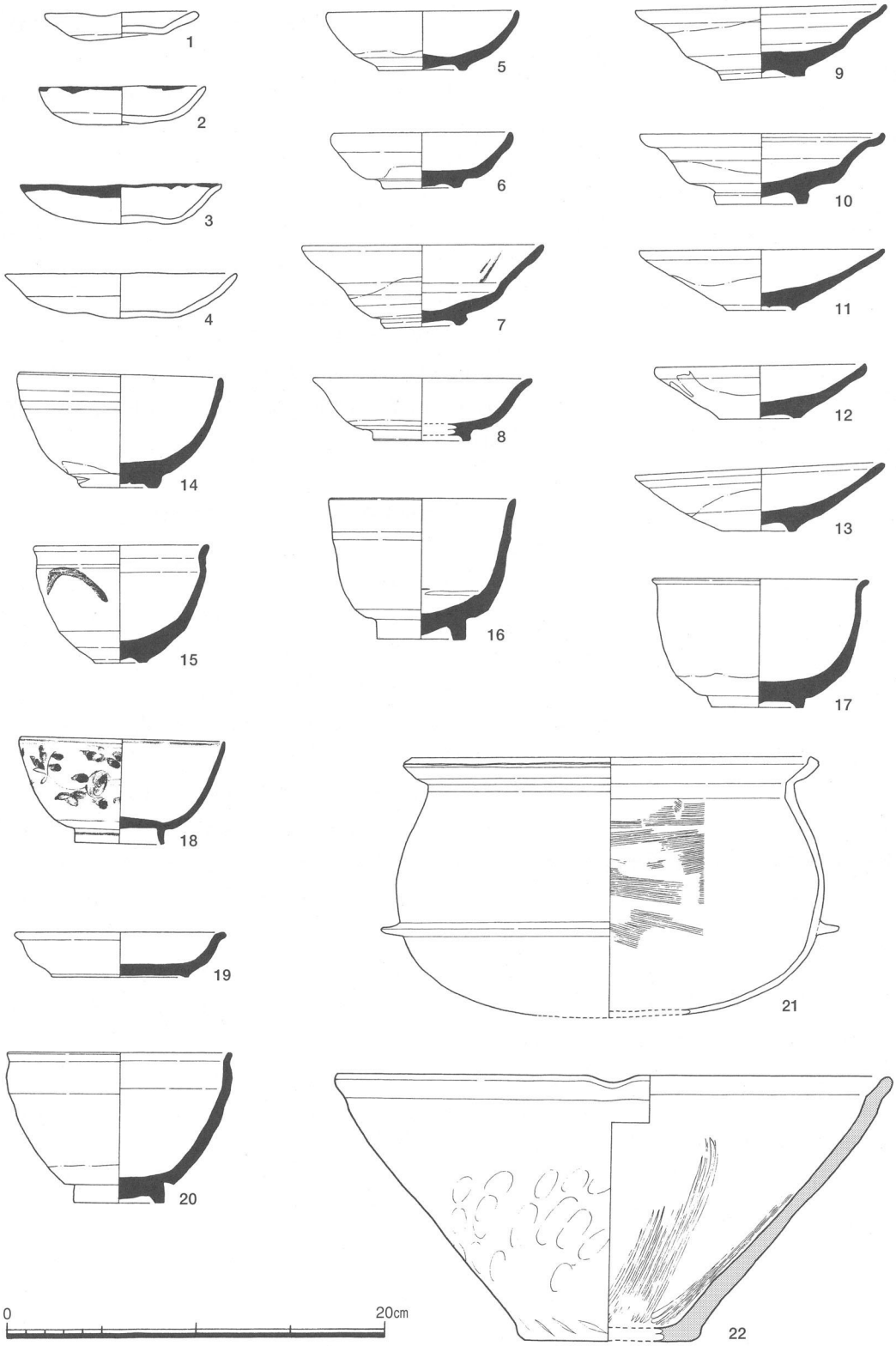


図56　馬司遺跡SD-02出土遺物実測図（S:1/3）

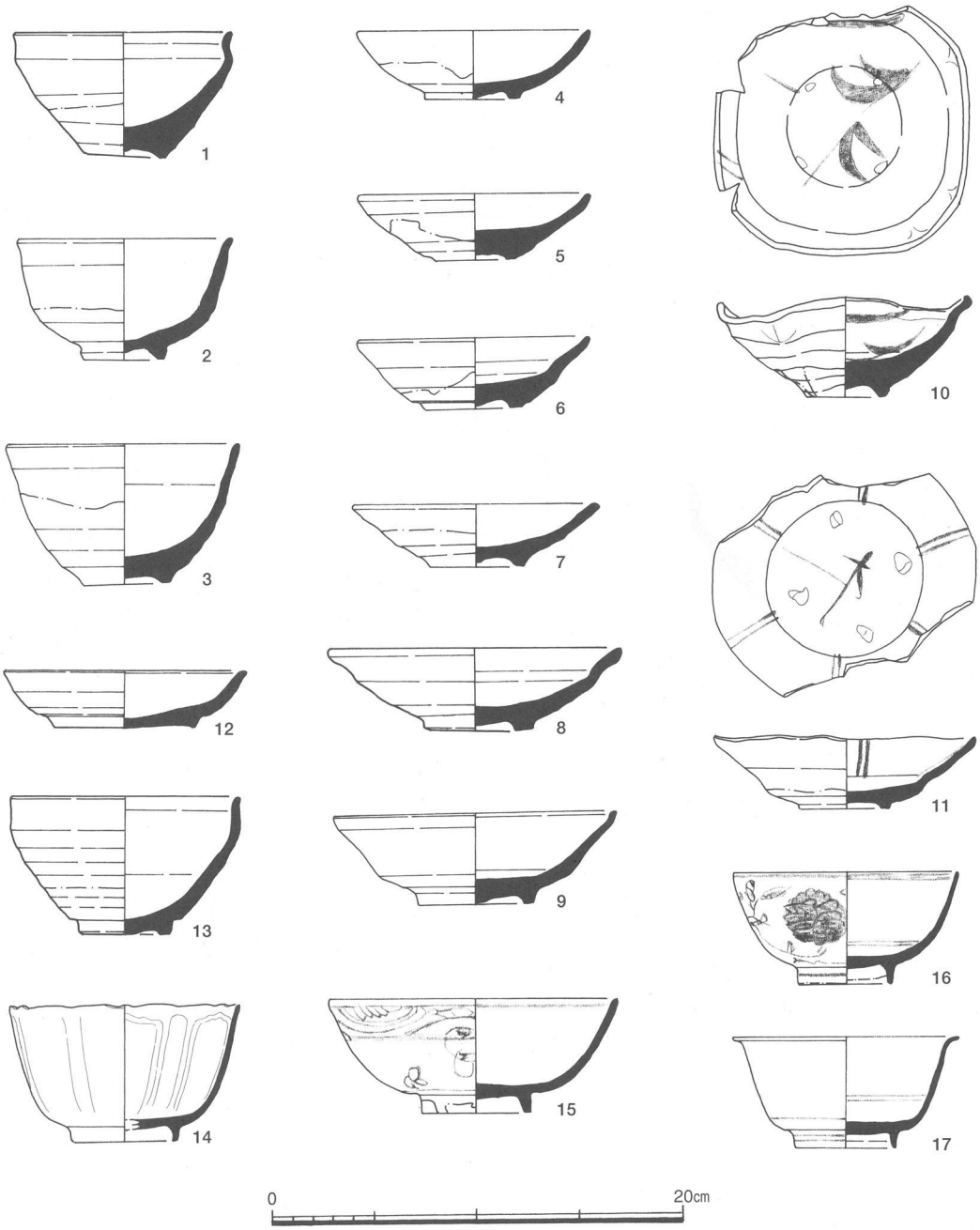


図57　AZ87-5　SX-201出土遺物実測図（S:1/3）（森1994より再トレース）

2．SD-02資料の年代的な位置付け

（1）SD-02資料の組成（図56）

まず、SD-02資料の組成を唐津焼を中心に概観する。

碗は口縁が内彎するA類（14）、およびゆるやかに外反するB類（15）が主体をなし、C（16）、D類（17）が若干混じる。B類は胴部が強く張り、器高が高いB_2類が含まれている。これは断面、釉薬ともに灰白色を呈し硬質な感があり、やや新しい要素と考えられる。皿は内彎するA類（5、6）、

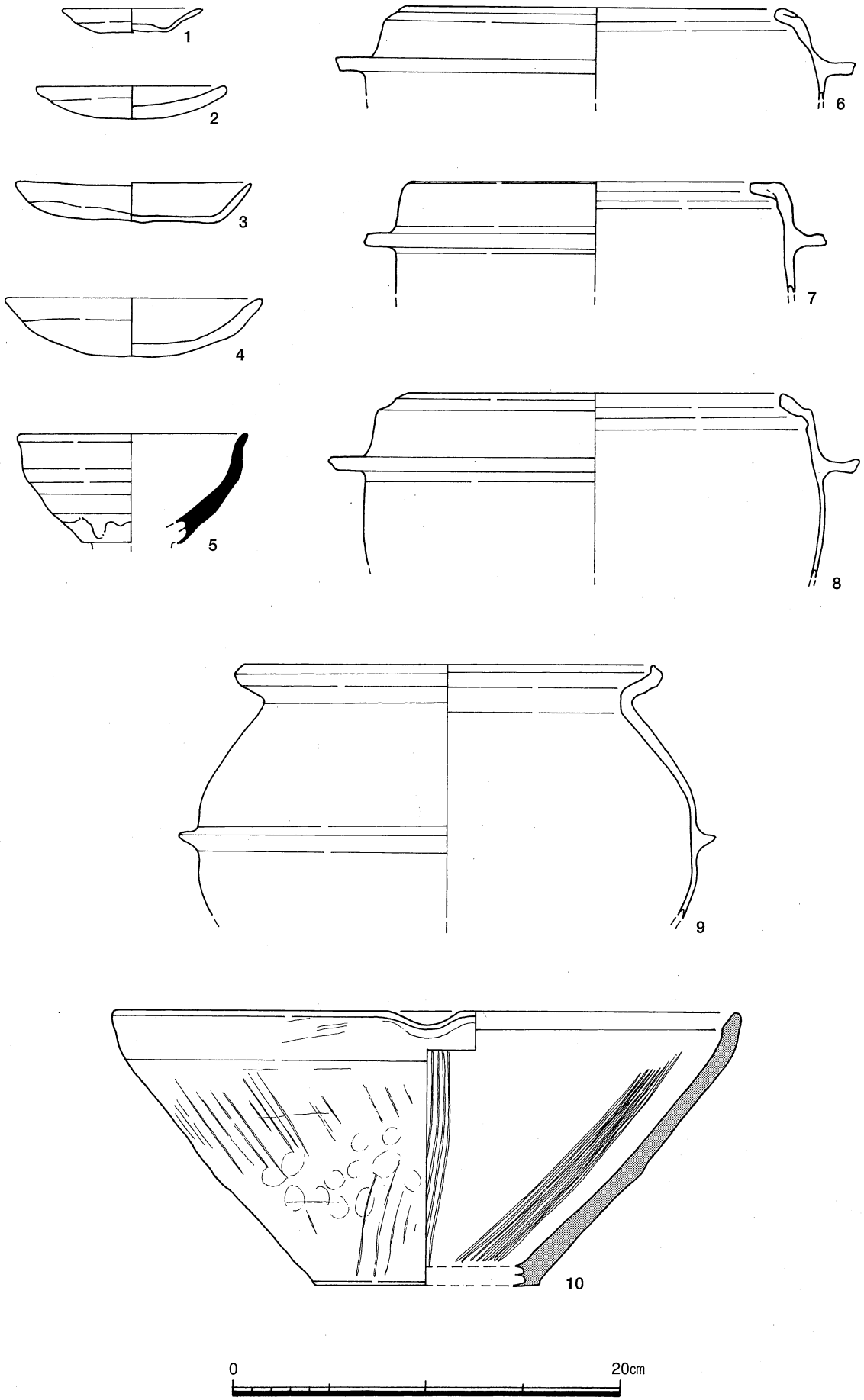


図58　金剛寺遺跡SD-52出土遺物実測図（S:1/3）（藤田1988より再トレース）

腰が張るＢ類（17）、底部から直線的に開くＥ類（11～13）が主体をなす。さらに、新しい様相として初期の溝縁皿と考えられるＤ類（10）が含まれる。これは器壁が厚く、口縁の溝は幅が広く浅いもので、器壁が薄く、口縁に深い溝が巡る典型的な溝縁皿は含まない。

瀬戸・美濃焼は、伊藤編年（伊藤1994）連房Ⅰ期の天目碗（20）に志野（19）、織部を極少量含む。また、櫛描き摺目をもつ丹波焼摺鉢（大平編年Ⅰ型式）が入る（大平1992）。

土釜（21）は、口縁が強く外反し、胴部最大径付近に鍔が付く。川口編年のⅢ－２型式に属するもので、SD-02資料中にはａ類、ｂ類ともに含まれる。

瓦質土器摺鉢（22）は、口縁端部を１～２㎝程度外反させるもので、体部外面には斜方向のタタキ痕が明瞭に残る。なお、口縁の外反がゆるく、直線的になるものもある。

（２）大坂城下町AZ87-5　SX201資料の検討（図57）（注４）

大坂城下町では、森毅氏を中心に唐津焼および中国製陶磁器の組成から、詳細な編年が提示されている。大坂城下町AZ87-5は元和８年（1622）まで船場に存在したとされる魚市場の調査で、SX201資料は元和６、７年銘木簡が共伴した一括資料であり、1615年の大阪夏の陣焼土層を下限とする「豊臣後期」（上限は1598年）に後続するものとされている（森1994）。なお、大坂城下町編年上、氏はこれを「徳川初期１」と位置付けている（森1997ｂ）。

唐津焼碗はＡ類（３）、B_1類（２）を主体となし、B_2類は含まない。唐津焼皿はA_1類（４）、A_2類（５）、Ｂ類（６、11）、E_2類（７）、Ｆ類（10）、Ｇ類（９）があり、森氏はこれに先行する1615年以前の遺物には含まれないものとして、「底部から口縁に向かって直線的にのびる丸皿」（本稿のＧ類）、「目跡が口縁部に直交するように配置される皿」などをあげている（森1997ａ）。

瀬戸・美濃焼では、伊藤編年連房Ⅰ期の天目碗のほか、黄瀬戸、志野、織部と多様である。中国製陶磁器（16）は小野分類（小野1982）Ｆ群が多数を占める。

（３）SD-02資料の時期

以上のように、陶磁器の組成からみると、大坂城下町AZ87-5 SX201資料とSD-02資料は非常によく似た様相を示す。ただし、前者には唐津焼の碗B_2類、皿Ｄ類は含んでいないことから、SD-02資料が若干新しい様相をもつものと判断できる。ところで、SD-02資料には伊万里焼は１点も共伴していない。伊万里焼の出現年代を確実におさえうる資料は未だ提示されていないが、森氏によれば、1630年代には出現するとされている（森1997ｂ）。以上のことから、SD-02資料は1620年代、下っても1630年代前半には収まるものとすることができる。なお、1620年代に比定できる大和の資料としては、平城京左京四条六坊十四坪SE-16があげられる（立石・中島2001）。

３．奈良町近郊における16世紀中葉から17世紀前葉の土器・陶磁器

前章でSD-02資料の年代観について述べ、これを1620年代の一括資料として位置付けた。次に、在地土器の消長と組成の変化を確認するため、16世紀中葉から17世紀前葉における奈良町近郊の土器・陶磁器の様相を概観してみたい。

（１）各遺跡出土の土器・陶磁器

田原本町金剛寺遺跡SD-52出土遺物（図58）（藤田ほか1988）

金剛寺遺跡では幅８ｍ前後の区画溝が検出されている。これは文献（『続南行雑録』）上に記載され

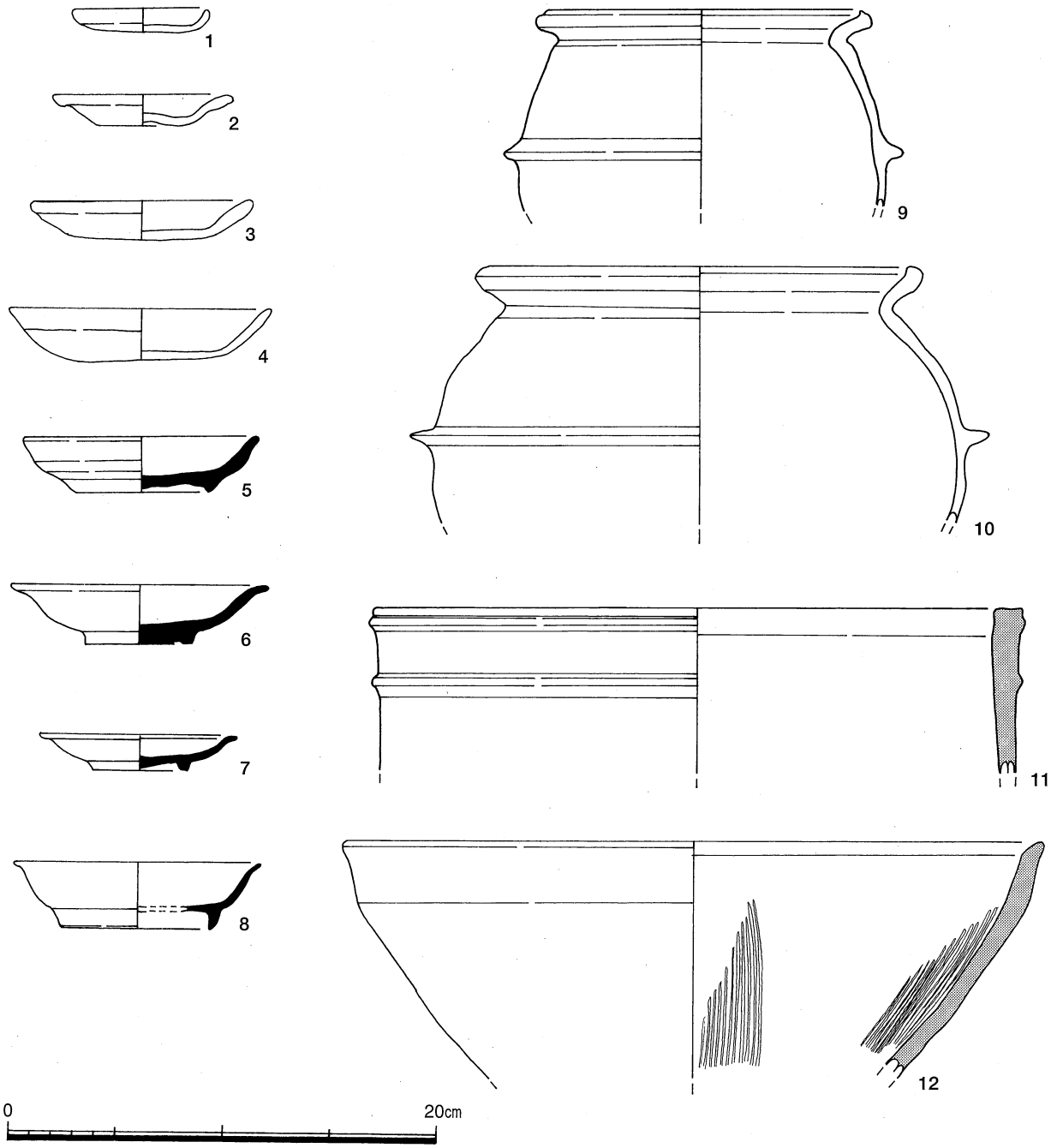


図59　新薬師寺旧境内第14次（奈良町高畑遺跡）SK-07出土遺物実測図（S:1/3）(篠原・立石1988より再トレース)

る永禄２年（1559）の「金剛寺城」の破却に伴うものとされている。

土釜は菅原分類（菅原1983）大和H_1型（６）、H_2型（７）、H_3型（８）のそれぞれを含み、大和I_2型（９）は川口編年Ⅲ－１型式に属するものである。瓦質土器摺鉢（10）はやや内彎する体部をもち、外面にはハケメ痕が残る。口縁端部の伸びはSD-02資料に比して短く、口縁の外反も弱い。瀬戸・美濃焼天目茶碗（５）は口縁部が直立し、端部は端反りになる。伊藤編年大窯前Ⅱ期に属するものである。

なお、遺物中には16世紀前葉に比定されている川口編年Ⅱ－１型式の土釜が含まれているが、これは溝機能時の遺物と考えられる。大半の遺物は16世紀中葉の溝埋没時に比定し得る。

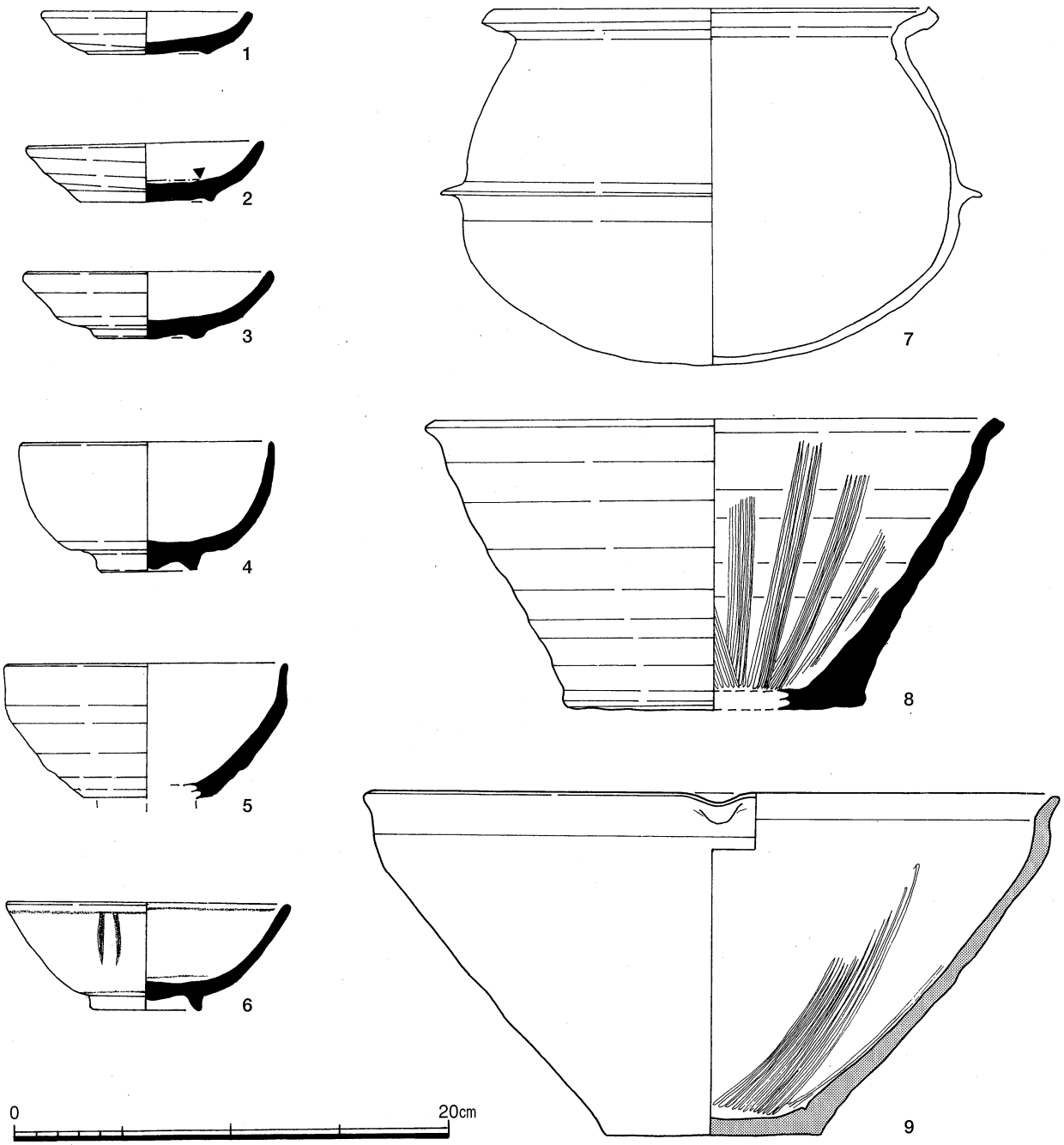


図60　奈良町北室町遺跡（64BBG48次）SE-16出土遺物実測図（S:1/3）（中島2001より再トレース）

新薬師寺旧境内第14次SK-07（図59）（篠原・立石1988）

瀬戸・美濃焼灰釉皿（５、６）は内彎するものと外反するものがある。陶磁器は中国製陶磁器の出土量が少ないが、大坂城下町の石山本願寺期（～1580）の組成に近似する。土釜（９、10）は大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－１型式のものがある。なお、この一括資料中には大和Ｈ型は含まれない。全体の遺物出土量が少ないため、これと同時期の他の資料にＨ型が含まれないとはいいきれないが、いずれにせよ16世紀中にはこの系譜は途絶える。瓦質土器摺鉢（12）は佐藤編年Ｅ期にあたるものであろう。

これらの遺物は16世紀中葉から後葉に位置付けられ、金剛寺遺跡SD-52資料に後続する資料と考えられる。

奈良町北室町遺跡（64BBG 48次）SE-16出土遺物（図60）（中島2001）

元興寺食堂推定地の西側で行われた奈良町内における町屋の調査である。SE-16資料は掘形直径約

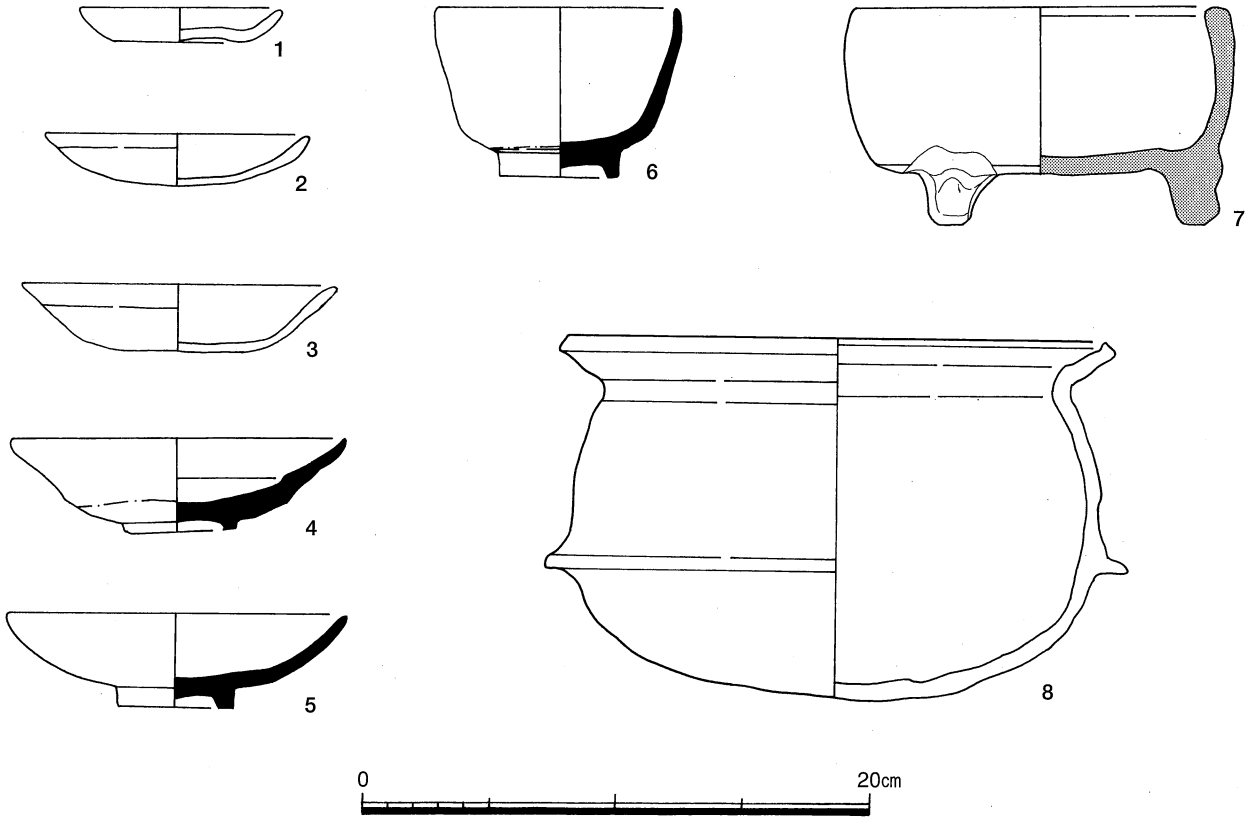


図61　奈良町北室町遺跡SX-05出土遺物実測図（S:1/3）（立石・森下1986より再トレース）

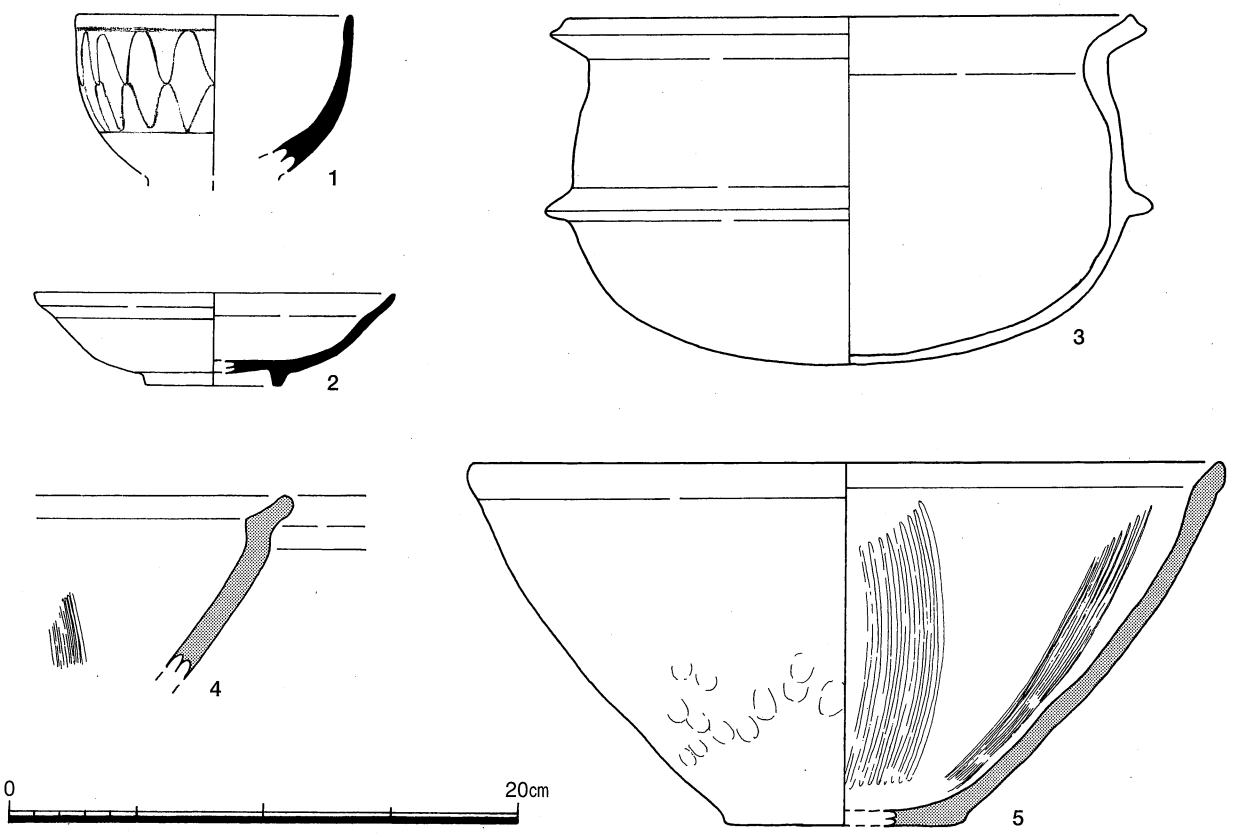


図62　郡山城下町旧奥野家SX-04出土遺物実測図（S:1/3）（山川1999より再トレース）

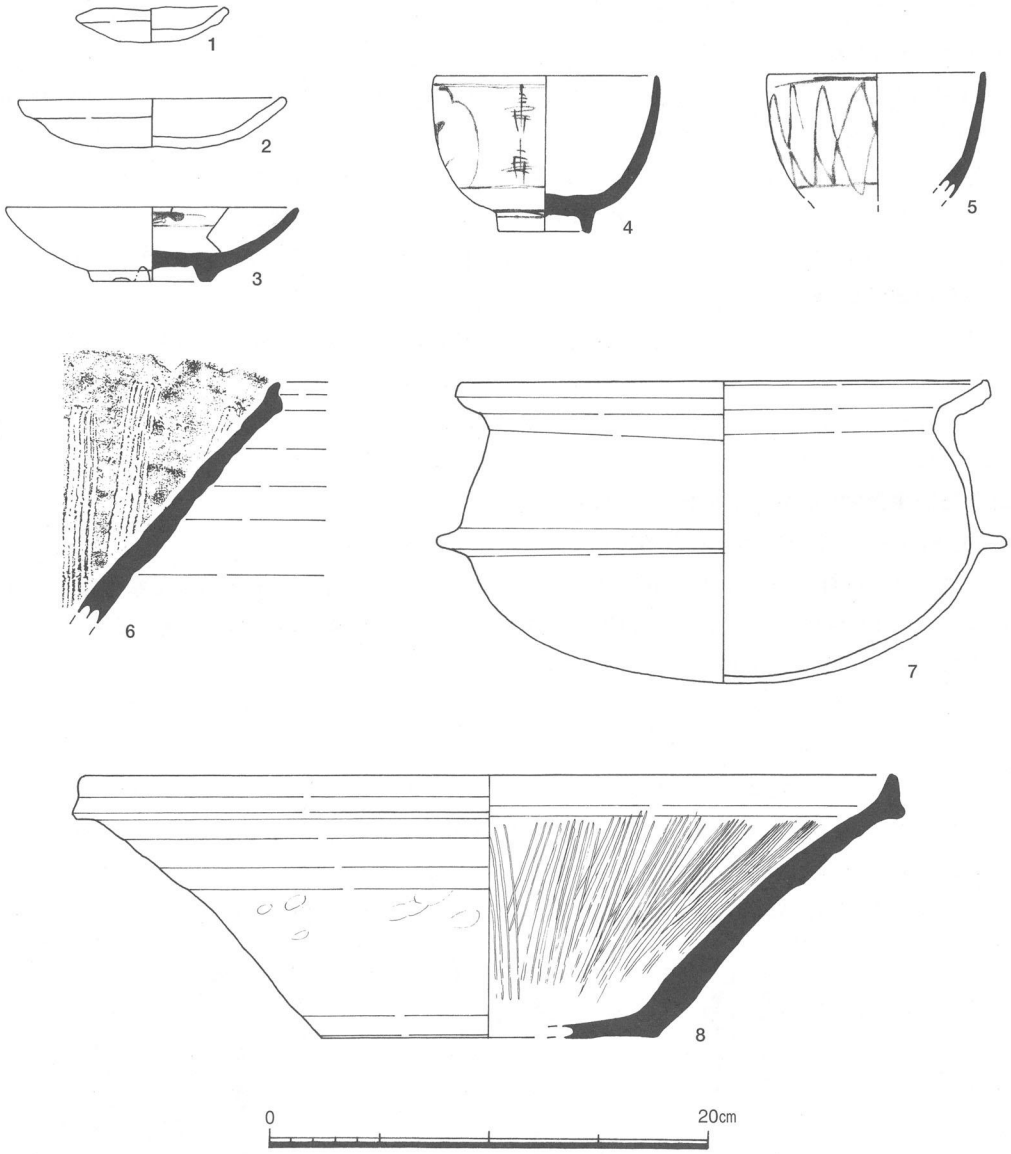


図63　郡山城下町旧奥野家SX-01出土遺物実測図（S:1/3）（山川1999より再トレース）

１ｍ、深さ約3.2ｍを測る井戸から鞴羽口、鉄滓等とともに出土した。

瀬戸・美濃焼碗は灰釉丸碗（１）、内禿皿（２）を含む。天目碗（５）は口縁部が直立し、伊藤編年大窯後Ⅱ期に属する。青花碗（６）は小野Ｃ群の粗製と考えられる。土釜は大和Ｉ$_2$型Ⅲ－１型式に属するものである。瓦質摺鉢（９）は口縁のヨコナデされた部分の直下が強く張るものである。馬司遺跡SX-07出土資料（図40-228）と同形態のものと考えられるが、後者には体部外面にハケメが明瞭に残る。今井寺内町遺跡（竹田2000）の天正年間に埋没したとされる濠出土遺物や、天正元年（1573）銘の墓石を共伴した大和郡山市古屋敷遺跡濠下層出土遺物（関川1991）にもこのタイプがあり、16世紀後葉から末の年代観が与えられる。

陶磁器の組成から考えると、おおむね大坂城下町編年の豊臣前期（1580～1598）に比定できるものと考えられるが、大坂城下町ではこの段階に唐津焼はほとんど含まれないとされているのに対し、唐

津焼（3、4）を含んでいるのが特徴である。16世紀末から17世紀初頭の遺物群と考えられる。

奈良町北室町遺跡SX-05（図61）（篠原1983、立石・森下1986）

元興寺旧境内食堂跡の調査で、先述の北室町遺跡（64BBG48次）の隣接地にあたる。本資料は1辺約0.6mの方形土坑から出土した。

唐津焼はⅢA類（5）、B類（4）の外、馬司遺跡SD-02で先に新しい要素とした碗B_2類（6）を含む。土釜（8）はⅢ－2型式のb類である。その他、未報告ではあるが初期伊万里も出土しており（注5）、1630年代頃の遺物群と考えられる。Ⅲ－2型式の土釜と伊万里焼の共伴例として評価できる資料である。

郡山城下町旧奥野家SX-04（図62）（山川1999）

郡山城下町における紺屋跡の調査で、藍甕埋置の基礎と考えられる部分から出土した資料である。

伊万里焼は一重網目文碗（1）を含む。大和I_2型土釜は川口編年Ⅲ－3型式にあたるもので、器高は13～14cmと低く、器壁は厚い。瓦質摺鉢は摺目が粗く、口縁は外反する。

17世紀中葉の遺物群であろう。

郡山城下町旧奥野家SX-01（図63）（山川1999）

直径約2.8mの廃棄土坑と考えられる遺構から出土した資料である。

前述の遺物群と同様、伊万里焼一重網目文碗（5）や大和I_2型Ⅲ－3型式の土釜を含むが、瓦質土器摺鉢はない。丹波焼摺鉢は口縁の断面形態が三角形である。大平編年のⅣ形式に属するものであろう。

本資料は、17世紀中葉の遺物群と考えられる。

（2）陶磁器の消長（図64）

陶磁器については、まとまった一括資料が少なく、奈良町近郊における特徴的な傾向を提示するには至っていない。ここでは在地土器の年代的位置付けを行うに際して、大坂城下町の編年を基に特徴的な遺物の消長を述べたい。

16世紀中葉の金剛寺遺跡SD-52では伊藤編年大窯前Ⅱ期にあたる瀬戸・美濃焼天目碗を含む。16世

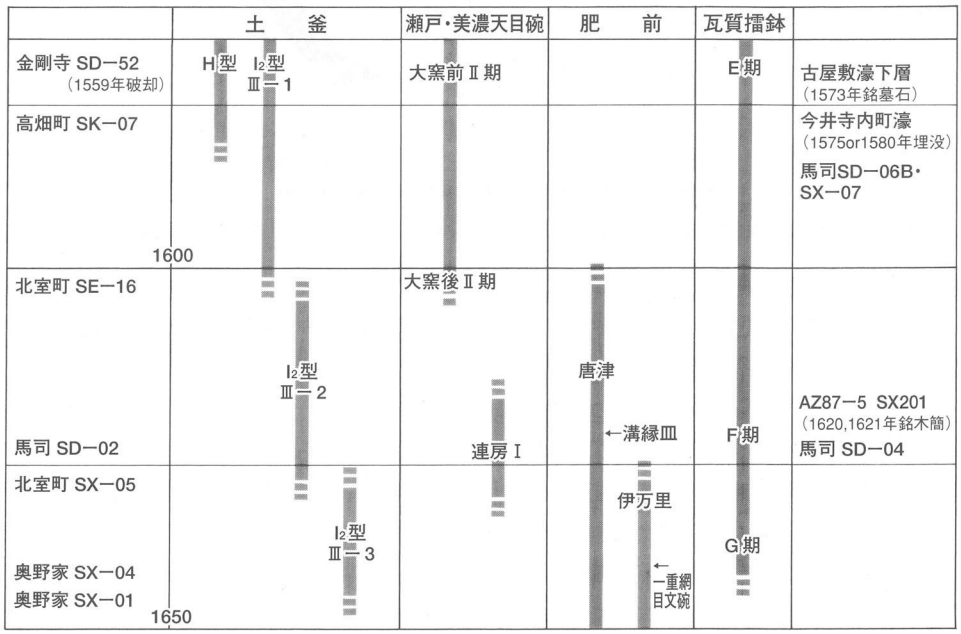


図64　時期別器種消長図

紀末から17世紀初頭の北室町遺跡SK-08に至って大窯後Ⅰ期のものが出現し、馬司遺跡SD-02では連房期のものに移行する。唐津焼は北室町遺跡SK-08には含まれているが、中国製陶磁器および瀬戸・美濃焼の組成をみると、この資料は大坂城下町の豊臣前期段階に近いものと考えられる。しかし、唐津焼を含んでいることからそれに若干後続する段階のものである可能性がある。いずれにせよ、この後の段階の一括資料中には唐津焼が確実に含まれる。馬司遺跡SD-02資料では先述したように溝縁皿の初期段階と考えられるもの（D_2類）があるが、伊万里焼が出現するのは北室町遺跡SX-05資料以降である。旧奥野家SX-04およびSX-01資料は一重網目文碗等の初期伊万里とされる一群を含んでいる。

（3）在地土器の年代的位置付け（図64）

土釜

1559年を下限とする金剛寺遺跡SD-52出土遺物では、大和H型および大和I_2型Ⅲ－1型式の土釜を含む。大和H型は16世紀後葉のうちにはその系譜が途絶える。I_2型は16世紀末～17世紀初頭と考えられる北室町遺跡SE-16出土遺物の段階では依然Ⅲ－1型式であるが、馬司遺跡SD-02資料の段階ではⅢ－2型式のみの組成となることから、17世紀初頭のうちにⅢ－1型式からⅢ－2型式への転換が起こるものと考えられる。Ⅲ－3型式の出現は初期伊万里にややおくれて17世紀中葉で、伊万里一重網目文碗と共伴する。なお、I_2型土釜は17世紀後半には消滅する。

瓦質土器（注6）

摺鉢は16世紀中葉の段階では体部がやや内彎ぎみになり、口縁端部の伸びは短い。外面にはハケメが残る。16世紀後葉には口縁のヨコナデ部分の直下が強く張り、口縁部を強く外反させるものがある。これにも依然外面にはハケメが明瞭に残る。これは先述したように今井寺内町遺跡や、古屋敷遺跡の天正年間の濠からの出土例がある。1620年代の馬司遺跡SD-02出土資料には口縁端部の伸びがやや長くなり、またそのなかには口縁があまり外反せず直線的になるものも存在する。郡山城下町旧奥野家のSX-04資料にはSD-02資料よりも摺目が粗く、より退化した傾向を示すものがある。これは先述したⅢ－3型式の土釜や、伊万里焼一重網目文碗を共伴するが、これが瓦質摺鉢の最終段階と考えられる。なお、郡山城下町旧奥野家SX-01資料は、同じくⅢ－3型式の土釜、伊万里焼一重網目文碗を含み、SX-04とほぼ同時期の資料と考えられるが、瓦質摺鉢は含まれていないことから、SX-04出土のものは、瓦質摺鉢の消滅にかなり近い段階と考えられる。

摺鉢以外の器種では、16世紀末から17世紀にかけて非常に多様な器種が出現するが、これも17世紀中葉には甕等の一定の器種に限定されるようになる。

おわりに

以上、SD-02資料の年代的位置付けを行い、16世紀中葉から17世紀前葉にかけての奈良町近郊の土器・陶磁器の様相を略述した。奈良町近郊では、これまでこの時期の良好な一括資料に恵まれず、暦年代がある程度判明する資料も、永禄年間の金剛寺遺跡SD-52資料、天正年間の古屋敷遺跡および今井寺内町の濠出土資料などに限られ、それより新しい段階のものは知られていなかった。すなわちSD-02出土資料は、大坂城下町とのクロスチェックによって1620年代という具体的な時期を提示できるという面で、極めて高く評価できるものといえよう。奈良奉行所跡の濠出土遺物について坪之内氏は織部・志野等の茶陶類、中国製陶磁器が少ないことを特徴としているが（坪之内1992）、これはSD-02資料にも共通している。今後の資料の増加により、奈良町独自の様相も明らかになることが期待される。

【注】

1　以下、SD-02の２・３層出土遺物を「SD-02資料」として記述する。

2　碗Ｄ類に関しては上野・高取系陶器の可能性も考えられるが、未確定のためここでは分類に加えた。

3　口径と鍔径の比率から指数を求める方法に関しては中島和彦氏（奈良市埋蔵文化財センター）のご教示を得た。

4　森毅氏（(財）大阪市文化財協会）のご厚意により資料実見の機会をいただいた。

5　中島和彦氏のご厚意により資料実見の機会をいただいた。

6　瓦質土器の年代観に関しては佐藤亜聖氏（(財）元興寺文化財研究所）のご教示を得た。

【引用・参考文献】

伊藤嘉章　1994「和物天目－瀬戸・美濃窯における天目の展開－」『特別展唐物天目－福建省建窯出土天目と日本伝世の天目－』（展示図録）福建省博物館・茶道資料館

大平茂ほか　1992『下相野窯址』兵庫県教育委員会

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』２　貿易陶磁研究会

川口宏海　1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会

佐藤亜聖　1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ　日本中世土器研究会

篠原豊一　1983「元興寺食堂跡推定地の調査」『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和57年度』奈良市教育委員会

篠原豊一・立石堅志　1989「新薬師寺旧境内の調査第２次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』奈良市教育委員会

菅原正明　1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

関川尚功　1991「古屋敷遺跡第２次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1990年度』奈良県立橿原考古学研究所

竹田正則　2000「今井寺内町の調査」『かしはらの歴史をさぐる７－平成10年度埋蔵文化財発掘調査成果展－』（展示図録）橿原市千塚資料館

立石堅志・中島和彦　2001「平城京左京四条六坊十四坪　奈良町遺跡の調査第424次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』奈良市教育委員会

立石堅志・森下恵介　1987「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要1986』奈良市教育委員会

坪之内徹　1989『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅳ』奈良女子大学

　　1992「奈良奉行所とその周辺の近世初頭の陶磁器」『東洋陶磁』19

中島和彦　2001「元興寺旧境内・奈良町遺跡の調査第48次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』奈良市教育委員会

藤田三郎　1988『金剛寺遺跡発掘調査概報』田原本町教育委員会

真壁忠彦・真壁葭子　1966～68・84「備前焼研究ノート１～５」『倉敷考古館研究集報』１・２・５・18　倉敷考古館

森毅　1992「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究第９』(財）大阪市文化財協会

　　1994「大坂出土の唐津焼の変遷」『第４回九州近世陶磁研究会資料』（発表レジュメ）

　　1995「十六・十七世紀における陶磁器の様相とその流通－大坂の資料を中心に」『ヒストリア』149

　　1997ａ「城下町大坂における唐津焼出現期の様相」『陶説』532

　　1997ｂ「大坂出土の十六・十七世紀の陶磁器－美濃陶器を中心に－」『東洋陶磁』26

山川均　1999『郡山城下町旧奥野家（紺屋跡）発掘調査報告書』大和郡山市教育委員会

Ⅵ章　まとめ

以下に、今回の調査で得られた知見、およびその評価の主たるものについて略記する。

まず中世の馬司集落については、13世紀後葉頃に原型が形成され、15世紀後葉に溝が大規模化するなど、集落構造の著しい改編が認められることが判明した。こうした集落構造の改編は、在地領主（武士）の権力増大と、それに伴う戦乱に備えるものであろう。これらの溝のうち最も規模の大きいSD-02は在地領主の館の周りを取り囲んでいたものと思われるが、それらは1620年代には埋め戻される。これは、この時期に在地（農村）に至るまで近世幕藩体制が浸透したことに伴い、武力の象徴ともいえる大溝が強制的に埋められた事実を物語るものだろう。また、ここから出土した多量の唐津焼のほとんどは、まだ使えるものを意図的に打ち欠いていたが、これなども従来の在地領主の富や権力を否定しようという、近世幕藩体制の在地に対する姿勢を示している。

また、このほか、条里地割に整合する遺構がSX-07の下部に掘られた細い溝のみであり、その他の中世の遺構がすべて非条里の方向性を有していたことが著しい特徴としてあげられる。本遺跡では、14世紀後葉～末頃にまとまった遺構が現れるが、字「堂ノ前」地区の盛土中には13世紀中葉の瓦器椀の破片を包含しており、この部分のみはやや古い時期に何らかの利用（後述）がなされていたようである。今回検出された遺構のうち、特に東半の溝群の方向性は明らかにこの字「堂ノ前」地区の方向性に規制されており、その傾向はこの集落が終焉を迎える1620年代まで変化することなく継続する。

以上のように、今回検出された集落の中核的存在である「堂ノ前」地区だが、その規模は、SD-01ａと同ｂの芯々距離が約40ｍで、南北は調査区外だが、現在の地形で判断すれば80ｍ程度と推定し得る。ただし、残念ながらⅢ章で述べたように今回の調査では耕作による削平などのため、盛土以外の顕著な遺構は確認することができなかった。しかし、その性格を考える上できわめて興味深い史料が存在する。鎌倉時代の高僧、叡尊（1201-90）の自伝『金剛仏子叡尊感身学正記』（以下『学正記』）仁治３年（1242）条がそれである。やや長くなるが、以下に引用する（読み下しは細川涼一氏による［細川1999］）。

> 正月、忍性また曰く、「馬司の乗栓、また七宿別供養の後、惣供養を遂ぐべきの願を発す。この願を成ぜんがために、父母親友に勧めて、四恩講を始む。開白のために下向すべし」と云々。かの願に随喜して、馬司に下向す。ちなみに、額安寺住学春（善春房）は、菩薩戒を受けんがために、かの家に勧請す。十八日をもって、かの持仏堂弥陀如来の御前において、廿五人に菩薩戒を授く。…（中略）…二月上旬、額安寺の前屋において、梵網経古迹を開講す。十二日、持仏堂において五十四人に菩薩戒を授く。当家の末子の童子（字は松石）、出家の志しあり、父母、これを許す。十三日、本寺に帰る。十六日夕方、松石童子来る。三月十日、舎弟源景親の息、曼殊童子とともに、同時にともに剃髪し、五戒を授く（松石は信空慈道房と名づく。曼殊は信玄常忍房）。…（以下略）

以上の記述のうち、まず「馬司の乗詮」という人物については、細川涼一氏は当時額安寺領の荘園であった馬司荘の荘官であったものか、としている（細川1999）。乗詮は忍性の非人宿ごとに文殊画像を安置するという救済事業に共鳴し、自らも１枚文殊画像を図絵して非人宿への安置を希望するほどの熱心な信者である（『学正記』仁治２年条）。当時、叡尊の外護者としてこのような在地の有力者がいたことは注目に値するが、その乗詮が居住していた場所が馬司であった。また、額安寺の学春という僧が叡尊を招いた場所であるが、それが馬司にあった乗詮に関係する場所であるのか、あるいは額安寺近辺の家なのか文脈から読み取りにくいが、前者ならば叡尊が招かれた持仏堂は馬司に存在し

たことになる。この場合、その有力な候補地として浮上するのが、今回の調査地にも含まれる字「堂ノ前」地区で、その中でも特に盛土や溝によって周囲から区別された一角といえよう（図１参照）。この場所は13世紀から盛土がなされていたことが確認されており、時代こそ下るものの、周囲の溝からは明らかに仏具と考えられる瓦質土器の一群が出土している（図25など参照）。想像をたくましくすれば、ここに乗詮の屋敷（細川氏の推定のように乗詮が馬司荘の荘官であれば、そこは公的な意味合いもある施設といえよう）が存在し、その一角に持仏堂や学春一家の住房があったのではなかろうか。

その後、この在地有力者（乗詮の後裔であろうか）の屋敷地を核として集村が形成されて行くが（今回の調査では遺構の面では溝の集中的掘削として認識された。時期は、14世紀以降）、それが大和盆地通有の条里形地割に規制されたものでなかったという点は、当時ここが一種の聖性を帯びた土地と認識されており、条里の施工などで破壊してはならない存在と考えられていた可能性を示すものかもしれない。こうした意味から、調査地周辺の地名に「紺屋垣内」、「火打」、「エビスヤ」、「念仏塚」、「結縁」などの職能的、あるいは聖的地名が多見されることには注意を要する（図１参照）。また、そもそも乗詮自身が文殊供養に異様に熱心であることにも一定の注意を向ける必要がある。大和における条里制は、主に13世紀後葉～14世紀にかけて面的に施工されると考えられるが、その際に集落もまた灌漑の要として計画的な配置がなされる（山川1998・2000）。今回の調査は、こうした耕地や集落の再編に組み込まれないムラが存在した、ということを発掘資料から示したという意味においても画期的といえる。ただし、こうしたものの具体的な性格については、なお今後慎重な検討を要するであろう。

最後に、「馬司」という地名について触れておきたい。この一風変わった地名については、服部英雄氏により馬寮田に伴う地名であるという指摘がなされている（服部1986）。延久２年（1070）「興福寺雑役免坪付帳」（注１）記載の、当時興福寺の寺領の一部であった諸司要劇田畑の中に馬寮田が含まれている。もちろん馬寮田の全ては本史料からは伺えないものの、そのうち５つが現在の馬司地名が残る場所と一致することが確認されている。また、馬司地名は下ツ道や横大路に沿って存在するものが多いことから、服部氏は「寮田は全てが寮米を納める水田だったのではなく、何らかの施設が置かれていたこともしばしばあったのであろう」とも指摘している。

今回の調査地は延久の「興福寺雑役免坪付帳」には記載されていない場所で、また該期の遺構や遺物も未確認だが、７世紀後葉の正方位を指向する建物や重圏文軒丸瓦が検出されていることから考えて、ここに何らかの公的施設が存在した可能性は高いものと考えられる。今回の検出遺構は時期的にやや古すぎるきらいはあり、古代の職制地名の可能性も当然考慮せねばならないが、先の服部氏の指摘は、この７世紀後葉の遺構を理解する上できわめて示唆的なものといえよう。

【注】

1　『平安遺文』9-4639·4640

【参考文献】

服部英雄　1986「松笠考」『遥かなる中世』７　中世史研究会

細川涼一　1999『感身学正記１』（脚注）東洋文庫

山川均　1998「中世集落の論理」『考古学研究』45-2

2000「大和郡山市中付田遺跡の発掘調査」『条里制・古代都市研究』16

No.	器種名	計　測　値（cm）	色　調	備　考
		ＳＤ－０２		
1	肥前磁器染付碗	復高(4.0)	N8/1灰白	一重網目文
2	唐津碗	口（11.0）　高（6.2）　底（4.6）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）5Y6/1灰	高台に糸切痕、細砂付着
3	備前壷	底（9.6）	2.5Y6/1 黄灰	ロクロ成形
4	土師皿	口（8.3）　高（1.1）	10YR8/2 灰白	
5	土師皿	口（8.1）　高（1.3）	10YR7/3 にぶい黄橙	
6	土師皿	口（8.2）　高（1.4）	7.5YR8/3浅黄橙	
7	土師皿	口（8.5）　高（1.3）	10YR7/3 にぶい黄橙	
8	土師皿	復口（9.4）　高（1.7）	7.5YR8/3浅黄橙	
9	土師皿	口（10.2）　高（2.0）	10YR8/1 灰白	口縁に煤付着
10	土師皿	復口（10.0）　高（2.0）	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁に煤付着
11	土師皿	復口（10.6）　高（2.4）	10YR8/2 灰白	口縁に煤付着
12	土師皿	復口（11.0）　高（2.3）	2.5YR5/6明赤褐	
13	志野皿	復口（11.2）　高（2.4）	（釉）5Y8/1灰白 （断）10YR8/2灰白	
14	瀬戸･美濃碗	復口（12.0）　高（6.9）　底（5.0）	2.5Y8/2 灰白	内面に緑釉
15	瀬戸･美濃天目碗	復口（11.6）　高（6.3）　底（5.0）	（釉）5YR4/4 にぶい赤褐 （断）10YR8/2灰白	連房Ⅰ期、高台に糸切痕
16	瀬戸･美濃天目碗	復口（11.2）　高（6.7）　底（4.7）	（釉）10YR2/2黒褐 （断）2.5Y7/1灰白	連房Ⅰ期
17	瀬戸･美濃天目碗	復口（11.0）　高（6.9）　底（4.4）	（釉）5YR2/1 黒褐 （断）10YR8/1灰白	連房Ⅰ期
18	青花皿	復口（10.4）　高（2.7）　底（4.2）	（断）7.5YR6/4 にぶい橙	碁笥底、底部内面蛇ノ目釉剥
19	青花碗	底（5.0）		景徳鎮、蟠龍文
20	唐津大皿	復口（34.8）　高（8.7）　底（10.0）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）10YR7/3 にぶい黄橙	鉄絵
21	唐津碗	口（10.6）　高（6.2）　底（4.4）	（釉）7.5Y4/3暗オリーブ （断）5YR5/4 にぶい赤褐	高台内に刻線及糸切痕
22	唐津碗	口（10.6）　高（6.6）　底（4.4）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）2.5Y6/1黄灰	
23	唐津碗	口（11.0）　高（7.2）　底（4.6）	（釉）2.5Y6/1黄灰 （断）10YR6/3 にぶい黄橙	高台に目跡痕
24	唐津碗	復口（11.8）　高（6.2）　復底（4.4）	（釉）7.5Y4/3暗オリーブ （断）10YR6/2灰黄褐	
25	唐津碗	復口（10.6）　高（6.8）　復底（4.0）	（釉）5Y6/1灰 （断）2.5Y6/2灰黄	
26	唐津碗	復口（10.6）　高（7.1）　復底（4.6）	（釉）7.5YR6/3 にぶい褐 （断）10YR7/4 にぶい黄橙	
27	唐津碗	復口（11.2）　高（6.8）　復底（5.0）	（釉）5Y6/1灰 （断）2.5Y7/1灰白	高台に目跡痕
28	唐津碗	口（11.0）　高（7.2）　底（4.6）	（釉）2.5Y6/1黄灰 （断）10YR6/3 にぶい黄橙	
29	唐津碗	復口（10.2）　高（7.3）　復底（4.0）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）10YR6/2灰黄褐	高台に糸切痕
30	唐津碗	復口（10.6）　高（7.5）　復底（4.6）	（釉）5Y8/1灰白 （断）5YR5/4 にぶい赤褐	
31	唐津碗	復口（10.2）　高（7.2）　復底（4.0）	（釉）10Y6/1 灰 （断）5Y6/1灰	高台に糸切痕
32	唐津碗	復口（10.6）　高（7.7）　復底（4.6）	（釉）7.5Y7/1灰白 （断）2.5Y8/1灰白	細砂付着
33	唐津皿	口（13.1）　高（4.4）　底（5.4）	（釉）10YR6/3 にぶい黄褐 （断）10YR7/3 にぶい黄褐	胎土目（3）、鉄絵
34	唐津皿	復口（12.0）　高（4.0）　底（5.0）	（釉）5Y5/2灰オリーブ （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目（4）、鉄絵
35	唐津皿	口（12.0）　高（3.7）　底（4.0）	（釉）5Y5/2灰オリーブ （断）10YR6/3 にぶい黄橙	鉄絵、高台に糸切痕
36	唐津皿	復口（11.6）　高（4.1）　底（5.2）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）7.5YR6/3 にぶい褐	胎土目
37	唐津皿	復口（12.4）　高（4.2）　底（5.6）	（釉）5Y7/1灰白 （断）7.5YR6/3 にぶい褐	胎土目
38	唐津皿	復口（12.6）　高（3.6）　底（3.9）	（釉）N8/0 灰白 （断）2.5Y6/2灰白	胎土目
39	唐津皿	口（13.6）　高（3.7）　底（5.4）	（釉）10YR6/3 にぶい黄橙 （断）10YR7/3 にぶい黄橙	胎土目（4）、鉄絵
40	唐津皿	口（9.2）　高（2.7）　底（3.4）	（釉）5Y6/1灰 （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目（4）
41	唐津皿	口（9.2）　高（2.7）　底（3.2）	（釉）5Y7/1灰白 （断）10YR7/3 にぶい黄橙	胎土目（4）
42	唐津皿	復口（11.2）　高（2.8）　底（4.4）	（釉）7.5Y6/2灰オリーブ （断）10YR6/1褐灰	胎土目（3）
43	唐津皿	復口（12.0）　高（4.1）　底（4.0）	（釉）2.5Y8/1灰白 （断）5YR5/4 にぶい赤褐	胎土目（4）、高台内に墨書
44	唐津皿	復口（10.8）　高（3.1）　底（3.8）	（釉）7.5Y5/3灰オリーブ （断）10YR8/3浅黄橙	胎土目
45	唐津皿	復口（12.8）　高（2.8）　底（5.6）	（釉）7.5Y7/1灰白 （断）10YR7/2 にぶい黄褐	胎土目
46	唐津皿	復口（9.4）　高（2.9）　底（4.2）	（釉）5Y4/6暗オリーブ （断）7.5YR6/2 にぶい赤褐	
47	唐津皿	復口（12.0）　高（2.9）　復底（4.4）	（釉）5Y4/3暗オリーブ （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目
48	唐津皿	復口（12.2）　高（3.3）　復底（4.2）	（釉）2.5GY オリーブ灰 （断）10YR6/2灰黄褐	砂目
49	唐津皿	復口（13.2）　高（2.8）　復底（4.6）	（釉）2.5Y6/3 にぶい黄 （断）10YR7/3 にぶい黄橙	砂目
50	唐津皿	口（13.4）　高（3.4）　底（5.1）	（釉）5Y5/2灰オリーブ （断）10YR6/3 にぶい黄褐	砂目、高台に墨書及び糸切痕
51	唐津皿	口（13.3）　高（3.4）　底（4.0）	（釉）2.5Y6/2灰黄 （断）10YR6/3 にぶい黄橙	胎土目（4）
52	唐津四方皿	口（11.5）　高（4.2）　底（5.2）	（釉）2.5Y6/1黄灰 （断）2.5Y5/1黄灰	鉄絵
53	土師質土釜	復口（21.0）　高（13.3）　最大（21.9）	10YR8/2灰白	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－２型式
54	土師質土釜	復口（21.2）　高（13.8）　最大（24.4）	10YR8/2灰白	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－２型式

表１　遺物観察表１

55	瓦質鉢	口（16.0） 高（7.6） 底（8.6）	（断）10YR8/2灰白	内面煤付着、外面ミガキ
56	瓦質脚付鉢	口（16.0） 高（8.2）	（断）10YR8/2灰白	内面煤付着、外面ミガキ
57	瓦質小壷	復口（10.0） 高（8.7）	（断）2.5Y7/1灰白	
58	瓦質小壷	復口（12.2）	（断）5Y7/1灰白	
59	瓦質小壷	復口（12.2） 高（12.7）	（断）2.5Y6/1灰	
60	瓦質土管	復口（20.2）	（断）5Y8/1灰白	
61	瓦質摺鉢	復口（34.0） 高（15.0） 復底（13.6）	（断）2.5Y8/1灰白	摺目10条／単位、F期
62	土師皿	口（8.1） 高（1.5）	10YR7/3 にぶい黄橙	
63	土師皿	口（7.6） 高（1.4）	10YR8/3 浅黄橙	
64	土師皿	口（8.8） 高（1.4）	7.5YR7/4にぶい橙	
65	土師皿	復口（8.2） 高（1.4）	10YR7/3 にぶい黄橙	
66	土師皿	復口（8.3） 高（1.4）	10YR7/3 にぶい黄橙	
67	土師皿	口（8.9） 高（1.2）	10YR7/3 にぶい黄橙	
68	土師皿	復口（8.2） 高（1.0）	10YR7/2 にぶい黄橙	
69	土師皿	口（8.6） 高（1.0）	10YR7/3 にぶい黄橙	
70	土師皿	口（8.4） 高（1.4）	10YR7/2 にぶい黄橙	
71	土師皿	復口（8.4） 高（1.6）	2.5Y8/2 灰白	
72	土師皿	復口（8.0） 高（1.4）	2.5Y7/3 浅黄	
73	土師皿	復口（8.6） 高（1.3）	10YR7/3 にぶい黄橙	
74	土師皿	口（8.5） 高（1.4）	10YR7/3 にぶい黄橙	
75	土師皿	口（8.2） 高（1.5）	10YR7/2 にぶい黄橙	
76	土師皿	口（8.2） 高（1.7）	10YR6/1 褐灰	
77	土師皿	復口（8.3） 高（1.4）	10YR6/3 にぶい黄橙	
78	土師皿	復口（8.2） 高（1.5）	10YR7/3 にぶい黄橙	
79	土師皿	口（8.2） 高（1.5）	10YR7/2 にぶい黄橙	
80	土師皿	口（8.2） 高（1.4）	7.5YR8/3浅黄橙	
81	土師皿	口（7.8） 高（1.6）	10YR8/3 浅黄橙	内面に墨書
82	土師皿	口（8.8） 高（1.8）	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁に煤付着
83	土師皿	口（9.1） 高（2.0）	10YR6/1 褐灰	口縁に煤付着
84	土師皿	口（8.8） 高（2.0）	10YR8/2 灰白	口縁に煤付着
85	土師皿	復口（10.0） 高（2.0）	10YR7/3 にぶい黄橙	
86	土師皿	復口（9.8） 高（2.1）	10YR8/1 灰白	
87	土師皿	口（10.6） 高（2.1）	10YR8/2 灰白	口縁に煤付着
88	土師皿	口（11.2） 高（2.2）	10YR8/3 浅黄橙	口縁に煤付着
89	土師皿	口（11.6） 高（2.1）	10YR8/3 浅黄橙	
90	土師皿	口（11.8） 高（2.7）	10YR8/2 灰白	
91	土師皿	復口（11.8） 高（2.7）	10YR8/2 灰白	
92	土師皿	口（12.2） 高（2.5）	10YR8/2 灰白	
93	土師皿	口（12.2） 高（2.4）	10YR8/2 灰白	
94	瀬戸･美濃天目碗	復口（11.6） 高（8.0） 底（4.8）	（釉）7.5YR2/2 黒褐 （断）2.5Y8/2灰白	連房Ⅰ期
95	瀬戸･美濃灰釉皿	復口（11.6） 高（2.6） 底（6.4）	（釉）7.5YR6/2灰オリーブ（断）2.5Y6/1黄灰	
96	瀬戸･美濃灰釉皿	復口（11.4） 高（2.9） 底（6.4）	（釉）7.5YR5/3灰オリーブ（断）2.5Y6/1黄灰	
97	織部向付	高（4.9）	（断）10YR7/1灰白	
98	青花碗	復口（10.8） 高（5.5） 底（4.8）		曼頭心、底部に籾殻付着
99	青花皿	口（10.6） 高（2.8） 底（5.0）	（断）10YR7/3にぶい黄橙	陶胎、高台に墨書「宗」
100	中国製青磁碗	底（4.0）	（釉）5Y6/3 オリーブ黄 （断）2.5Y8/1灰白	底部内面に刻印
101	丹波摺鉢		（釉）5Y5/2 灰オリーブ（断）N7/1 灰白	Ⅰ型式
102	備前摺鉢		（外）N5/0 灰 （断）10R5/3 赤褐	Ⅴ期
103	備前壷	口（10.8）	2.5YR4/2灰赤	Ⅴ期
104	唐津碗	復口（11.0） 高（6.2） 底（4.2）	（釉）7.5Y6/2灰オリーブ（断）2.5Y5/3にぶい赤褐	
105	唐津碗	復口（11.2） 高（5.8） 底（4.0）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）10YR7/2黄橙	
106	唐津碗	復口（10.7） 高（6.0） 底（4.0）	（釉）7.5Y7/3にぶい橙 （断）5YR5/4にぶい赤褐	高台内に刻線
107	唐津碗	復口（11.2） 高（5.8） 底（3.8）	（釉）7.5Y7/1灰白 （断）7.5YR6/3 にぶい褐	
108	唐津碗	復口（11.6） 高（6.3） 底（4.7）	（釉）10Y6/1 灰 （断）2.5Y6/1黄灰	胎土目
109	唐津碗	復口（11.6） 高（6.3） 底（4.7）	（釉）10Y6/1 灰 （断）2.5Y6/1黄灰	
110	唐津碗	復口（10.2） 高（6.2） 底（3.6）	（釉）10Y5/2 オリーブ灰 （断）5Y6/1灰	鉄絵

表２　遺物観察表２

111	唐津碗	復口（11.6） 高（6.4） 底（4.2）	（釉）5Y5/6オリーブ （断）7.5YR5/4にぶい橙	
112	唐津碗	復口（11.8） 高（6.1） 底（3.9）	（釉）5Y7/7灰白 （断）2.5Y7/1灰白	
113	唐津碗	復口（9.8） 高（6.7） 底（3.8）	（釉）7.5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	
114	唐津碗	復口（10.4） 高（6.6） 底（4.0）	（釉）7.5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	
115	唐津碗	復口（11.4） 高（7.7） 底（5.6）	（釉）5Y6/3オリーブ黄 （断）2.5Y4/1赤灰	
116	唐津碗	復口（9.0） 高（6.2） 底（2.9）	（釉）10YR6/2にぶい黄橙 （断）10YR7/3黄橙	
117	唐津碗	復口（10.8） 高（6.6） 底（5.0）	（釉）7.5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	
118	唐津碗	復口（10.4） 高（6.7） 底（4.0）	（釉）2.5Y6/1黄灰 （断）7.5YR7/4にぶい橙	
119	唐津碗	復口（10.0） 高（6.1） 底（4.0）	（釉）5YR2/1黒褐 （断）2.5Y6/1黄灰	
120	唐津碗	復口（11.8） 高（6.1） 底（3.9）	（釉）5Y7/2灰白 （断）2.5Y7/1灰黄	外面に接合痕
121	唐津碗	復口（11.6） 高（6.2） 底（5.0）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y6/2灰黄	胎土目
122	唐津碗	復口（11.2）	（釉）5YR7/2明褐灰 （断）10YR7/3にぶい黄橙	
123	唐津碗	復口（11.0） 高（6.9） 底（4.4）	（釉）2.5Y7/1灰白 （断）7.5YR6/3にぶい橙	胎土目
124	唐津碗	復口（11.2） 高（7.4） 底（5.2）	（釉）5Y7/2灰白 （断）5Y6/1灰	
125	唐津碗	復口（11.0） 高（7.3） 底（4.0）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）N6/0灰	
126	唐津碗	復口（11.0） 高（7.5） 底（4.7）	（釉）7.5Y7/1灰白 （断）2.5Y7/2灰黄	
127	唐津碗	口（11.4） 高（7.2） 底（4.9）	（釉）5YR6/2灰褐 （断）5YR6/3にぶい橙	高台内に刻線
128	唐津碗	復口（11.4） 高（6.9） 底（4.0）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）2.5Y6/1黄灰	
129	唐津碗	復口（11.0） 高（6.4） 底（3.8）	（釉）2.5Y6/3にぶい黄 （断）5YR6/3にぶい橙	
130	唐津碗	復口（10.4） 高（5.7） 底（4.2）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）2.5Y6/1黄灰	
131	唐津碗	復口（10.2） 高（7.5） 底（3.8）	（釉）2.5Y7/2灰黄 （断）2.5Y6/2灰黄	
132	唐津碗	口（11.4） 高（6.8） 底（4.9）	（釉）5Y8/1灰白 （断）2.5Y7/1灰白	
133	唐津碗	復口（11.2） 高（6.8） 底（4.8）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	
134	唐津Ⅲ	口（9.9） 高（3.0） 底（3.7）	（釉）5Y6/1灰 （断）10YR7/3にぶい黄橙	胎土目
135	唐津Ⅲ	口（10.4） 高（3.1） 底（4.0）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目（4）
136	唐津Ⅲ	口（9.3） 高（2.8） 底（3.8）	（釉）5Y6/1灰 （断）5Y7/1灰白	胎土目（4）
137	唐津Ⅲ	復口（10.8） 高（3.2） 底（3.8）	（釉）5Y6/1灰 （断）2.5YR5/3にぶい赤褐	胎土目（4）
138	唐津Ⅲ	復口（9.6） 高（2.9） 底（4.0）	（釉）7.5Y4/3暗オリーブ （断）10YR6/1褐灰	
139	唐津Ⅲ	復口（10.0） 高（3.1） 底（4.6）	（釉）7.5Y4/3暗オリーブ （断）2.5Y5/1黄灰	
140	唐津Ⅲ	口（13.2） 高（3.2） 底（3.8）	（釉）2.5Y6/3にぶい黄 （断）10YR7/3にぶい黄橙	胎土目
141	唐津Ⅲ	復口（13.2） 高（3.6） 底（3.4）	（釉）2.5Y6/3にぶい黄 （断）10YR6/3にぶい黄橙	胎土目
142	唐津Ⅲ	復口（10.8） 高（2.8） 底（3.8）	（釉）N8/0灰白 （断）5YR5/3にぶい赤褐	
143	唐津Ⅲ	復口（11.6） 高（3.4） 底（5.0）	（釉）5Y7/2灰白 （断）2.5Y7/1灰白	
144	唐津Ⅲ	口（11.0） 高（3.5） 底（3.4）	（釉）5Y6/1灰 （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目（4）
145	唐津Ⅲ	復口（12.0） 高（3.4） 底（4.4）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目
146	唐津Ⅲ	口（11.4） 高（3.3） 底（4.0）	（釉）5Y5/2灰オリーブ （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目（4）、鉄絵
147	唐津Ⅲ	口（12.6） 高（4.1） 底（4.6）	（釉）7.5Y5/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	胎土目（3）、鉄絵
148	唐津Ⅲ	復口（13.4） 高（3.4） 底（4.4）	（釉）5Y5/3灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	砂目（4）
149	唐津Ⅲ	口（13.4） 高（3.6） 底（3.8）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	砂目（5）
150	唐津Ⅲ	復口（12.0） 高（3.2） 底（5.4）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）10YR7/2にぶい黄橙	胎土目（4）
151	唐津Ⅲ	復口（11.8） 高（3.3） 底（5.0）	（釉）5Y5/2灰オリーブ （断）2.5Y5/2黄灰	胎土目（4）
152	唐津Ⅲ	口（13.0） 高（3.7） 底（4.8）	（釉）2.5Y5/3黄褐 （断）10YR7/3にぶい黄橙	砂目（3）、高台に墨書
153	唐津Ⅲ	口（11.8） 高（4.3） 底（5.0）	（釉）5Y8/1灰白 （断）5YR4/2褐灰	
154	唐津小壷	底（7.0）	（釉）5Y6/2灰オリーブ （断）2.5Y7/3浅黄橙	ロクロ成形
155	唐津小碗	口（6.8） 高（3.6） 底（2.6）	（釉）7.5Y5/2灰オリーブ （断）2.5Y6/1黄灰	
156	土師質土釜	復口（21.6） 最大（23.0）	10YR8/3浅黄橙	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－2型式
157	土師質土釜	復口（21.6） 最大（24.3）	7.5YR7/4にぶい橙	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－2型式
158	土師質土釜	復口（20.5） 最大（22.9）	5YR8/3淡橙	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－2型式
159	土師質土釜	復口（20.8） 最大（24.9）	2.5Y8/2灰白	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－2型式
160	土師質土釜	復口（21.0） 高（14.7） 最大（24.8）	7.5YR7/4にぶい橙	大和I$_2$型Ⅲ-2型式、内面ハケメ
161	土師質土釜	口（21.6） 高（15.2） 最大（24.0）	7.5YR8/4浅黄橙	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－2型式
162	瓦質鉢	復口（16.0） 高（7.8） 底（9.0）	（断）2.5YR7/1灰白	内面煤付着、外面ミガキ
163	瓦質鉢	復口（16.0） 高（7.6） 底（8.6）	（断）10YR8/2灰白	内面煤付着、外面ミガキ
164	瓦質台付鉢	口（15.0） 高（11.9） 底（10.0）	（断）2.5Y8/1灰白	外面ミガキ
165	瓦質台付鉢	口（16.0） 高（11.2） 底（11.2）	（断）2.5Y8/1灰白	内面煤付着、内外面ナデ
166	瓦質火鉢	復口（24.0） 高（12.6）	（断）5Y8/1灰白	内面煤付着、櫛描波状文

表3　遺物観察表3

167	瓦質摺鉢	復口（29.4） 高（14.0） 底（8.8）	（断）10YR7/1灰白	摺目11条/単位、F期、底部に離れ砂付着
168	瓦質摺鉢	復口（31.0） 高（14.5） 底（9.6）	（断）5Y8/1灰白	摺目９条／単位、Ｆ期
169	瓦質方形火鉢	長辺（34.0）	（断）5Y8/1灰白	外面ミガキ
170	瓦質土釜	復口（29.4） 最大（36.7）	（断）2.5Y8/1灰白	
171	土師皿	復口（11.6） 高（2.2）	10YR8/2 灰白	
172	唐津碗	口（10.3） 高（6.0） 底（3.6）	（釉）2.5YR7/2 明赤灰 （断）2.5YR4/4 にぶい赤褐	鉄絵
			ＳＤ－０４	
173	唐津碗	復口（11.2） 高（6.6） 底（4.8）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）10YR6/2灰黄褐	高台に糸切痕
174	唐津碗	口（11.0） 高（7.4） 底（4.5）	（釉）7.5Y6/1灰 （断）N7/0 灰	高台に細砂付着
175	土師質土釜	復口（19.6）	2.5Y8/2 灰白	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－２型式
176	瓦質脚付火鉢	口（16.7）	（断）10YR8/1灰白	
177	土師質土釜	復口（18.0）	10YR7/2 にぶい黄橙	
178	土師質土釜	復口（16.4）	7.5YR8/2灰白	
179	備前摺鉢	復口（31.2） 高（12.9） 底（13.3）	10R6/6赤橙	摺目８条／単位、Ⅳ期
180	瀬戸･美濃天目碗	復口（11.7） 高（5.9） 底（4.1）	（釉）5YR2/2 黒褐 （断）2.5Y8/2灰白	大窯後Ⅰ期
181	唐津碗	復口（11.5） 高（7.6） 底（4.9）	（釉）5YR6/2 灰オリーブ （断）10YR5/4 にぶい黄褐	高台に目跡痕
182	唐津碗	復口（12.0） 高（7.4） 底（4.8）	（釉）10YR7/3 にぶい黄橙 （断）10YR6/3 にぶい黄褐	
183	唐津皿	口（13.7） 高（3.8） 底（4.6）	（釉）10YR6/2灰黄褐 （断）10YR6/3 にぶい黄褐	胎土目（4）、高台内に墨書
184	唐津皿	口（12.5） 高（4.3） 底（4.0）	（釉）10YR6/2灰黄褐 （断）10YR6/3 にぶい黄褐	胎土目（4）
185	唐津皿	口（13.4） 高（3.8） 底（4.5）	（釉）5YR6/1 灰 （断）N7/0 灰白	砂目（3）、高台内に墨書及び糸切痕
186	唐津皿	復口（12.6） 高（3.7） 底（3.0）	（釉）N8/0 灰白 （断）5YR5/3 にぶい褐	胎土目（4）
187	唐津皿	口（13.0） 高（4.3） 底（4.6）	（釉）7.5YR6/2 灰褐 （断）7.5YR5/4 にぶい褐	胎土目（4）、鉄絵
188	唐津皿	口（12.7） 高（4.4） 底（4.5）	（釉）7.5YR7/3 にぶい橙 （断）7.5YR6/3 にぶい褐	鉄絵
189	唐津皿	口（12.8） 高（4.4） 底（4.1）	（釉）5Y5/3灰ｵﾘｰﾌﾞ （断）10YR6/2灰黄褐	胎土目（4）、鉄絵、高台内に刻線
190	唐津皿	口（13.2） 高（4.3） 底（4.4）	（釉）7.5YR6/3 にぶい褐 （断）5YR5/4 にぶい赤褐	胎土目（3）、鉄絵
191	唐津皿	口（12.5） 高（4.3） 底（4.3）	（釉）10YR7/2 にぶい黄褐 （断）10YR5/3 にぶい黄褐	胎土目（4）、鉄絵、高台内に刻線
			ＳＸ－１３	
192	土師皿	口（12.0） 高（1.9）	10YR8/2 灰白	
193	唐津碗	口（11.0）	（釉）7.5YR8/1 灰白 （断）10YR6/3 にぶい黄橙	
194	唐津皿	口（13.1） 高（4.5） 底（4.3）	（釉）7.5YR8/1 灰白 （断）5YR6/4 にぶい橙	鉄絵
195	瓦質台付鉢	復底（10.0）	（断）10YR7/2にぶい黄橙	
196	瓦質甕	復口（30.0）	（断）10YR7/1灰白	櫛描波状文、内面に煤付着
			ＳＤ－０５	
197	土師皿	口（7.5） 高（1.3）	10YR7/2 にぶい黄橙	
198	土師皿	口（8.9） 高（1.9）	10YR8/4 浅黄橙	口縁に煤付着
199	唐津碗	復口（11.0） 高（6.4） 復底（4.8）	（釉）5YR7/2 にぶい橙 （断）5YR6/4 にぶい橙	
200	瓦質鉢		（断）5Y8/1灰白	内面煤付着
201	瓦質三脚付鉢	口（15.6） 高（8.0）	（断）10YR7/2にぶい黄橙	内面煤付着
202	土師質土釜	復口（20.4） 最大（27.0）	10YR7/2 にぶい黄橙	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－１型式、内面ハケメ
203	土師質土釜	復口（23.6） 最大（27.5）	7.5YR8/3浅黄橙	大和Ⅰ$_2$型Ⅲ－２型式
			ＳＸ－13･14間堤内	
204	瓦質甕	復底（29.0）	（断）5Y8/1灰白	内面煤付着
			ＳＤ－０６Ａ	
205	瓦質三脚付鉢	復口（13.0） 高（6.7）	（断）2.5Y8/1灰白	内面煤付着
206	瓦質摺鉢	復底（9.6）	（断）5Y8/1灰白	摺目10条／単位
207	瓦質火鉢	口（26.6） 高（14.4）	（断）5Y8/1灰白	外面ミガキ
			ＳＤ－０６Ｂ	
208	土師皿	口（7.6） 高（1.5）	10YR7/3 にぶい黄橙	
209	土師皿	口（7.9） 高（1.6）	10YR8/3 浅黄橙	
210	土師皿	口（7.6） 高（1.2）	10YR7/3 にぶい黄橙	
211	土師皿	口（8.4） 高（1.5）	10YR7/2 にぶい黄橙	
212	土師皿	口（9.4） 高（1.6）	7.5YR7/2にぶい橙	
213	土師皿	口（9.8） 高（2.0）	10YR8/2 灰白	
214	中国製青磁碗	底（4.2）	（釉）5Y6/3オリーブ黄 （断）N8/0 灰	底部内面に刻印
215	土師質土釜		7.5YR7/4にぶい橙	
216	土師質土釜		2.5YR8/1灰白	

表４　遺物観察表４

217	土師質土釜	復口（21.4）　最大（28.8）	10YR8/2 灰白	大和Ｉ$_2$型Ⅲ－１型式
218	瓦質火鉢	復口（26.0）	（断）5Y8/1灰白	雷文
219	瓦質風炉	復口（24.8）	（断）2.5Y8/2灰白	
220	瓦質摺鉢	復底（9.7）	（断）5Y8/1灰白	Ｆ期、外面ハケメ
221	瓦質深鉢	口（30.8）　高（26.1）　底（25.3）	（断）5Y8/1灰白	
		ＳＸ－０７		
222	土師皿	口（7.7）　高（1.4）	10YR7/3 にぶい黄橙	
223	土師皿	口（8.2）　高（1.4）	10YR8/2 灰白	
224	中国製青磁碗	復底（5.9）	（釉）2.5GY6/1 オリーブ灰　（断）N6/0 灰	底部内面に陰刻
225	備前摺鉢		2.5YR4/1赤灰	Ⅴ期
226	土師質土釜		10YR8/2 灰白	
227	瓦質摺鉢		（断）5Y8/1灰白	Ｄ期
228	瓦質摺鉢		（断）5Y8/1灰白	Ｃ期
229	瓦質脚付鉢	復口（13.0）　高（6.1）	（断）7.5YR7/2 明赤灰	
230	瓦質浅鉢	復口（23.0）	（断）5Y8/1灰白	内面ミガキ
231	瓦質土管	口（13.6）	（断）5Y8/1灰白	
232	土師質土釜	復口（24.1）	2.5Y8/2 灰白	大和I$_2$型Ⅲ-1型式、煤付着
233	瓦質摺鉢	復口（31.4）　高（15.3）　復底（10.6）	（断）5Y8/1灰白	摺目11条、D期、外面ハケメ後ナデ
		ＳＤ－０１		
234	土師皿	口（7.6）　高（1.4）	2.5Y7/2 灰黄	
235	瓦質風炉		（断）5Y8/1灰白	雷文
236	備前甕		10YR5/1 褐灰	
237	瀬戸･美濃天目碗	復口（13.8）　高（7.7）　復底（4.3）	（釉）7.5YR4/3 褐　（断）5Y8/1灰白	古瀬戸後Ⅲ期
238	中国製青磁碗	底（5.4）	（釉）5GY6/1 オリーブ灰	
239	備前摺鉢		2.5YR5/1赤灰	
240	備前甕		2.5Y4/1 黄灰	
241	信楽摺鉢		（外）5YR5/2 褐灰	
242	瓦質土釜		（断）5Y8/1灰白	鍔以下に煤付着
243	瓦質椀	口（11.2）　高（3.4）	（断）5Y8/1灰白	
244	瓦質小壺	復口（13.3）　高（11.1）　底（11.3）	（断）5Y8/1灰白	
245	瓦質蓋		（外）5Y6/1灰	
246	瓦質鉢		（断）2.5Y7/1灰白	
247	瓦質鉢		（断）5Y8/1灰白	
248	瓦質風炉		（断）5Y6/1灰白	
249	瓦質摺鉢	復口（33.8）	（断）5Y7/1灰白	摺目８条、D期、外面ハケメ
250	瓦質摺鉢	復口（33.5）	（断）5Y7/1灰白	摺目７条／単位、Ｄ期
251	瓦質摺鉢	底（9.6）	（断）7.5Y8/1灰白	摺目７条／単位、Ｄ期
252	土師皿	口（7.3）　高（1.5）	2.5Y7/2 灰黄	内面煤付着
253	土師皿	口（7.5）　高（1.4）	2.5Y8/2 灰白	
254	土師皿	口（7.2）　高（1.4）	2.5Y7/2 灰黄	
255	土師皿	口（7.6）　高（1.6）	2.5Y8/2 灰白	
256	土師皿	復口（8.4）　高（1.4）	2.5Y8/2 灰白	
257	土師皿	口（8.1）　高（1.9）	2.5YR6/4にぶい橙	
258	土師皿	口（8.1）　高（1.6）	2.5Y7/3 浅黄	
259	土師皿	復口（12.6）　高（1.6）	5Y8/1 灰白	外面煤付着
260	土師皿	復口（12.8）　高（2.5）	2.5Y8/1 灰白	
261	土師質土釜		10YR7/2 にぶい黄橙	外面全体に煤付着
262	土師質土釜		10YR6/1 褐灰	鍔以下に煤付着
263	土師質土釜		10YR7/3 にぶい黄橙	外面全体に煤付着、内面ハケメ
264	土師質土釜		10YR7/2 にぶい黄橙	外面全体に煤付着
265	土師質土釜		2.5Y8/2 灰白	内外面ともに煤付着
266	土師質土釜	復口（16.4）　最大（24.9）	10YR7/3 にぶい黄橙	鍔以下に煤付着
267	土師質土釜	復口（16.5）　最大（25.8）	2.5Y8/3 淡黄	鍔以下に煤付着
268	土師質土釜		10YR7/3 にぶい黄橙	大和I$_2$型Ⅰ-1型式、煤付着
269	土師質土釜		2.5Y8/3 浅黄	大和I$_2$型Ⅰ-2型式、煤付着
270	土師質土釜		7.5YR7/4にぶい橙	大和I$_2$型Ⅰ-2型式、内面ハケメ

表５　遺物観察表５

271	土師質土釜		10YR8/2 灰白	大和L2型Ⅰ-1型式、内面ハケメ
272	土師質土釜	復口（18.8） 最大（26.6）	2.5Y8/2 灰白	大和L2型Ⅰ-2型式、煤付着
			ＳＤ－１５	
273	土師皿	口（6.6） 高（0.9）	10YR8/3 浅黄橙	
274	土師皿	口（7.0） 高（1.6）	5YR6/4にぶい橙	
275	土師皿	口（8.2） 高（1.6）	5YR5/6暗赤褐	
276	土師皿	口（8.9） 高（2.1）	5YR6/4にぶい橙	
277	土師皿	口（8.9） 高（2.0）	2.5YR5/6暗赤褐	
278	土師皿	口（9.2） 高（2.5）	10YR8/1 灰白	
279	古瀬戸平碗	復口（11.0） 高（6.6） 底（5.0）	（釉）5Y7/3浅黄 （断）2.5Y8/2灰白	後期様式Ⅰ期
280	土師質土釜	復口（18.4）	10YR8/2 灰白	鍔以下に煤付着
281	土師質土釜	復口（20.8）	10YR8/2 灰白	鍔以下に煤付着
282	土師質土釜	復口（26.0）	7.5YR6/4にぶい橙	
283	瓦質摺鉢	復口（14.8） 高（11.6） 復底（13.4）	10YR8/2灰白	摺目９条／単位、Ａ期
			ＳＤ－０７	
284	土師皿	口（6.9） 高（1.7）	5YR6/6橙	
285	土師皿	口（7.1） 高（1.6）	7.5YR7/4にぶい橙	
286	土師皿	口（6.9） 高（1.6）	5YR6/6橙	
287	土師質香炉	高（9.3） 底（10.8） 最大（15.5）	7.5YR8/3浅黄橙	
288	中国製青磁碗	口（15.6） 高（6.6） 底（6.2）	（釉）10Y6/1 灰 （断）10Y6/1 灰	
289	土師質土釜		10YR8/3 浅黄橙	鍔以下に煤付着
290	土師質土釜	復口（18.0） 最大（23.2）	10YR8/3 浅黄橙	鍔以下に煤付着
291	瓦質土釜		（断）5Y8/1灰白	内面ハケメ
292	瓦質摺鉢		（断）5Y8/1灰白	Ａ期
293	瓦質摺鉢		（断）5Y8/1灰白	Ａ期
294	瓦質土釜	復口（14.5）	（断）5Y8/1灰白	
295	瓦質土釜	復口（31.0）	（断）5Y8/1灰白	
			ＳＤ－１４	
296	土師皿	復口（8.6） 高（2.1）	5YR6/4にぶい橙	煤付着
297	瓦器椀	復口（8.6）	5Y8/1 灰白	Ⅳ－Ｄ型式
298	土師質土釜	復口（22.2）	10YR8/2 灰白	
			ＳＤ－１３	
299	土師皿	復口（6.4） 高（1.4）	10YR8/1 灰白	
300	土師皿	復口（7.4） 高（1.6）	10YR8/1 灰白	
301	土師皿	口（7.2） 高（1.0）	10YR8/2 灰白	
302	土師皿	復口（7.6） 高（2.0）	10YR7/3 にぶい黄橙	全面に煤付着
303	土師皿	復口（9.0） 高（2.8）	7.5YR6/4にぶい橙	
304	瓦器椀		5Y8/1 灰白	Ⅳ－Ｃ型式
305	瓦質摺鉢		2.5Y8/1 灰白	Ａ期
306	土師質土釜		10YR8/2 灰白	
307	土師質鉢	復口（10.3）	10YR8/2 灰白	
308	土師質鉢	復口（12.4）	10YR7/3 にぶい黄橙	
309	土師質土釜	復口（24.8）	10YR8/2 灰白	
			ＳＢ－０１	
310	須恵器坏蓋	復口（16.2）	2.5Y6/1 黄灰	飛鳥Ⅲ型式
311	須恵器坏	復口（9.6） 高（3.2）	N5/0灰	飛鳥Ⅲ型式
			ＳＢ－０２	
312	須恵器坏蓋	復口（14.2）	5Y6/1 灰	飛鳥Ⅳ型式
			ＳＤ－１７	
313	弥生土器高坏	口（18.6） 高（18.7） 裾（13.1）	7.5YR6/4 にぶい橙	Ⅳ様式
			瓦	
314	軒平瓦		N5/0灰	連珠文
315	軒平瓦		N5/0灰	
316	軒丸瓦	直（14.0）	（外）N5/0 灰 （断）5Y8/1灰白	左三巴文、煤付着
317	軒丸瓦	直（13.6）	（外）N4/0 灰 （断）N6/0 灰	右三巴文
318	軒丸瓦		10YR7/1 灰白	重圏文

表６　遺物観察表６

No.	器種名	計測値（mm）	材質	出土地点	備考
S-1	火打石	幅（61.4） 高（47.3） 厚（20.5）	サヌカイト	SD-04 1層	
S-2	火打石	幅（58.3） 高（43.2） 厚（24.1）	サヌカイト	北側小溝	
S-3	火打石	幅（58.4） 高（40.6） 厚（26.2）	サヌカイト	SD-02 3層	
S-4	火打石	幅（50.0） 高（43.0） 厚（14.0）	サヌカイト	SX-04	
S-5	火打石	幅（40.2） 高（34.6） 厚（26.2）	石英	SD-02 3層	
S-6	火打石	幅（17.9） 高（33.0） 厚（16.8）	チャート	包含層	
S-7	砥石（下砥）	高（94.8） 幅（59.3） 厚（12.2）	緑泥片岩	SD-04 1層	
S-8	砥石（下砥）	高（80.2） 幅（64.8） 厚（13.2）	粘板岩	SD-02 2層	
S-9	砥石（下砥）	高（94.9） 幅（50.6） 厚（23.5）	片岩	S.T-01	
S-10	凹み石	高（64.7） 幅（62.3） 厚（36.0）	片岩	SD-02 3層	
S-11	砥石（置砥）	高（130.0） 幅（96.2） 厚（67.5）	粘板岩	SD-02 3層	
S-12	五輪塔（空輪）	直（159.2）	花崗岩	SD-02 3層	
D-1	土製円盤	長（28.0） 短（25.2） 厚（9.2）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-2	土製円盤	長（32.4） 短（30.1） 厚（9.2）	瓦質摺鉢	SD-02 3層	
D-3	土製円盤	長（33.2） 短（30.5） 厚（8.2）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-4	土製円盤	直（32.2） 厚（10.9）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-5	土製円盤	長（36.3） 短（33.8） 厚（8.1）	瓦質摺鉢	SD-02 3層	
D-6	土製円盤	直（33.4） 厚（12.1）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-7	土製円盤	直（33.8） 厚（12.3）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-8	土製円盤	長（38.0） 短（33.4） 厚（10.6）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-9	土製円盤	直（33.2） 厚（10.9）	瓦質土器	SD-02 1層	
D-10	土製円盤	長（37.2） 短（34.8） 厚（8.1）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-11	土製円盤	長（36.7） 短（34.1） 厚（10.5）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-12	土製円盤	長（36.7） 短（34.1） 厚（10.5）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-13	土製円盤	長（41.2） 短（32.0） 厚（11.4）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-14	土製円盤	長（42.1） 短（40.2） 厚（9.8）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-15	土製円盤	長（37.9） 短（33.8） 厚（8.5）	土師質土釜	SD-02 2層	
D-16	土製円盤	長（40.2） 短（37.2） 厚（9.1）	土師質土釜	SD-02 1層	
D-17	土製円盤	長（40.0） 短（37.0） 厚（11.1）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-18	土製円盤	直（37.8） 厚（11.6）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-19	土製円盤	長（44.3） 短（37.7） 厚（9.7）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-20	土製円盤	長（40.9） 短（36.5） 厚（9.1）	陶器	SD-02 3層	
D-21	土製円盤	直（48.2） 厚（7.3）	瓦質土器（甕?）	SD-02 2層	
D-22	土製円盤	長（49.5） 短（43.1） 厚（12.1）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-23	土製円盤	直（47.0） 厚（8.1）	瓦質土器	SD-02 2層	
D-24	土製円盤	長（52.8） 短（49.2） 厚（10.9）	備前甕	SD-02 3層	
D-25	土製円盤	直（52.6） 厚（15.9）	瓦質土器	SD-02 3層	
D-26	土製円盤	長（55.3） 短（50.2） 厚（10.1）	瓦質土器	包含層	
D-27	犬形土製品	現長（51.0） 現高（40.0）		SD-02 3層	てづくね

【凡例】口：口径 復口：復元口径 高：器高 底：底径 復底：復元底径 最大：最大径 直：直径 （断）：断面色調
唐津焼の目跡の数については（ ）内に示した。
色調に関しては、『新版標準土色帳』に拠った。
各器種の編年は以下の文献に拠った。

瀬戸・美濃天目碗	伊藤嘉章 1994「和物天目ー瀬戸・美濃窯における天目の展開ー」『特別展唐物天目ー福建省建窯出土天目と日本伝世の天目ー』（展示図録）福建省博物館・茶道資料館
土釜	川口宏海 1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ 日本中世土器研究会
丹波焼摺鉢	大平茂ほか 1992『下相野窯址』兵庫県教育委員会
備前焼	真壁忠彦・真壁葭子 1966～68・84「備前焼研究ノート」1～5『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18
瓦質土器摺鉢	佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ 日本中世土器研究会
古瀬戸	藤澤良祐 1991「瀬戸古窯趾群ー古瀬戸後期様式の編年ー」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ
瓦器椀	川越俊一 1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会

表7 遺物観察表7

報告書抄録

ふりがな	まつかさいせき　だいいちじ　はっくつちょうさほうこくしょ
書名	馬司遺跡第１次発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	7
編著者名	山川均・岡本智子
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-1007　奈良県大和郡山市南郡山町554－1　TEL 0743-53-1151
発行年月日	2001年８月１日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		(㎡)	
馬司遺跡（まつかさ）	奈良県大和郡山市（ならけんやまとこおりやまし）馬司町（まつかさ）	29203		34°36′37″	135°47′17″	1999.11.8～2000.3.28	2000	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
馬司遺跡	集落	中世～近世	集落内区画溝・土坑	中世土器・陶磁器 近世土器・陶磁器	1620年代の良好な一括資料が出土

図　　版

図版1　馬司遺跡

調査区全景空中写真（左が北）

図版2　馬司遺跡

1　調査区東半空中写真（上が北）

2　調査区西半空中写真（上が北）

1　調査区全景空中写真（東上空より）

2　調査区全景空中写真（西上空より）

1　調査前の風景（東より）

2　小字「堂ノ前」地区の土層（北東より）※図15に対応

1　SD－02　2層遺物出土状況（南より）

2　SD－02　3層遺物出土状況（北より）

図版6　馬司遺跡

1　調査区東半完掘状況（南西より）

2　調査区西半完掘状況（北東より）

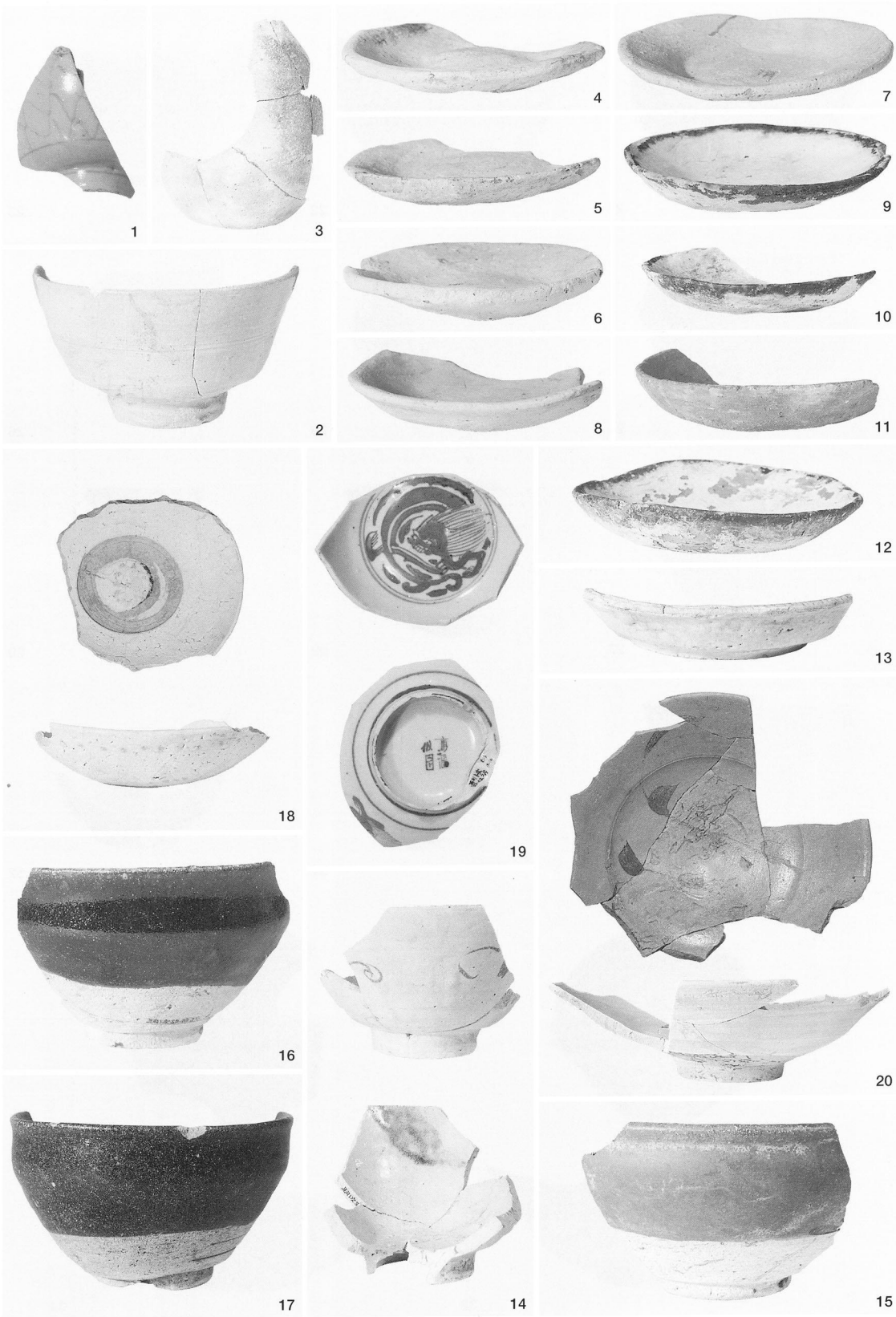
1　SD－02　完掘状況（南東より）

2　SX－13・14　完掘状況（南より）

図版8　馬司遺跡

1　SD－01・02およびSD－17　完掘状況（北東より）

2　SD－17　遺物出土状況（東より）　※図20に対応



SD－02　1層出土遺物および2層出土遺物①

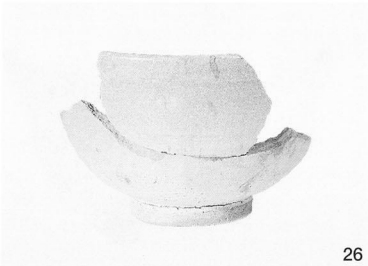
21

22

23

24

25


26

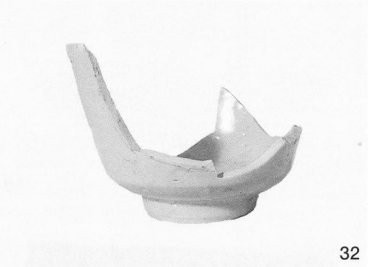
27

28

29

30

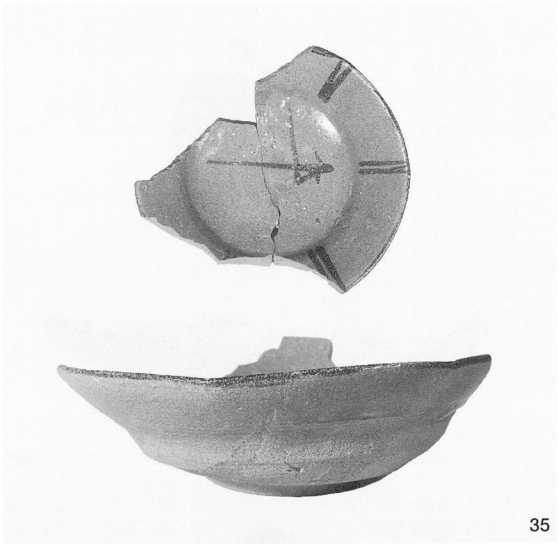
31


32

33

34

SD－02　2層出土遺物②

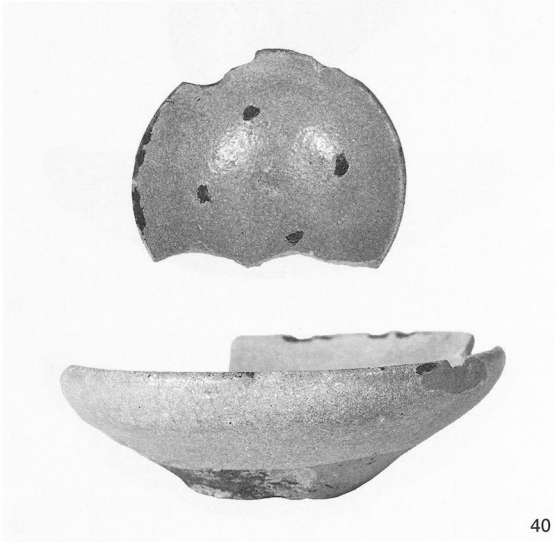

35

36

37

38

39


40

SD－02　2層出土遺物③

41

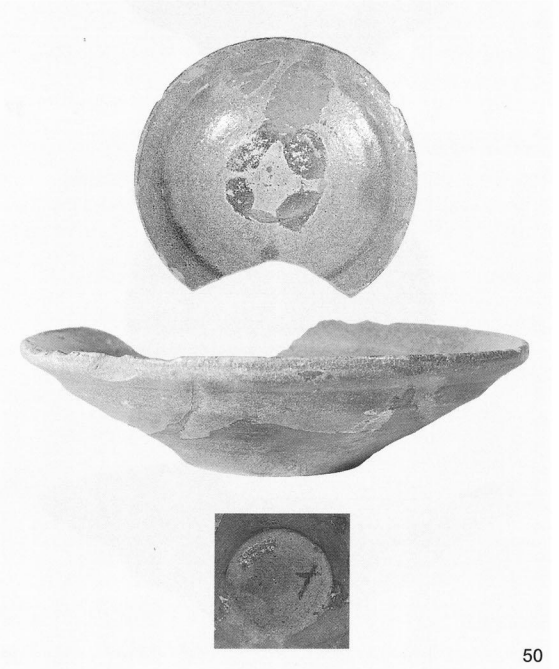
42

43

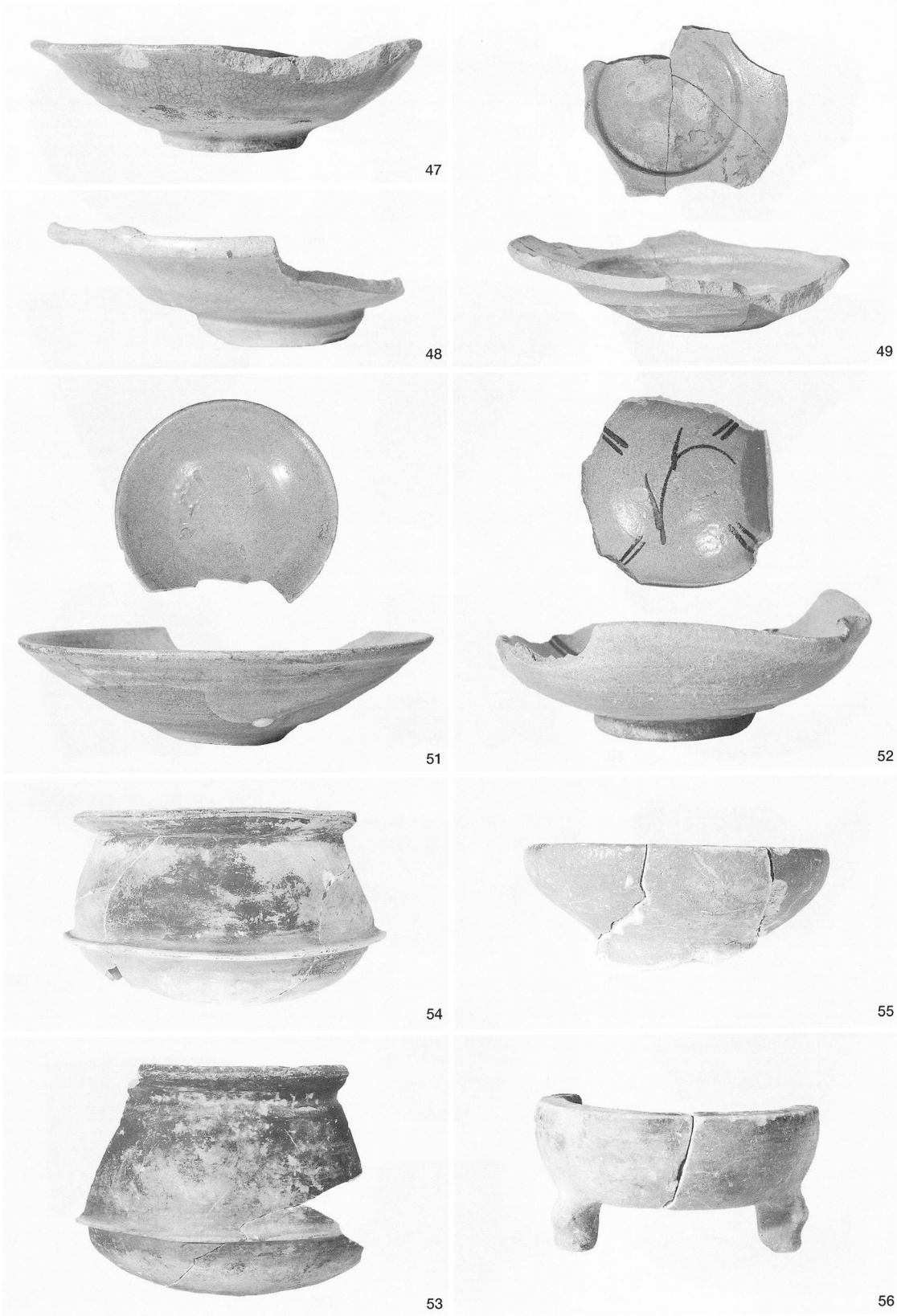
44

45

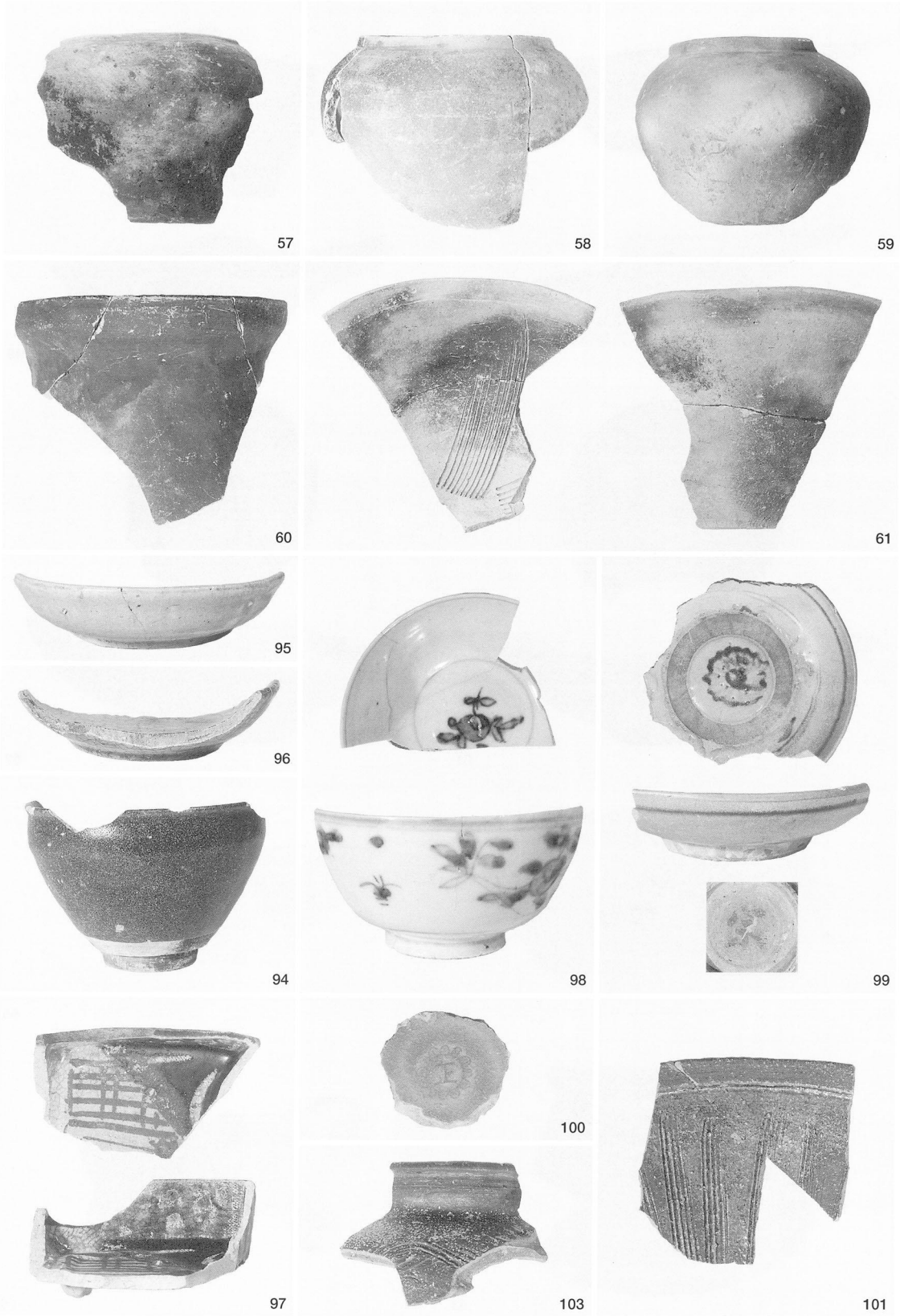
46


50

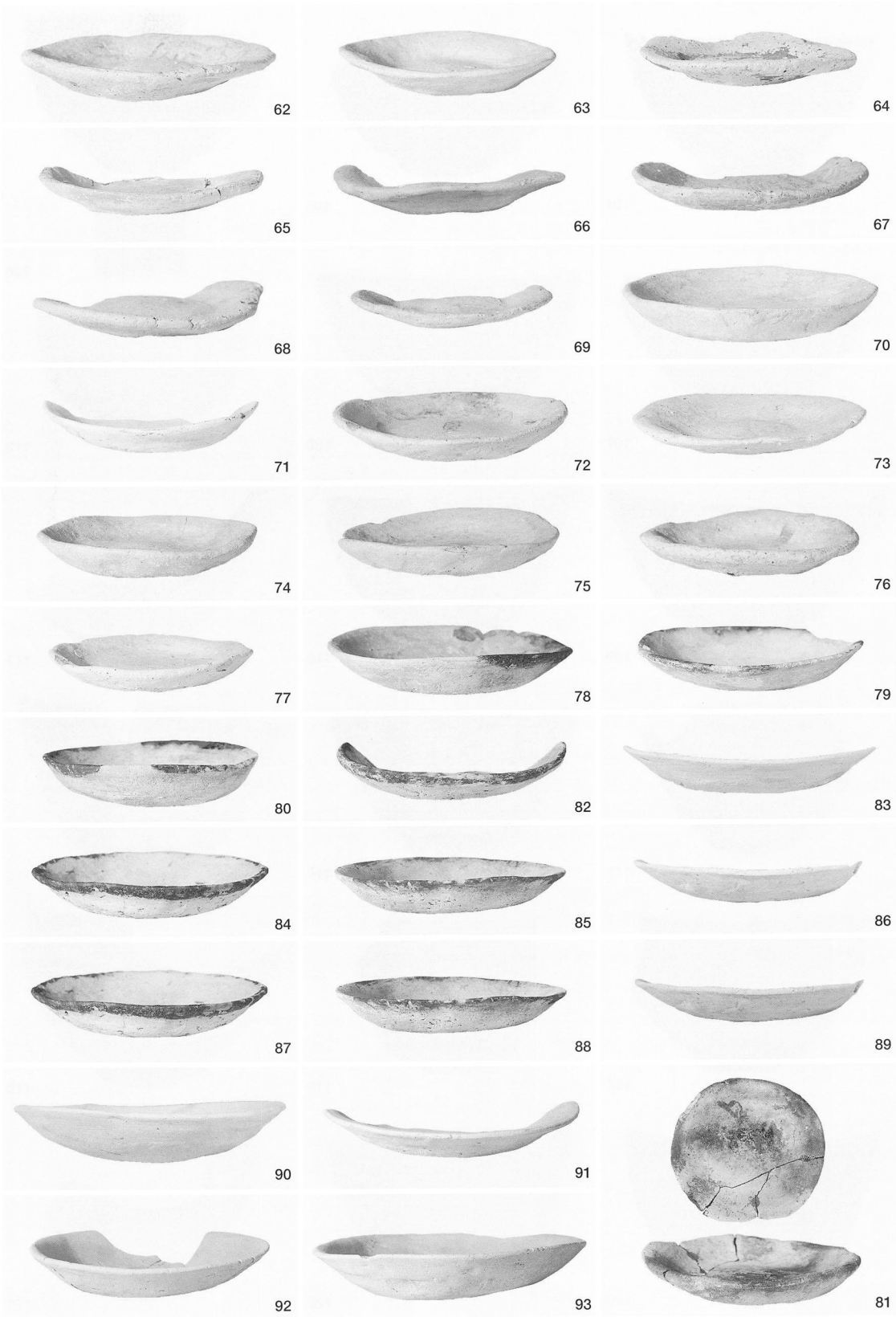
SD－02　2層出土遺物④



SD－02　2層出土遺物⑤



SD－02　2層出土遺物⑥および3層出土遺物①



SD－02　3層出土遺物②

104

105

106

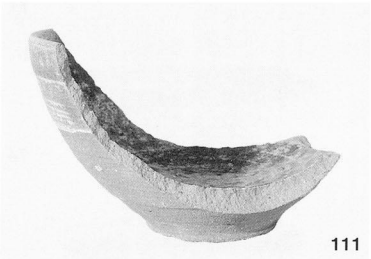
107

108

112

109

110


111

113

114

115

117

116

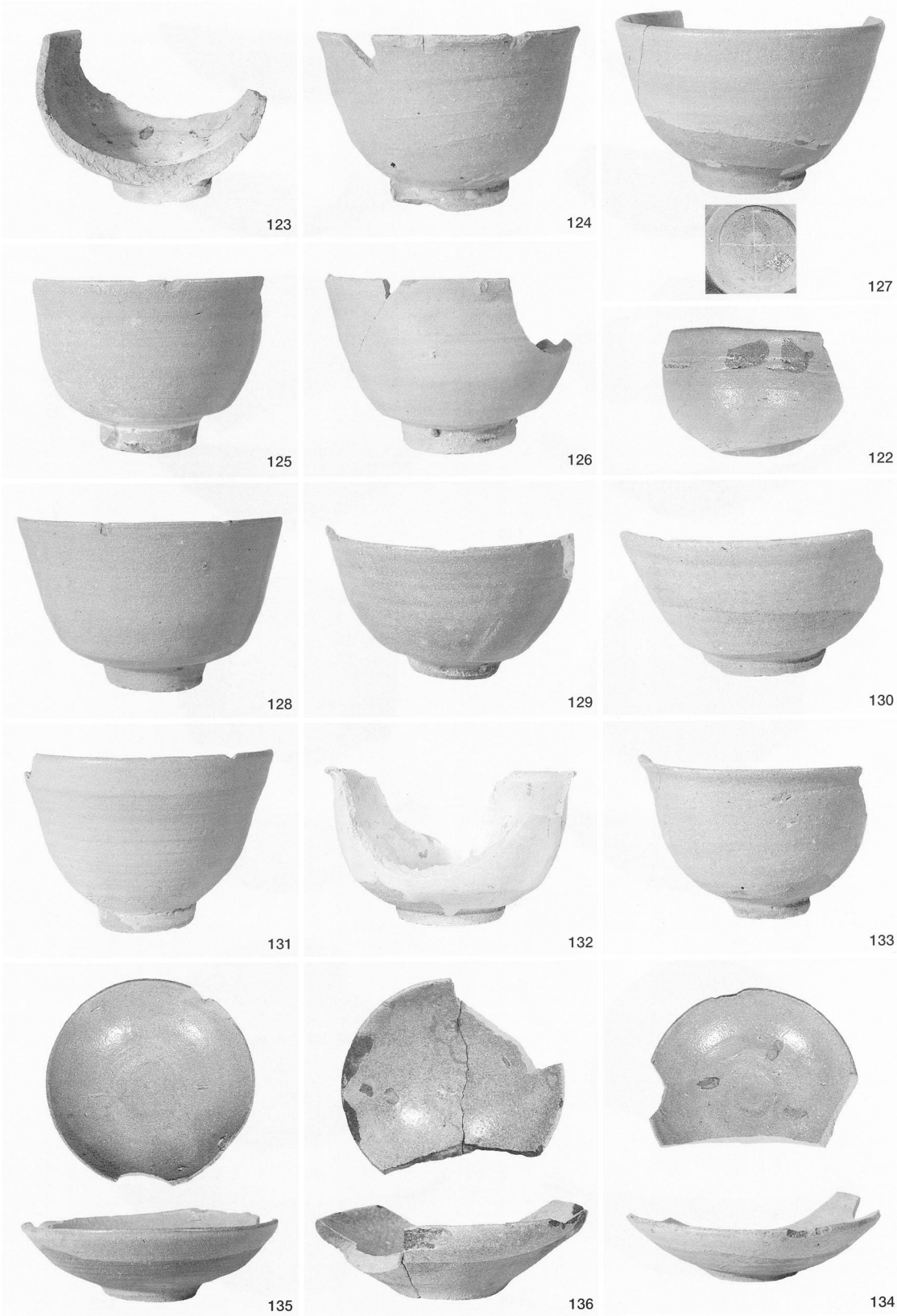
118

119

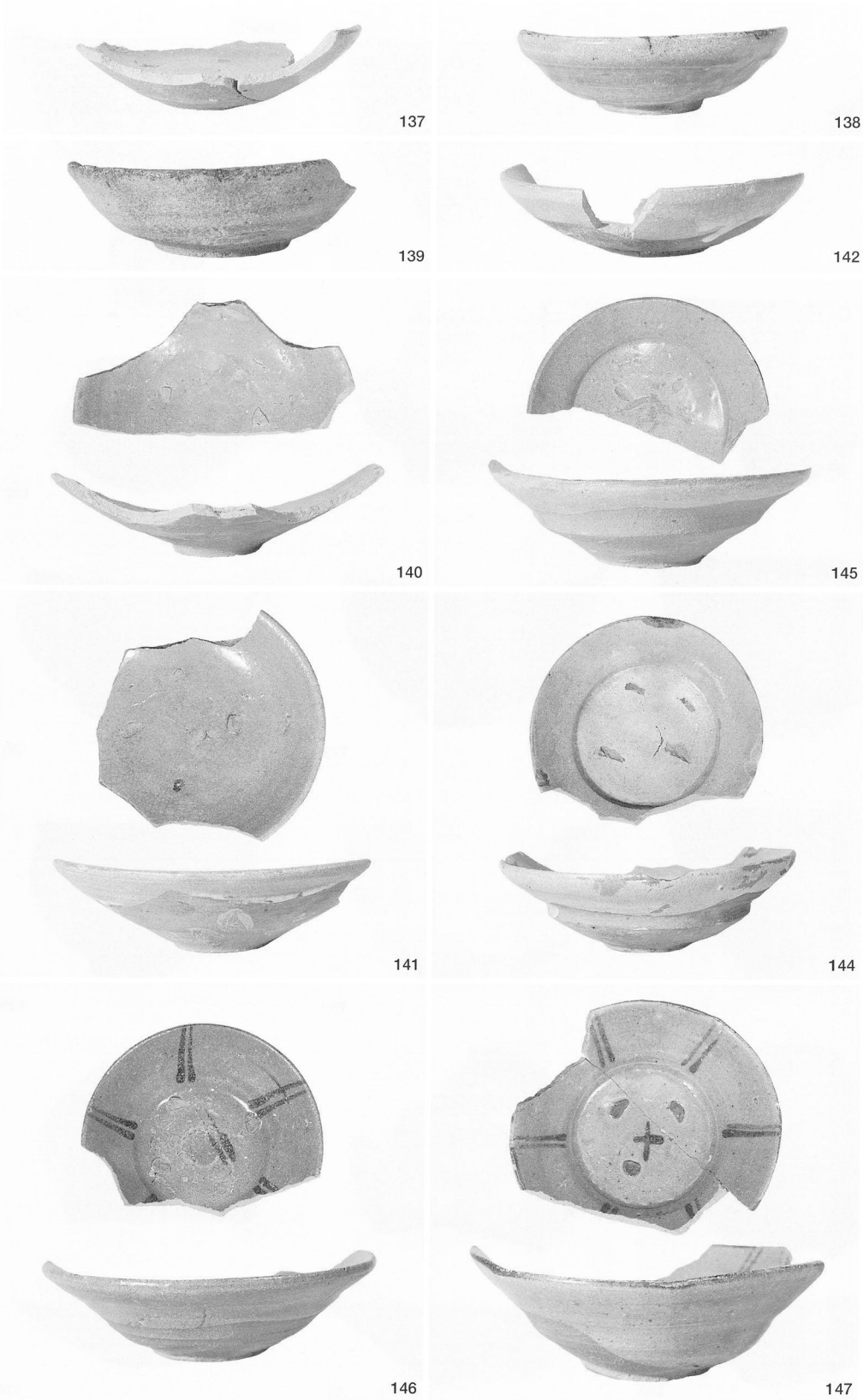
120

121

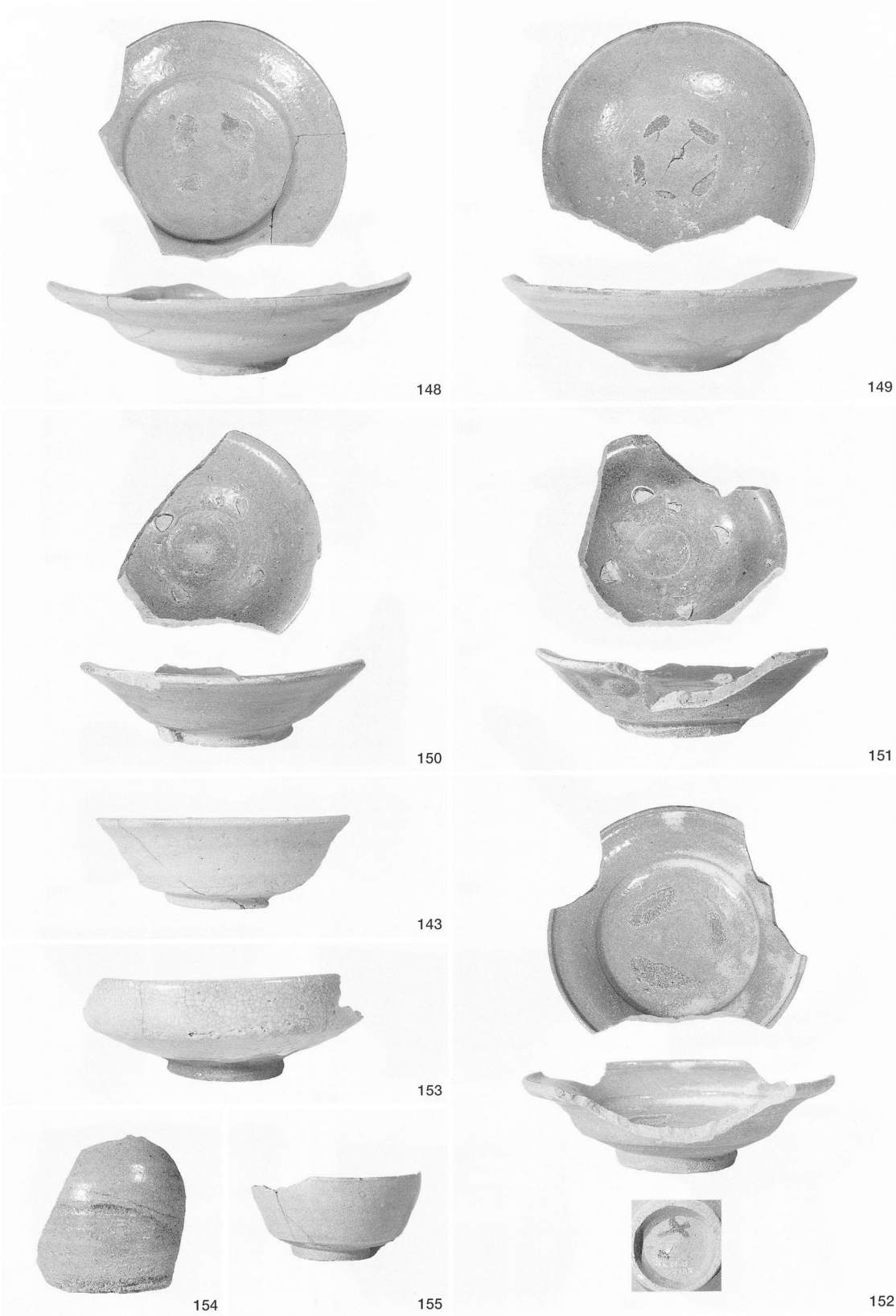
SD－02　3層出土遺物③



SD－02　3層出土遺物④

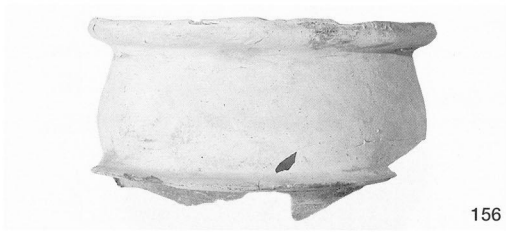


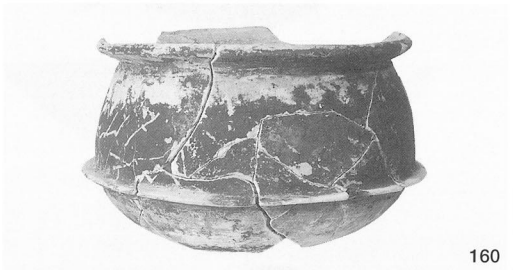
SD－02　3層出土遺物⑤

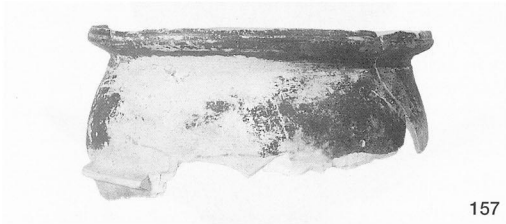


SD－02　3層出土遺物⑥

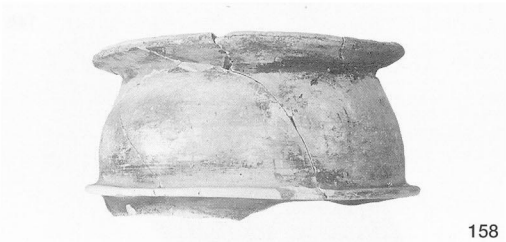
159

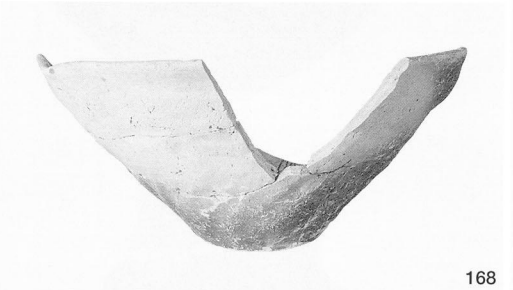

156

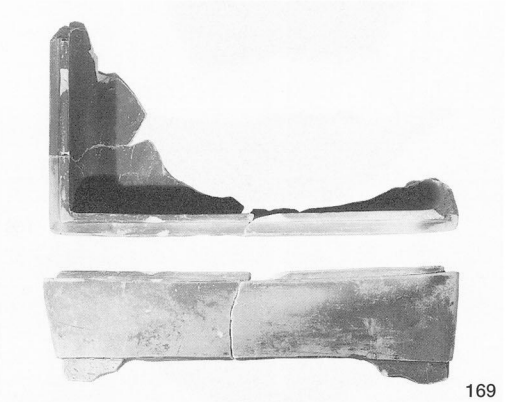

160


157

161


158


168


169

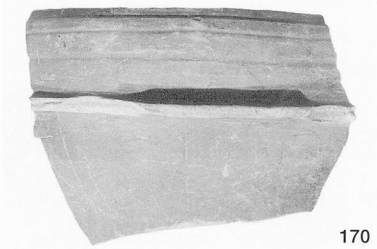
162

163

165

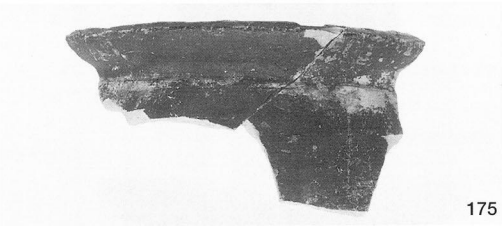
164

166

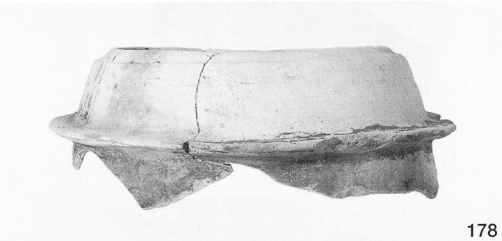

170

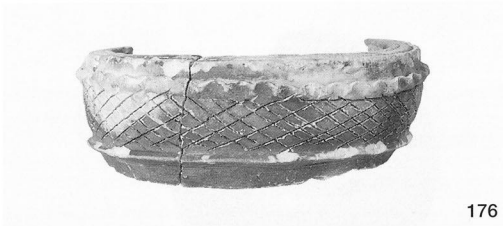
SD－02　3層出土遺物⑦

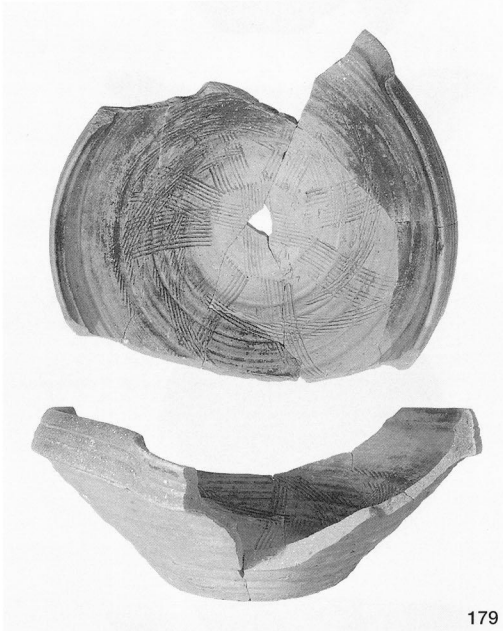
171

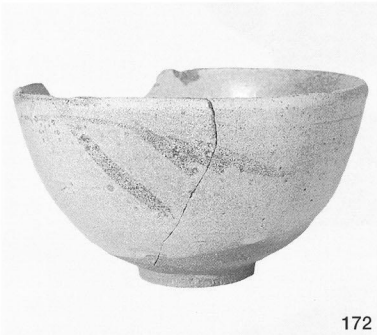

175

177


178


176


179


172

173

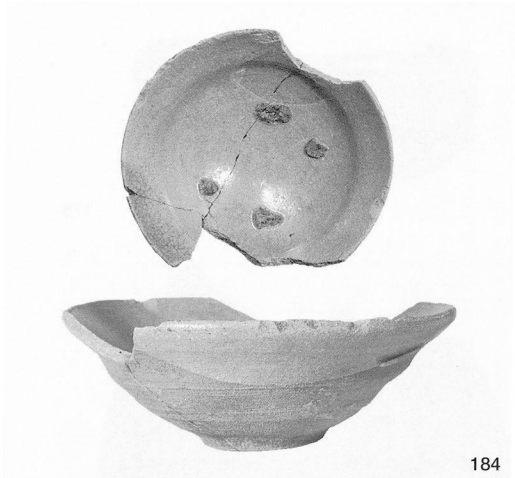
181

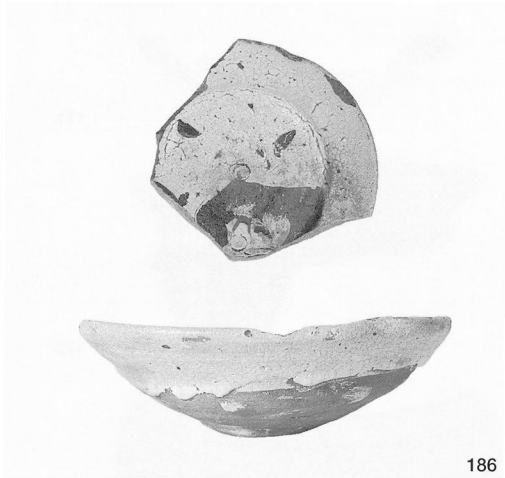
180

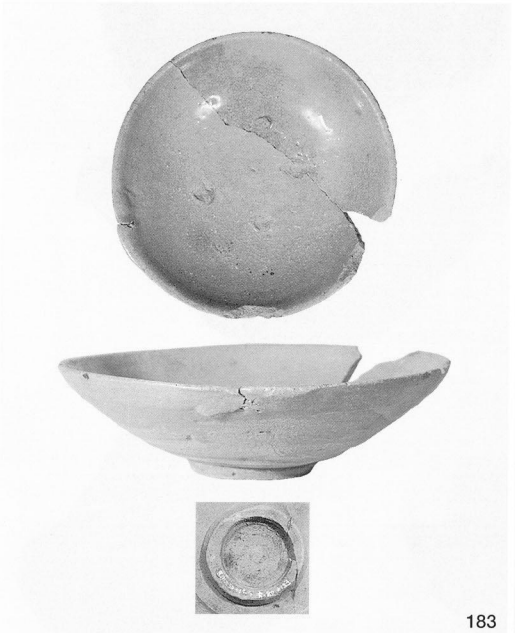
174

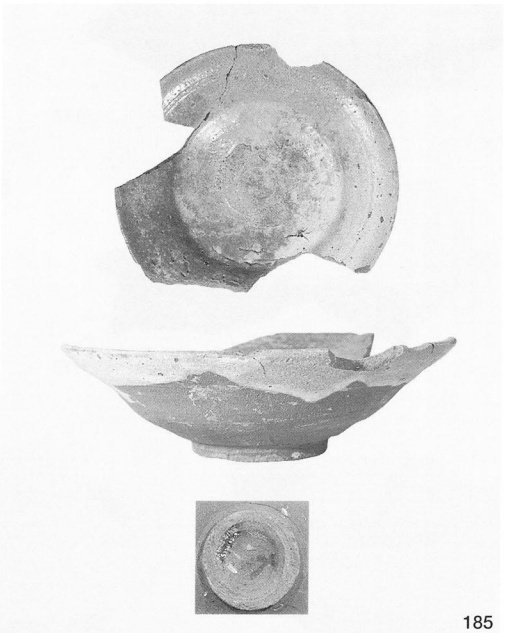
182

SD－04　1層出土遺物および2層出土遺物①

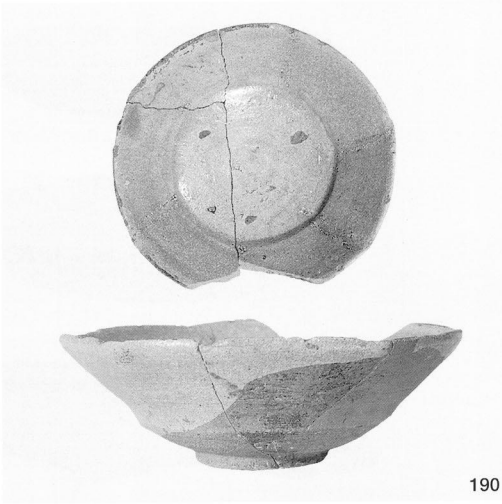


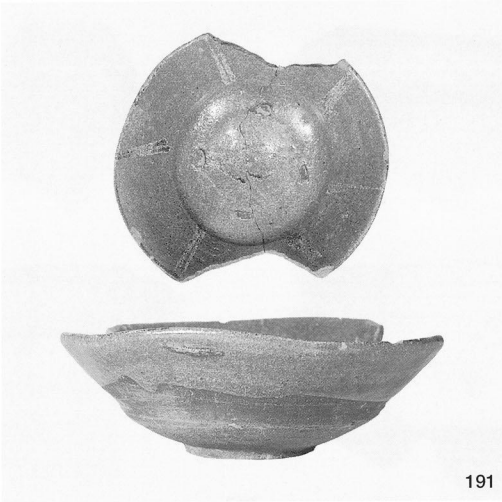


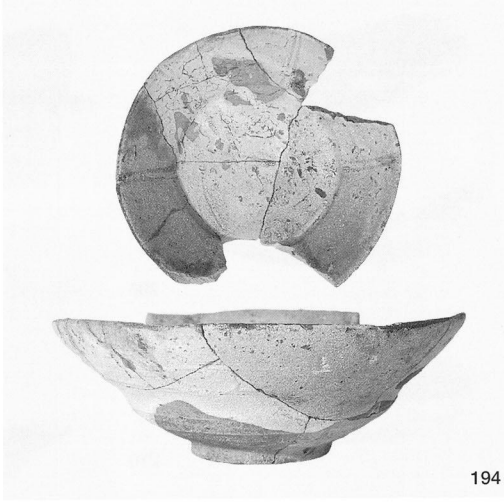


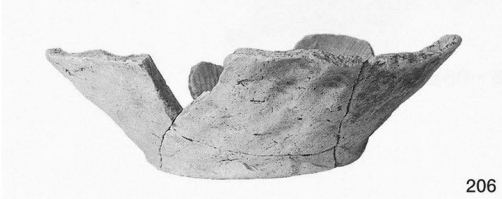


SD－04　2層出土遺物②



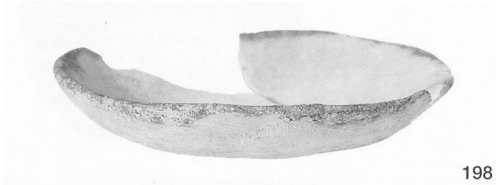






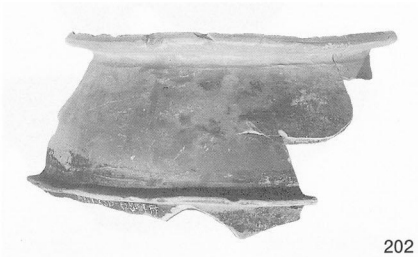
SD－04　2層出土遺物③およびSX－13、SX－13・14間堤内・SD－06A出土遺物

197

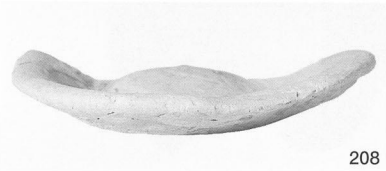

198

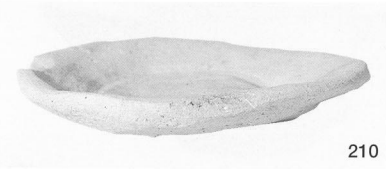
196

203

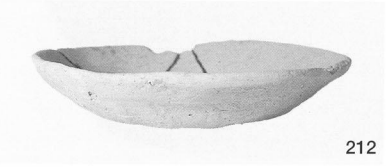

202

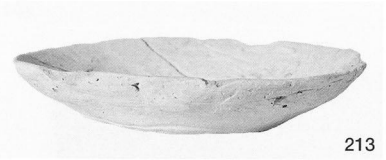
209

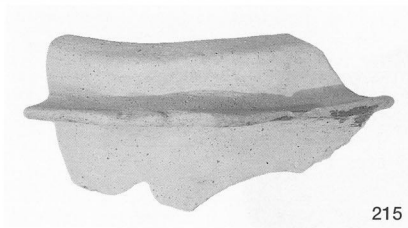

208


210

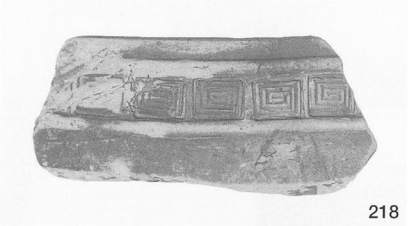
211

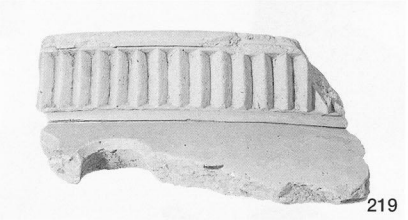

212

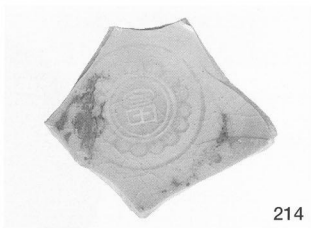

213


215

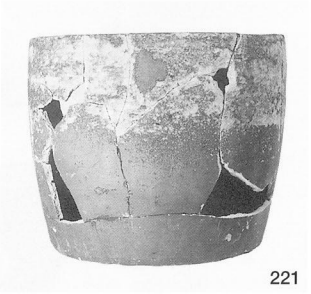
217


218

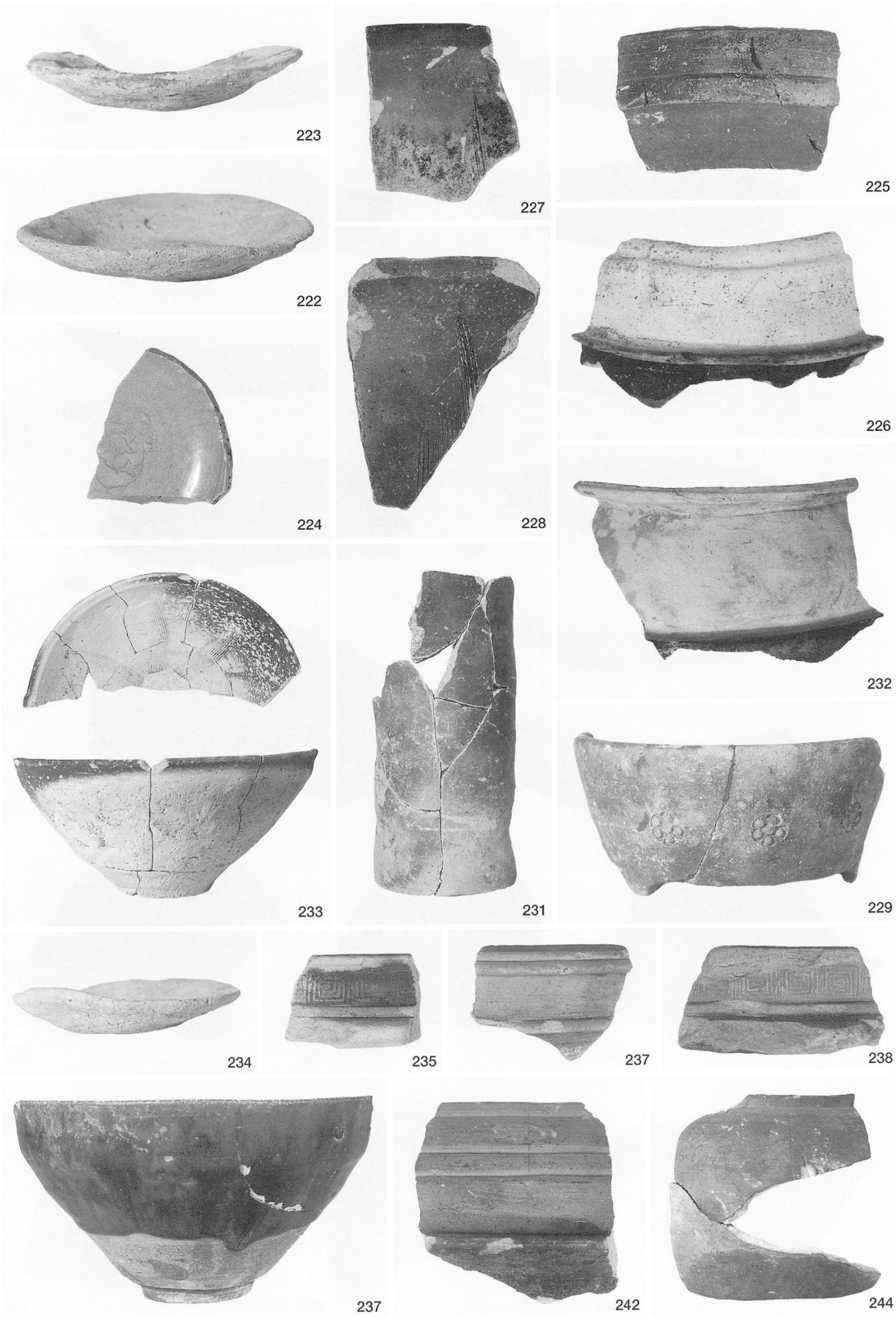

219


214

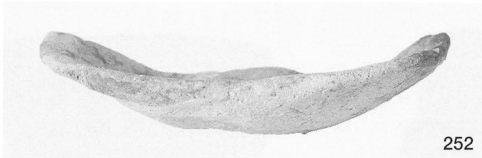
216

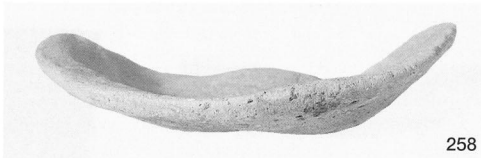

221

SD－05・06出土遺物

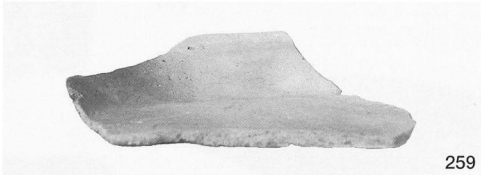


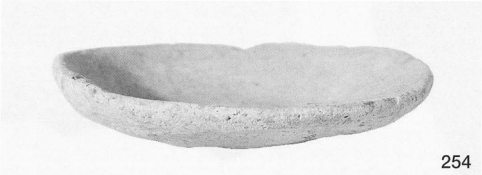
SX－07・SD－01　1層出土遺物および2層出土遺物①


252

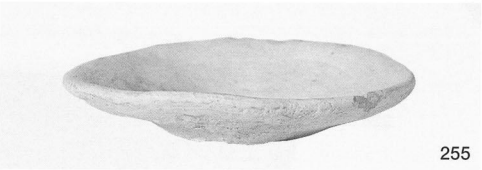

258

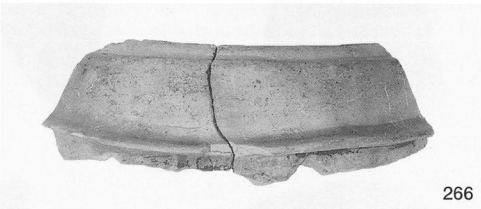
253


259


254

260

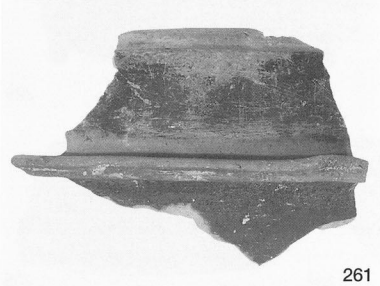

255

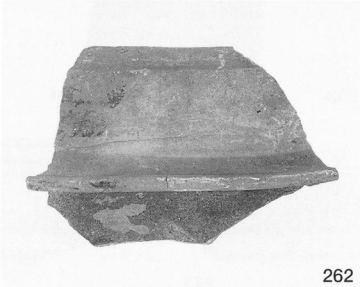

266

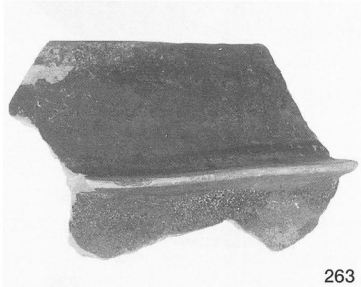
256

264

257


261


262

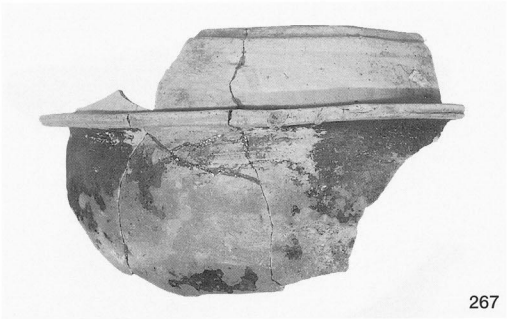

263

265

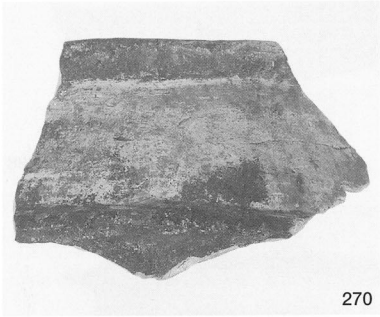
268

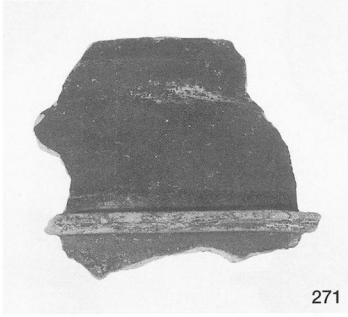
269

SD－01　2層出土遺物②


267

272

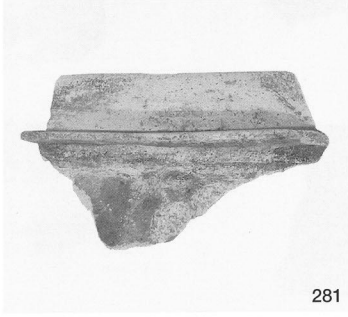

270


271

273

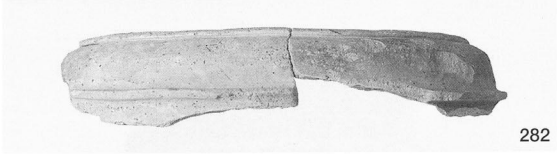
274

280


281

275

278


282

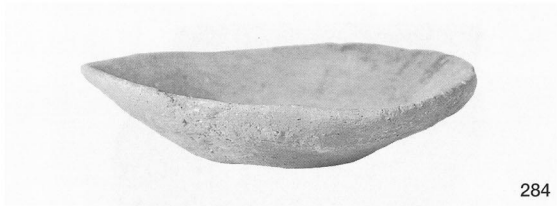
276

283

277

279

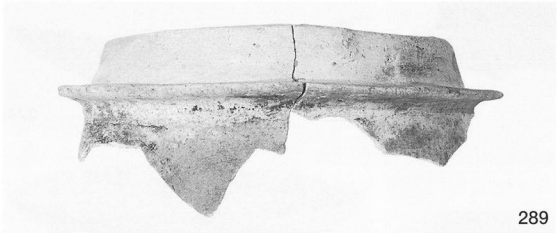
SD－01　2層出土遺物③およびSD－15出土遺物


284

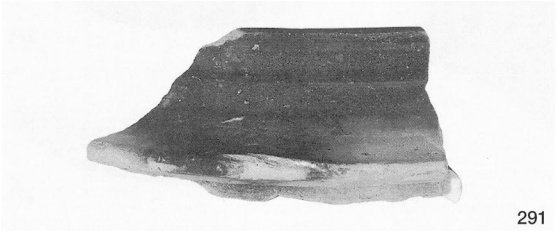
285

287

288


289

290

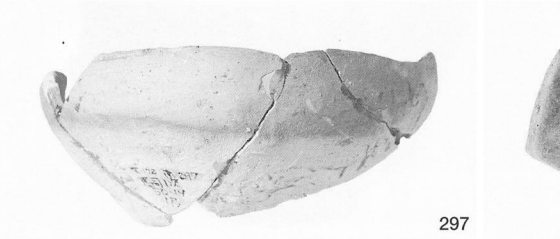

291

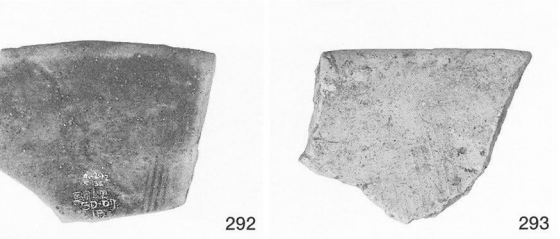
294

296

298

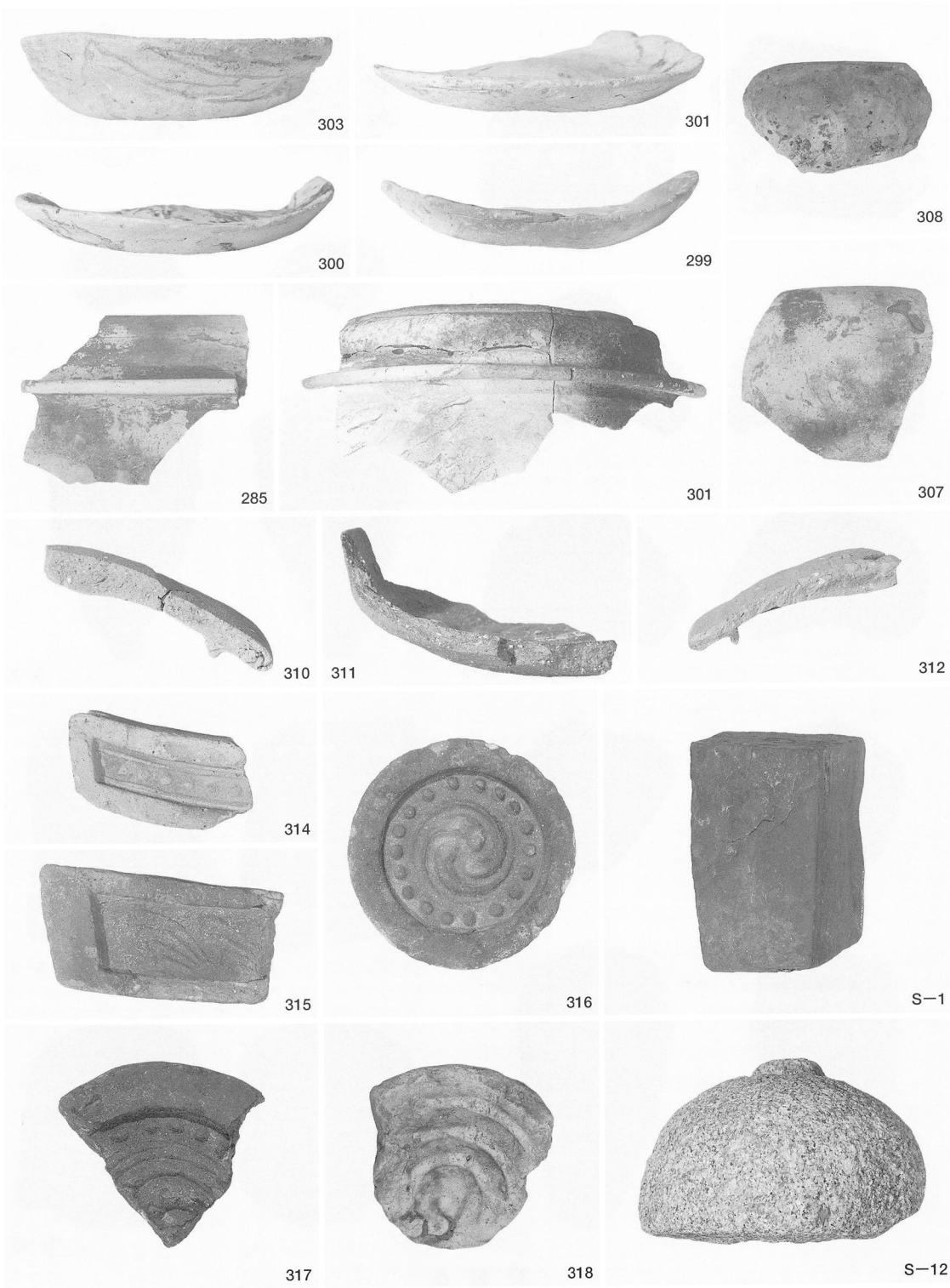
295


297

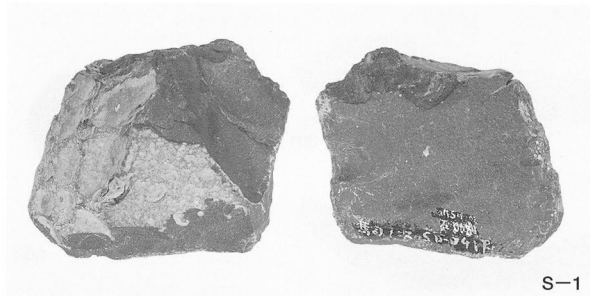

292

293

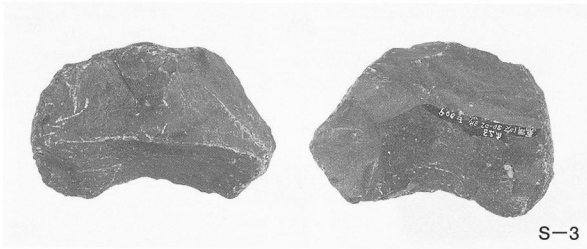
SD－07・SD－14出土遺物

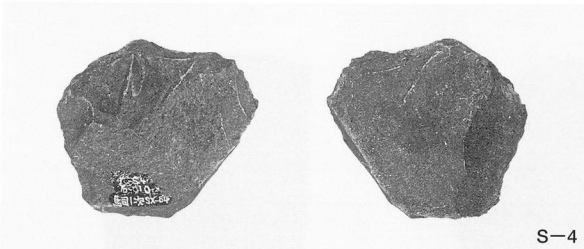


SD−13・SB−01・SB−02出土遺物および瓦・石製品

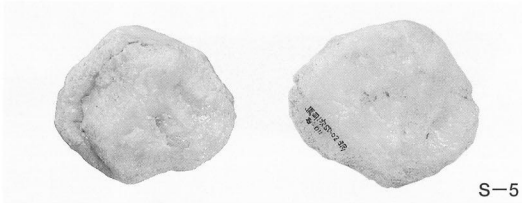

S−1

S−2


S−3

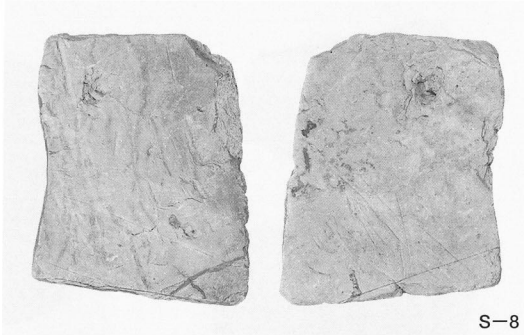

S−4

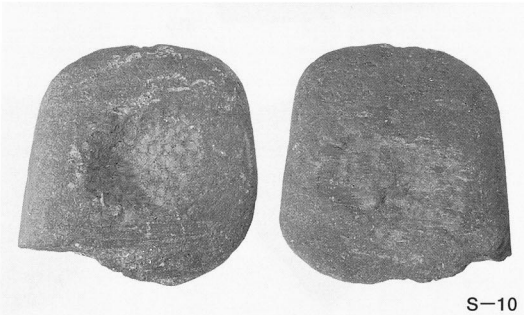
S−9


S−5

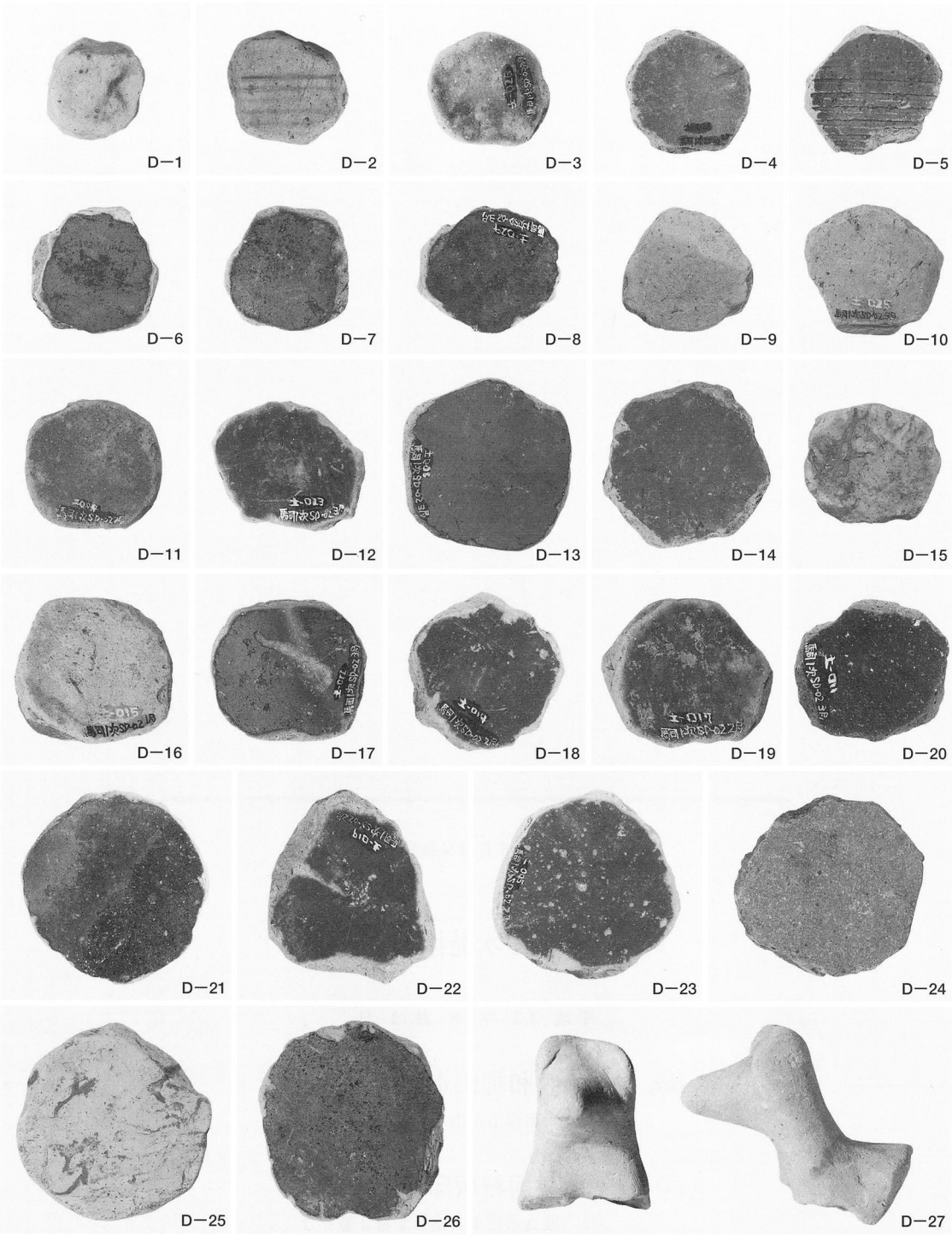
S−6

S−7

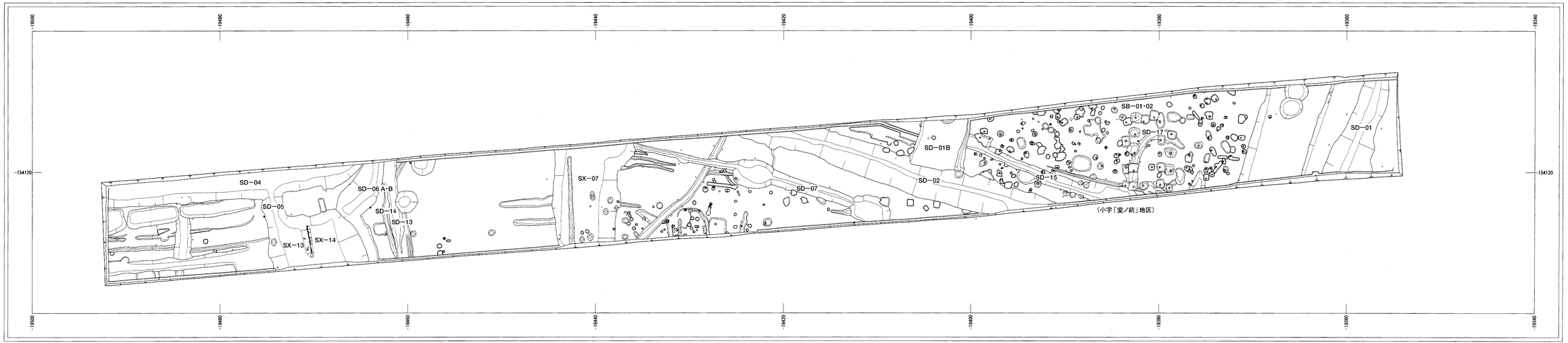

S−8


S−10

石　製　品


D−1
D−2
D−3
D−4
D−5
D−6
D−7
D−8
D−9
D−10
D−11
D−12
D−13
D−14
D−15
D−16
D−17
D−18
D−19
D−20
D−21
D−22
D−23
D−24
D−25
D−26
D−27

土 製 品



馬司遺跡第１次発掘調査遺構全体図（S：1／200）

大和郡山市埋蔵文化財発掘報告書第７集

馬司遺跡第１次発掘調査報告書

平成 13 年 8 月 1 日

編集・発行　大和郡山市教育委員会
大和郡山市南郡山町５５４－１

印　　刷　共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路２丁目２番６号

表紙装丁：山本峰子（箱本館紺屋）